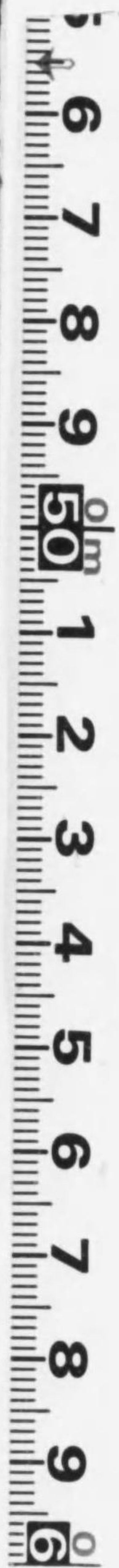
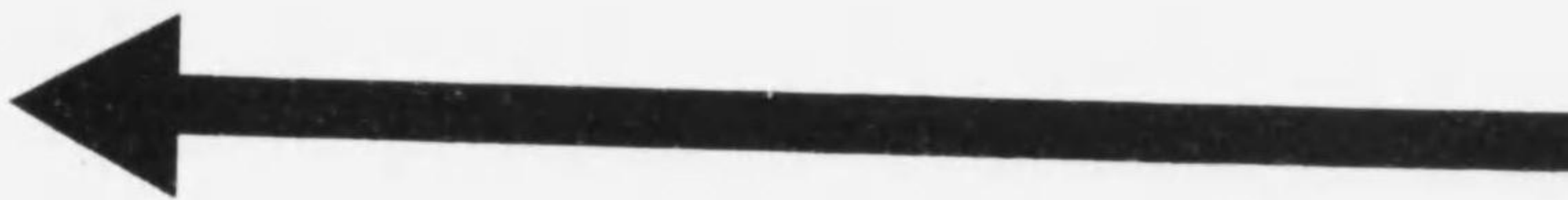


特 237

457



始



埤237
457



宇治拾遺物語



緒言

宇治拾遺物語は其作者詳ならず、この書の成れるは順徳天皇の建保年間にあり。序文には宇治大納言が今昔物語に漏れたる事どもを拾ひ集めたるを、後人また追加して成りたる由いへれど、全く信するに足らず。全篇百九十六段の記事中今昔と同じ話八十餘あり、又隆國薨後の事に屬するもの三十餘あり、今昔の遺漏を拾へるものにもあらず、隆國の作にもあらざることも明なり。これらの考證について其詳細を知らんと欲する人は、故佐藤誠實博士の宇治拾遺物語考史學雜誌第十編第二號を見るべし。要するに作者の見聞、又は今昔物語、古事談等に據りて、種の話説を次第もなく書き列ねたるものながら、文章眞率にして素朴愛すべく、同種類の書中最も勝れたるものなり。

今物語は藤原信實の著にして、主として其時代の歌物語を記す、此書もと數十卷ありきと見え、仁和寺書籍目録には今物語廿七冊存すとあり、されど今傳はるものは僅に一巻なり。信實は長良の裔從五位上皇后宮少進爲隆(寂超)の孫にして、繪畫に長け和歌をよくせし隆信の

子なり、信實官右京權大夫に至り、繪畫和歌共に名手たり、龜山天皇の文永二年十二月十六日歿す、年八十九。

東齋隨筆は一條禪閣兼良の作にして、音樂、人事、詩歌等の部類を分ちて、十訓抄、著聞集等の古書より抄録収集して、一切自己の見聞を交へず。本朝にて隨筆の名を稱するは此書を初とす。兼良は關白藤原經嗣の第二子、文安三年太政大臣に拜せられ、翌年關白氏長者となり、文明十三年四月八十歳にて薨す。博學多聞にして編著頗る多し。嘗て自ら謂ふ、われ菅丞相に勝れるもの三あり、曰く攝家たり、曰く太政大臣たり、曰く延喜以後の事を暗んずと。本集所收の宇治拾遺物語は萬治刊本を底本とし、古活字本註活本と稱す註活本古寫本京都大學所藏を以て對校し、そのよろしきに隨ひ、傍今昔物語、國史大系本、博文館本等を參照せり。今物語は天明六年の單行本に據り、群書類從本、文化十年版の木活字本を對校し、東齋隨筆は群書類從本に據れり。

大正四年二月

校訂者 藤井乙男

目錄

宇治拾遺物語

一—四五〇

卷第一

- 道命阿闍梨和泉式部の許に於て讀經
- 五條道祖神聽聞の事……………一
- 丹波國篠村平茸生の事……………三
- 鬼に瘡取らるゝ事……………四
- 伴大納言の事……………二〇
- 隨求陀羅尼額に籠むる法師の事……………二二
- 中納言師時法師の玉莖檢知の事……………二三
- 龍門の聖鹿にかばらんとする事……………二四
- 易のうらなひして金取り出したる事……………二六
- 宇治殿倒れさせ給ひて實相房僧正驗者者に召さるゝ事……………二八
- 兼久通俊卿の許に向つて惡口事……………二九

目錄

卷第二

- 源大納言雅俊一生不犯の金うたせたる事……………三〇
- 兒のかいもちするに空腹したる事……………三二
- 田舎の兒櫻の散るを見て泣く事……………三三
- 小藤太聲におどされたる事……………三四
- 大童子鮭ぬすみたる事……………三五
- 尼地藏見たてまつる事……………三七
- 修行者百鬼夜行に逢ふ事……………三九
- 利仁薯蕷粥の事……………三一
- 清徳聖きどくの事……………四二
- 靜觀僧正雨を祈る法驗の事……………四三
- 同僧正大嶽の岩祈り失ふ事……………四六
- 金峯山箔打の事……………四七
- 用經あらまきの事……………四九
- 厚行死人を家より出す事……………五〇

一

鼻長き僧の事……………五
 晴明藏人少將を封する事……………六〇
 季通映に逢はんとする事……………六三
 袴垂保昌に逢ふ事……………六六
 明衡映に逢はんとする事……………六八
 唐卒都婆に血つくる事……………七三
 業村強力の學士に逢ふ事……………七五
 柿木に佛現する事……………八〇

卷 第三

大太郎盗人の事……………八二
 藤大納言忠家物言ふ女放屁の事……………八五
 小式都内侍定頼痢の經にめでたる事……………八六
 山伏船祈りがへす事……………八七
 鳥羽僧正國俊と戯るゝ事……………八九
 繪佛師良秀家の焼くるを見てよろ

こぶ事……………九一
 虎の鰯とりたる事……………九二
 樵夫歌の事……………九五
 伯の母の事……………九六
 同人佛事の事……………九八
 藤六の事……………九九
 多田新發意郎等の事……………一〇〇
 因幡國別當地藏作りさしたる事……………一〇一
 伏見修理大夫俊綱の事……………一〇三
 長門前司女葬送の時本處にかへる事……………一〇六
 雀恩を報ゆる事……………一〇八
 小野篁廣才の事……………一一五
 平貞文本院侍從等の事……………一二六
 一條攝政歌の事……………一二九
 狐家に火つくる事……………一三〇

卷 第四

狐人につきてしとき食ふ事……………一三三
 佐渡國にある金の事……………一三三
 藥師寺別當の事……………一三四
 妹背島の事……………一三七
 石橋の下の蛇の事……………一三九
 東北院菩提講聖の事……………一四三
 三河入道通世世に聞ゆる事……………一四五
 進命婦清水まうでの事……………一三七
 業遠朝臣蘇生の事……………一三九
 篤昌忠恒等の事……………一三九
 後朱雀院丈六の佛作り奉り給ふ事……………一四〇
 式部大輔實重賀茂の御正體拜見の事……………一四一
 智海法印癩人と法談の事……………一四二
 白河院御殿の時物におそばれさせ給ふ事……………一四三

卷 第五

永超僧都魚食ふ事……………一四三
 了延房に實因湖水の中より法文の事……………一四四
 慈惠僧正戒壇つきたる事……………一四四
 四の宮河原地藏の事……………一四六
 伏見修理大夫の許へ殿上人ども行きむかふ事……………一四七
 以長物忌の事……………一四八
 範久阿闍梨四方を後にせざる事……………一五一
 陪從家綱兄弟互に謀りたる事……………一五一
 陪從清仲の事……………一五四
 假字層あつらへたる事……………一五五
 實子にあらざる人實子のよししたる事……………一五六
 御室月僧正の事並一乘僧正の事……………一六一

或僧人の許にて水魚ぬすみくひた
る事……………一六四

仲胤僧都地主権現説法の事……………一六六

大二條殿に小式部内侍歌よみかけ
奉る事……………一六七

山横川賀能地藏の事……………一六八

卷第六

廣貴妻の訴に依りて閻魔王宮へめ
さるゝ事……………一七〇

世尊寺に死人を掘りいだす事……………一七三

留志長者の事……………一七五

清水寺に二千度参詣の者雙六にう
ち入るゝ事……………一七七

観音經蛇に化して人を助け給ふ事……………一七九

賀茂の社より御幣紙米等たまふ事……………一八三

信濃國筑摩の湯に観音沐浴の事……………一八五

卷第七

帽子叟孔子と問答の事……………一八七

僧伽多羅利の國に行く事……………一八八

五色鹿の事……………一九六

播磨守爲家の侍佐多の事……………二〇〇

三條中納言水飯の事……………二〇四

檢非違使忠明の事……………二〇六

長谷寺参籠の男利生にあづかる事……………二〇六

小野宮大嬖の事付四宮殿富小路大
臣等大嬖の事……………二一五

式成源滿則員等三人瀧口の弓藝に
召さるゝ事……………二一九

卷第八

大膳大夫以長前斬問ふ事……………二二〇

下野武正大風雨の日法性寺殿にま

卷第九

ある事……………二二三

信濃國聖の事……………二二三

敏行朝臣の事……………二二九

東大寺華嚴會の事……………二二七

獵師佛を射る事……………二二八

千手院僧正仙人に逢ふ事……………二四一

卷第九

瀧口道則術を習ふ事……………二四三

寶志和尚影の事……………二四八

越前敦賀の女観音助け給ふ事……………二四九

くうすけが佛供養の事……………二五八

恒政が那等佛供養の事……………二六三

歌詠みて罪を免るゝ事……………二六六

大安寺別當の女に嫁する男夢見る
事……………二六八

博打撃入の事……………二七〇

卷第十

伴大納言應天門を焼く事……………二七三

放鷹樂明運に是季がならふ事……………二七七

堀河院明運に笛ふかせ給ふ事……………二七七

淨藏が八坂坊に強盜入る事……………二七九

播磨守佐大夫が事……………二八〇

吾嬬人生贊を止むる事……………二八二

豐前王の事……………二八九

藏人頼死の事……………二九〇

小槻當平の事……………二九二

海賊發心出家の事……………二九四

卷第十一

青常の事……………三〇〇

保輔盗人たる事……………三〇四

晴明を心みる僧の事付晴明蛙を殺

す事……………三〇五
 河内守頼信平忠恒をせむる事……………三〇七
 白河法皇北面受領の下りのまれの事……………三二〇
 藏人得業猿澤池の龍の事……………三二二
 清水寺御帳たまはる女の事……………三二三
 則光盗人をきる事……………三二六
 空入水したる僧の事……………三三〇
 日藏上人吉野山にて鬼に逢ふ事……………三三三
 丹後守保昌下向の時致経が父に逢ふ事……………三三五
 出家功德の事……………三三六

卷第十二

持經者観實効験の事……………三三五
 空也上人の臂観音院僧正祈りなほす事……………三三七
 増賀上人三條の宮に参り振舞の事……………三三八
 聖賢僧正大路をわたる事……………三三九
 穀断の聖不實露顯の事……………三四〇
 季直少將歌の事……………三四三
 樵夫の小童隠題の歌よむ事……………三四三
 高忠の侍うたよむ事……………三四四
 貫之うたの事……………三四六
 東人うたの事……………三四六
 河原院に融公の靈住む事……………三四七
 八歳の童孔子と問答の事……………三四八
 鄭大尉の事……………三四九
 貧俗佛性を観じて富める事……………三四九
 宗行の耶等虎を射る事……………三五〇
 遣唐使の子虎に食はるる事……………三五四

或上達部中將の時召人に逢ふ事……………三五五
 陽成院妖物の事……………三五八
 水無瀬殿むさくひの事……………三五九
 一條棧敷屋鬼の事……………三六〇

卷第十三

慈覺大師額懸城に入り給ふ事……………三八二
 渡天の僧穴に入る事……………三八五
 寂照上人鉢を飛ばす事……………三八六
 清瀧川聖の事……………三八八
 優婆喩多弟子の事……………三九〇

卷第十四

上綏の主金を得る事……………三六一
 元輔落馬の事……………三六四
 利延迷神にあふ事……………三六七
 龜を買ひてはなす事……………三六八
 夢買ふ人の事……………三七〇
 大井光遠の妹強力の事……………三七三
 或唐人女の羊に生れたるを知らずして殺す事……………三七四
 出雲寺別當の鯰になりたるを知りながら殺して食ふ事……………三七六
 念佛の僧覺往生の事……………三七九

海雲比丘弟子童の事……………三九三
 寛朝僧正勇力の事……………三九六
 經頼蛇に逢ふ事……………三九八
 魚養の事……………四〇二
 新羅國の后金の榻の事……………四〇三
 珠の價量りなき事……………四〇四
 北面の女雜使六の事……………四一〇
 仲胤僧都連歌の事……………四一一
 大將つゝしみの事……………四一二
 御堂關白の御犬晴明等きどくの事……………四一四

高階俊平が弟入道算術の事……………四二七

卷第十五

清見原天皇大友皇子と合戦の事……………四三三

頼時が胡人見たる事……………四三六

賀茂祭のかへり武正兼行御覽の事……………四三九

門部府生海賊射かへす事……………四三〇

土佐の判官代通清人たがひして關
白殿に逢ひ奉る事……………四三三

極樂寺の僧仁王經の驗を施す事……………四三三

伊賀縁の世恒毘沙門御下文の事……………四三六

相應和尚都卒天にのぼる事付染殿
の后祈り奉る事……………四三六

仁戒上人往生の事……………四四一

秦始皇天竺より來たる僧禁獄の事……………四四四

後の千金の事……………四四五

盜跖孔子と問答の事……………四四六

今物語
東齋隨筆

音樂類……………四九一

草木類……………四九七

鳥獸類……………五〇一

人事類……………五〇五

詩歌類……………五〇九

政道類……………五一三

佛法類……………五一四

神道類……………五二三

禮儀類……………五二五

好色類……………五二八

興遊類……………五三一

内容細目……………五三五—五五〇

宇治拾遺物語

世に宇治大納言物語といふ物あり、此大納言は隆國たかくにといふ人なり、西宮殿にしのみやどの高明こうめいの孫俊賢大納言の第二の男なり、年たかうなりては、あつさをわびていとまを申して、五月より八月までは平等院一切經藏びやうどういっさいきやうざうの南の山ぎはに南泉房なんせんぼうといふ所にこもりゐられけり、さて宇治大納言うぢだいなとはきこえけり。もとどりをゆひわけてをかしけなる姿すがたにて、むしろを板にしきてすゞみるはべりて、大なるうちはをもてあふがせなどして、往來ゆきかの者たかきいやしきをいはすよびあつめ、むかし物語をせさせて、我はうちにそひふして、かたるにしたがひておほきなる双紙ふたじにかよれけり。天竺てんたくのこともあり、大唐たいたうのこともあり、日本のこともあり、それがうちにたふときともあり、あはれなる事もあり、きたなき事もあり、少々はそら物語もあり、利口りこうなることもあり、さまざま様々さまざまなり。世の人これをけうじ見る、十五帖じゅうごてふなり。その正本しやうほんはつたはりて、侍從俊貞じじゆうしんしんといひし人のもとにぞありける。いかになりにけるにか、後にさかしき人々かきいれたるあひだ、物語おほくなれり、大納言よりのちの事かき入れたる本もあるにこそ、さるほどに今の世に又物がたりかきいれたるいできたれり、大納言

の物語にもれたるをひろひあつめ、またその後の事などかきあつめたるなるべし、名を宇治拾遺の物語といふ。宇治にのこれるをひろふとつけたるにや、又侍従を拾遺といへば宇治拾遺物語といへるにや、差別しりがたし、おほつかなし。

宇治拾遺物語

卷第一

道命阿闍梨和泉式部の許に於て讀經五條道祖神聽聞の事

今は昔、道命阿闍梨とて、傳殿の子に色にふけりたる僧ありけり。和泉式部に通ひけり。經をめてたく讀みけり。それが和泉式部が行きて臥したりけるに、目覺めて、經を心をすまして讀みけるほどに、八卷讀みはてて、曉にまどろまんとするほどに、人のけはひのしければ、あれは誰ぞと問ひければ、おのれは五條西洞院の邊に候ふ翁に候ふと答へければ、こは何事ぞと道命いひければ、この御經を今宵うけたまはりぬること、生世々忘れ難く候ふといひければ、道命、法華經を讀み奉る事は常のことなり、など今

○此話古事談卷三及び東宮傳家好色部に出づ傳殿東宮の傳藤原道綱



五條の齋いいはゆる道祖神（サヘノカミ）なり

さは一本なし

四威儀一行住坐臥をいふ

恵心一慈恵僧正の弟子源信

平草一草の一種

あつかみ一髪の五六分のびたるをいふにや、此語雜記にも見ゆ

宵しもいはるよぞといひければ、五條の齋いいはく、清くて讀みまゐらせ給ふ時は、梵天ぼんてん帝釋たいしやくを始め奉りて聽聞ちやうもんせさせ給へば、翁などは近づきまゐりて承るに及び候はず、今宵は御行水おんぎやうすゐも候はで讀み奉らせ給へば、梵天帝釋も御聽聞候はぬひまにて、翁まゐりよりて、承りて候ひぬることの忘れ難く候ふなりとの給ひけり。さればはかなくさは讀み奉るとも、清くて讀み奉るべきことなり。念佛ねんぶつ、讀經よみかやう、四威儀しゐゐを破ることなかれと、恵心ゑしんの御房も誠め給ふにこそ。

丹波國篠村平茸生の事

これも今は昔、丹波國たんぱのくに篠村しのむらといふ所に、年比平茸ひらたけやるかたもなく多かりけり。里村さとむらの者これを取りて、人にもこころざし、またわれも喰ひなどして年比過ぐるほどに、その里にとりて主しゅとある者の夢に、頭かしらおつかみなる法師どもの二三十人ばかり出で来て、申すべき事の候ふといひければ、いかなる人ぞと問ふに、この法師ばらは、この年比も宮仕よ

誦一ツサビラと
讀むべし

不淨說法一肉食
女犯の身にて人
に説法すること

大かう一一本
「大上モ」とあり、

くして候ひつるが、この里の縁盡きて、今は他所へ罷り候ひなんすることの、且は哀にも候ふ、又事の由を申さではと思ひて、このよしを申すなりといふと見て、うち驚きて、こは何事ぞと妻や子やなどに語る程に、又その里の人の夢にも、この定に見えたりとて、數多同様にかたれば、心も得で年も暮れぬ。さて次の年の九十月にもなりぬるに、さきざき出で来る程なれば、山に入りて茸を覓むるに、すべて蔬大方見えず、いかなることにかと、里國の者おもひて過ぐるほどに、故仲胤僧都とて、説法ならびなき人いまして、この事を聞きて、こはいかに不淨說法する法師、平茸にうまるといふことのあるものをと、のたまひてけり。さればいかにもく、平茸は喰はざらん、事缺くまじきものとぞ。

鬼に瘤取らるゝ事

これも今は昔、右の顔に大なる瘤ある翁ありけり。大かう山へ行きぬ。雨風はしたなく

又別本に「大かう(指子)程なり人にまじるに及ばねば新をとりて世を過ぐる程に」とあり
とどめき一どやどやいよ

たふさぎ一積鼻

てんの目一天の目又は程の目なるべし
うらう一左右
くどきく一どきくどきの誤
か 或は口説き
具せざるにて言
ふ事のわからぬ
意にや
せざる一一本
「せざる」とあり
五みこだれ一笑
み傾く

て歸るに及ばで、山の中に心にもあらずとまりぬ、又樵夫もなかりけり。おそろしさすべきかたなし。木の空虚のありけるに匍ひ入りて、目も合はず屈まりて居たる程に、遙より人の聲多くして、とどめき來るおとす。いかにも山の中に唯ひとり居たるに、人のけはひのしければ、少しいき出づる心地して見出しければ、大方やうくさまんくなるものども、赤き色には青き物を著、黒き色には赤き物を著、たふさぎにかき、大かた目ひとつあるものあり、口なきものなど、大方いかにも言ふべきにあらぬものども、百人ばかりひしめき集りて、火をてんの目の如くに燈して、我居たる空虚木の前にるまはりぬ。大方いと物おほえず、主とあると見ゆる鬼横座に居たり。うらうへに、二列に居並みたる鬼數を知らず、そのすがたおのくいひ盡し難し。酒まゐらせ遊ぶありさま、この世の人のする定なり。度々土器はじまりて、むねとの鬼殊の外に酔ひたるさまなり。末より若き鬼一人立ちて、折敷をかざして、何といふにかくどきくせよることをいひて、横座の鬼の前にねり出でてくどくめり。横座の鬼、盃を左の手に持ちてゑみこだれたる

悪しく舞ふもあり
原本「舞ふ
もあり」の五字
なし
かなで舞ひか
なづることな
り、珍しき頭を
せよと所望する
なり

よき一舞

ナヅリもナヅリ
身をねぢまぐる
こと
あざみ一樹敷す
ること

をさめの手一節
蔵の奥の手

さま、唯この世の人の如し。舞ひて入りぬ。次第に下より舞ふ。悪しく舞ふもあり、善く舞ふもあり。あさましと見る程に、この横座に居たる鬼のいふやう、今宵の御遊こそいつにも勝れたれ、たどしさもめづらしからんかなでを見ばやなどいふに、この翁物のつきたりけるにや、又神佛の思はせ給ひけるにや。あはれ走り出でて舞はどやと思ふを、一度は思ひ返しつ。それに何となく、鬼どもが打ち揚げたる拍子のよけに聞えければ、さもあれ、たど走り出でて舞ひてん、死なばさてありなんと思ひ取りて、木の空虚より、烏帽子は鼻に垂れかけたる翁の腰に、よきといふ木切るものさして、横座の鬼の居たる前に躍り出でたり。この鬼ども躍り上りて、こは何ぞと騒ぎあへり。翁伸びあがり屈まりて、舞ふべきかぎり、すぢりもぢり、えいこゑを出して一庭を走り廻り舞ふ。横座の鬼より始めて、集り居たる鬼どもあざみ興す。横座の鬼のいはく、多くの年比この遊をしつれども、いまだかよるものこそ逢はざりつれ、今よりこの翁、かやうの御遊に必ずまるれといふ。翁申すやう、沙汰に及び候はずまるり候ふべし、このたび俄にて、を



候はんずらんと
—原本との字な
し

瘤は福の物—醫

すぢなき事—せ
んかたなき事

さめの手も忘れ候ひにたり、かやうに御覽にかなひ候はど、靜しづかに仕うまつり候はんといふ。横座の鬼、いみじう申したり必ず参るべきなりといふ。奥の座の三番に居たる鬼、此翁はかくは申し候へども、参らぬ事も候はんすらんとおほえ候ふ、質しちをや取らるべく候ふらんといふ。横座の鬼、しかるべしくといひて、何をか取るべきと、おのく言ひ沙汰するに、横座の鬼のいふやう、かの翁が面おもてにある瘤をやとるべき、瘤は福の物なれば、それをや惜み思ふらんといふに、翁がいふやう、唯目鼻をばめすとも、この瘤はゆるし給ひ候はん、年比持ちて候ふ物を、故なくめされ、すぢなき事に候ひなんといへば、横座の鬼、かう惜み申すものなり、唯それを取るべしといへば、鬼よりて、さは取るぞとて、捻ねぢて引くに大方痛きことなし。さて必ずこの度の御遊に参るべしとて、曉あけに鳥など鳴きぬれば、鬼どもかへりぬ。翁顔をさぐるに、年比ありし瘤跡かた形なく、搔かい拭ぬぐひたるやうにつやく／＼なかりければ、樵せうらん事も忘れて家に歸りぬ。妻つまのうば、こはいかなりつる事ぞと問へば、云々しんとかたる。あさましき事かなといふ。隣となりにある翁、左の顔に大なる瘤ありけるが、この翁瘤の失せたるを見て、こはいかにして瘤は失せ給ひたるぞ、何なに處なる醫師いしの取り申したるぞ、我に傳へ給へ、この瘤取らんといひければ、これは醫師の取りたるにもあらず、云々しんの事ありて鬼の取りたるなりといひければ、我その定さだにして取らんとて、事の次第を細こまに問ひければ教へつ。この翁いふまゝにして、その木の空うつら虚はに入りて待ちければ、誠まことに聞くやうにして鬼ども出で來たり。居まはりて、酒呑み遊あそびて、いづら翁は参りたるかといひければ、この翁、恐しと思ひながらゆるぎ出でたれば、鬼ども此所こゝに翁参りて候ふと申せば、横座の鬼、こち参れ疾く舞へといへば、前まへの翁よりは、天骨てんこつもなく、おろ／＼かなでたりければ、横座の鬼、この度はわろく舞ひたり、かへす／＼わろし、その取りたりし質しちの瘤返したべといひければ、末すえつ方より鬼出で來て、質しちの瘤返したぶぞとて、今片方かたかたの顔に擲なけつたりければ、うらうへに瘤附きたる翁にこそなりたりけれ、物義ものぎはせまじき事なりとか。

天骨もなく—無
器用

返したぶぞ—返
し給ふぞ

る瘤ありけるが、この翁瘤の失せたるを見て、こはいかにして瘤は失せ給ひたるぞ、何なに處なる醫師いしの取り申したるぞ、我に傳へ給へ、この瘤取らんといひければ、これは醫師の取りたるにもあらず、云々しんの事ありて鬼の取りたるなりといひければ、我その定さだにして取らんとて、事の次第を細こまに問ひければ教へつ。この翁いふまゝにして、その木の空うつら虚はに入りて待ちければ、誠まことに聞くやうにして鬼ども出で來たり。居まはりて、酒呑み遊あそびて、いづら翁は参りたるかといひければ、この翁、恐しと思ひながらゆるぎ出でたれば、鬼ども此所こゝに翁参りて候ふと申せば、横座の鬼、こち参れ疾く舞へといへば、前まへの翁よりは、天骨てんこつもなく、おろ／＼かなでたりければ、横座の鬼、この度はわろく舞ひたり、かへす／＼わろし、その取りたりし質しちの瘤返したべといひければ、末すえつ方より鬼出で來て、質しちの瘤返したぶぞとて、今片方かたかたの顔に擲なけつたりければ、うらうへに瘤附きたる翁にこそなりたりけれ、物義ものぎはせまじき事なりとか。

○伴大納言の事
三代實錄江談抄
古事談等に見ゆ

あはする一妻を
判断する

わらふだ一圓座

犯罪一應天門を
焼きて罪をえし
事十巻に見ゆ

伴大納言の事

これも今は昔、伴の大納言善男は、佐渡國の郡司が従者なり。彼の國にて善男夢に見るやう、西大寺と東大寺とを跨けて立ちたりと見て、妻の女にこのよしをかたる。妻のいはく、その股こそ裂かれんすらめとあはするに、善男驚きて、よしなき事を語りてけるかなと恐れ思ひて、主の郡司が家へ行き向ふ所に、郡司極めたる相人なりけるが、日比はさもせぬに、殊の外に響應して、わらふだとりいで、對ひて召しのほせければ、善男あやしみをなして、我をすかしのほせて、妻のいひつるやうに、股などさかんするやらんと懼れ思ふほどに、郡司がいはく、汝やんごとなき高相の夢見てけり、それによしなき人にかたりてけり、必ず大位には至るとも、事出で来て罪を蒙らんとぞといふ。しかる間善男縁に附きて、上京して大納言に至る。されども犯罪をかうぶる、郡司が詞にたがはず。

隨求陀羅尼額に籠むる法師の事

これも今は昔、人のもとに、ゆよしくことくしく斧負ひ、法螺貝腰につけ、錫杖つきなどしたる山伏の、ことくしくしけなる入り来て、侍の立部内の小庭に立ちけるを、侍、あれはいかなる御房ぞと問ひければ、これは日比白山に侍りつるが御嶽へ参りて、今二千日候はんと仕り候ひつるが、齋料盡きて侍り、まかり預らんと申し上げ給へといひて立てり。見れば、額眉の間のほどに、髮際によりて二寸ばかり疵あり、いまだ生癒にて赤みたり。侍問うていふやう、その額の疵は如何なる事ぞと問ふ。山伏いとたふとくしくし聲をなしていふやう、これは隨求陀羅尼をこめたるぞと答ふ。侍のものども、ゆよしき事にこそ侍れ、足手の指など斬りたるは數多見ゆれども、額破れて陀羅尼こめたるこそ見るとも覺えねといひあひたる程に、十七八ばかりなる小侍の、ふと走り出でうち見て、あなかたはらいたの法師や、なんでふ隨求陀羅尼をこめんするぞ、あれは七條町に、江

御嶽一金峰山
齋料一山に籠り
て齋戒する間の
資料

おほひんがしー
正東
いもじー鑄物師
にて典鑄司の官
人をいふ
さひづゑー和名
抄に「農耕具鑄
也」(佐比郡惠)鑄
也とあり
まのしーとほけ
たるやうにて顔
を伸す意なるべ
し

不動袈裟ー修驗
者の類よりかく
るもの、即ち輪
袈裟
せんずる所ー所
詮

冠者が家の、おほひんがしにあるいもじが妻を、密々に入り臥し／＼せしほどに、去年の夏入りふしたりけるに、男のいもじ歸りあひたりければ、取るものも取りあへず、逃けて西へ走る。冠者が家の前ほどにて、追ひつめられて、さひづゑして額を打ち割られたりしぞかし。冠者も見しはといふを、あさましと人ども聞きて、山伏が顔を見れば、少しも事と思ひたる氣色もせず、少しまのしたるやうにて、その次にこめたるぞと、つれなう言ひたる時に、集れる人ども、一度にはと笑ひたるまぎれに、逃けて去にけり。

中納言師時法師の玉莖檢知の事

これも今は昔、中納言師時といふ人おはしけり。その御許に、殊の外に色黒き墨染の衣の短きに、不動袈裟といふ袈裟かけて、木練子の念珠の大なる、繰りさけたる聖法師入り來て立てり。中納言、あれは何する僧ぞと尋ねらるゝに、殊の外に聲をあはれけになして、假の世にはかなく候ふを忍びがたくて、無始よりこのかた、生死に流轉するは、せ

くは「こは」と
いふに同じ

下記さがりたる
袋ー陰囊のこと
なり

あゝねぶりー敷
通

とばかりー暫時

んずる所煩惱にひかへられて、今にかくてうき世を出でやらぬにこそ、これを無益なりと思ひとりて、煩惱を切り捨てて、偏にこのたび生死のさかひを出でなんと、思ひ取りたる聖人に候ふといふ。中納言、さて煩惱を切り捨てとはいかにと問ひ給へば、くはこれ御覽ぜよといひて、衣の前を掻き上げて見すれば、誠にまめやかのは無くてひけばかりあり。こは不思議のことかなと見給ふほどに、下にさがりたる袋の殊の外に覺えて、人やあると呼び給へば、侍三人出で來たり。中納言、その法師ひきはれとの給へば、聖まのしをして、阿彌陀佛申して、疾く／＼如何にもしたまへといひて、哀けなる顔氣色をして、足をうち廣げておろねぶりたるを、中納言、足を引き廣げよとの給へば、二人寄りて引き廣げつ。さて小侍の十二三計なるがあるを召し出でて、あの法師の股の上を、手を廣げて上げ下しさせるとの給へば、そのまよにふくらかなる手して上げ下しさせる。とばかりある程に、この聖まのしをして、今はさておはせといひけるを、中納言、善けになりたり、たゞさすれ、それ／＼とありければ、聖、さまあしく候ふ、今は

そこち―許多

そくひ―鹿飯

○此話古事談三に出づ

龍門―吉野郡にあり

押しまはし―松火をふりまはすなり

さてといふを、あやにくぞさすり伏せける程に、毛の中より松茸まつたけの大きやかなるもの、ふらくと出で来て、腹にすはくと打ちつけたり。中納言を始め、そこら集つぎひたるものども諸聲もろこゑに笑ふ。聖も手を打ちて、臥しまろび笑ひけり。早うまめやかものを、下の袋へひねり入れて、そくひにて毛を取りつけて、さりけなくして人を謀りて、物を乞はんとしたりけるなり。枉惑まがごころの法師にてありける。

龍門の聖鹿にかはらんとする事

大和國やまとのくにに、龍門りゅうもんといふ所に聖ひじりありけり。住みける所を名にて、龍門の聖ひじりとぞいひける。その聖の親しく知りたりける男の、明暮鹿あけくれしかを殺しけるに、照射さしといふことをしけるころ、いみじう暗かりける夜、照射に出でにけり。鹿を覚めありくほどに、目を合せたりければ、鹿ありけりとて、押しまはしとするに、たしかに目を合せたり。矢比やひらにまはしよりて、火串ひせしに引き懸けて、矢をはけて射んとて弓ふりたて見るに、この鹿の目のあひの、

一ちやう―一張か

しひをりとて―鹿居りとての誤か、博文館本には「火をとり」とあり

例の鹿の目のあはひよりも近くて、目の色も變りたれば、怪しと思ひて、弓を引きさしてよく見けるに、猶怪しかりければ、矢をはづして、火を取りて見るに、鹿の目にはあらぬなりけりと見て、起きば起きよと思ひて、近くまはし寄せて見れば、身は一ちやうの皮にてあり、猶鹿なりとて、又射んとするに、猶目のあらざりければ、たどうちに打ち寄せて見るに、法師の頭かしらに見做しつ。こはいかにと見て、おり走りて火うち吹きてしひをりとて見れば、この聖の目うちたよきて、鹿の皮をひき被かぶきて添そひふし給へり。こはいかにかくてはおはしますぞといへば、ほろくと泣きて、わぬしが制さすることを聞かず、いたくこの鹿をころす、われ鹿に代りて殺されなば、さりとも少しは留とどまりなと思へば、かくて射られんとして居るなり。くちをしう射ざりつとの給ふに、この男伏しまろび泣きて、かくまで思しける事を、あながちにし侍りける事とて、そこにて刀を抜きて弓うち切り、簾やなぐひ皆折り挫くきて、髻もみぢり切りて、やがて聖に具して法師になりて、聖のおはしけるかぎり聖に使はれて、聖うせ給ひければ、代りて又そこにぞ行ひて居たりけ

○此話昔書藝術傳に見えたる陳昭の故事に基くあばれたる一荒廢せること

わきまへ一辨價あらしやさんなめり—あらしは驚歎の詞、しやは馬詞、「さんなめり」は「さあるなめり」の意「さるなる—一本「さりなむ」とあり

るとなん。

易のうらなひして金取り出したる事

旅人の宿覺めけるに、大きやかなる家のあばれたるがありけるによりて、こよに宿し給ひてんやといへば、女聲にて、善きこと宿り給へといへば、皆おり居にけり。屋大きなれども人のありけもなし、たゞ女一人ぞあるけはひしける。かくて夜明けにければ、物喰ひ認めて出でて行くを、この家にある女出でて来て、先出でおはせじ、留り給へといふ。こはいかにと問へば、おのれが金千兩負ひ給へり、そのわきまへしてこそ出で給はめといへば、この旅人の従者共笑ひて、あらしやさんなめりといへば、この旅人暫しといひて、又おり居て、皮子を乞ひ寄せて、幕ひきめぐらして、暫時ばかりありて、この女を呼びければ出で來にけり。旅人問ふやうは、この親は、若し易の占といふことやせられしと問へば、いささや侍りけん、そのし給ふやうなる事はし給ひきといへば、さるな

くは—感詞

まだしきに—いまだ時到着するに

るといひて、さても何事にて千兩金負ひたる、その辨明せよとはいふぞと問へば、おのれが親のうせ侍りし折に、世の中にあるべき程の者など、得させ置きて申しよやう、今なん十年ありてその月に、こよに旅人來て宿らんとす、其人は我金を千兩負ひたる人なり、それにその金を乞ひて、堪へ難からん折は、賣りて過ぎよと申しよかば、今までは親の得させて侍りしものを、少しづつも賣り使ひて、今年となりては賣るべき物も侍らぬまよに、いつしか我親の言ひし月日の疾く來かすと待ち侍りつるに、今日に當りておはして宿り給へれば、金負ひ給へる人なりと思ひて申すなりといへば、金の事はまことなり、さることあるらんとて、女を片隅に引きて行きて、人にも知らせで柱を叩かすれば、空虚なる聲のする所を、くはこれが中の給ふ金はあるぞ、開けて少しづつ取り出でて使ひ給へと、教へて出でいにけり。この女の親の易の占の上手にて、この女の有様を考へけるに、今十年ありて貧しくならんとす。その月日易の占する男、來て宿らんすると考へて、かよる金あると告げては、まだしきに取り出でて、使ひ失ひては貧しくならん

程に、使ふ物なくて惑ひなと思ひて、しか言ひ教へ死にける後にも、この家をも失はずして、今日を待ちつけて、この人をかく責めければ、これも易の占するものにて、心を得て占ひ出して、教へ出でて往にけるなりけり。易のうらかたは、行末を掌のやうにさして、知ることにてありけるなり。

宇治殿倒れさせ給ひて實相房僧正驗者に召さるゝ事

宇治殿—頼通
心譽僧正—三井寺の長吏、藤原重輔の弟
目見入れ—物の怪が見入れし也
護法—法のため
に便殺せらるゝ
鬼神
いみじかりぬる事—殊勝なる事

これも今は昔、高陽院造らるゝ間、宇治殿御騎馬にて渡らせ給ふ間、倒れさせ給ひて、心地違はせ給ふ。心譽僧正に祈られんとて、召しにつかはす程に、いまだ参らざるさきに、女房の局なる小女に物つきて申していはく、別の事にあらず、きと目見入れ奉るによりてかくおはしますなり。僧正参られざるさきに、護法先立ちて参りて、追ひはらひさぶらへば、逃げ終りぬとこそ申しけれ。即ちよくならせ給ひにけり。心譽僧正いみじかりぬる事。

秦兼久通俊卿の許に向つて悪口の事

通俊—中納言經平の子
兼久—袋草紙、全葉集等には兼方とあり
圓宗寺—本名圓明寺、後三條帝の御願所

これも今は昔、治部卿通俊卿後拾遺を撰ばれける時、秦兼久行き向ひて、おのづから歌などや入ると思ひて伺ひけるに、治部卿出でて物がたりして、如何なる歌か詠みたるといはれければ、はかしくしき歌候はず、後三條院隠れさせ給ひて後、圓宗寺に参りて候ひしに、花のにほひは昔に變らず侍りしかば、つかうまつりて候ひしなりとて、

去年見しに色もかはらず咲きにけり花こそものは思はざりけれ

とこそ仕りて候ひしかといひければ、通俊卿よろしく詠みたり。但しけれ、けり、けるなどいふことはいとしもなき詞なり、それはさることにて、花こそといふ文字こそ、女の童などの名にしつべけれとて、いと譽められざりければ、言葉すくなにて立ちて、侍どもありける所によりて、この殿は、大かた歌の有様知り給はぬにこそ、かゝる人の撰集うけ給はりておはするは、あさましきことかな、四條の大納言の歌に、

いとしもなき—
あまりよくもな

四條の大納言—
藤原公任

春來てぞ人も問ひける山里は花こそやどのあるじなりけれ
と詠み給へるはめでたき歌とて、世の人口ひやくぐちにのりて申すめるは、その歌に人もとひける
とあり、又宿の主人あまのぢなりけれとあめるは、花こそといひたるは、それには同じさまなる
に、いかなれば四條大納言のはめでたく、兼久のはわろかるべきぞ、かよる人の撰集う
け給はりて撰び給ふ、あさましき事なりと言ひて出でにけり。侍さむらい通俊の許もとへ行き、兼
久こそかうく申して出でぬれと語りければ、治部卿うちうなづきて、さりけりく、
物ないひそとぞいはれける。

源大納言雅俊一生不犯の金うたせたる事

これも今は昔、京極の源大納言雅俊といふ人おはしけり。佛事をせられけるに、佛前に
て僧そうに鐘かねを打たせて、一生不犯なるを撰びて講を行はれけるに、ある僧そうの禮盤らいばんに登りて、
少し顔氣色違ひたるやうになりて、鐘木かねのきを取りてふりまはして、うちもやらで暫時しばしばか

雅俊一右大臣顯
房公の男、母は
美濃守良住の女

かはつるみ一難
森とも手裡とも
いへり
いくつばかり
一本、いつばか
りともあり

りありければ、大納言いかにも思はれける程に、やゝ久しく物もいはでありければ、人
ども覺束なく思ひけるほどに、この僧そうわなよきたる聲にて、かはつるみはいかど候ふべ
きといひたるに、諸人もろびと願ねがひを放ちて笑ひたるに、一人の侍ありて、かはつるみはいくつばか
りにて候ひしぞと問ひたるに、この僧そう頸くびを捻ひねりて、きと昨夜よるべもして候ひきと言ふに、大
かたどよみあへり。そのまぎれに早う逃げにけりとぞ。

兒のかいもちするに空寝したる事

これも今は昔、比叡ひゑの山やまに見ありけり。僧そうたち宵よるの徒然つれづれに、いざかいもちせんといひ
けるを、この兒心よせに聞きけり。さりとしてし出さん待ちて寝ざらんも、わろかりな
んと思ひて、片方かたがたによりて、寢ねたるよしにて出来るを待ちけるに、既にし出いだしたるさま
にてひしめきあひたり。この兒定めて、驚かさんずらんと待ち居たるに、僧そうの物申しさ
ぶらはん、驚かせ給へといふを、嬉しと思へども、唯一度ひとたびに答へんも、待ちけるかと

心よせに一耳よ
りな事に思ひて
ひしめきあひた
り一驚おどろき合ふ
驚かさん一呼び
起す

念じて一ころへ
忍びて

むごの後一無期
の後にて久しく
経歴て後

やはち一徐々と

我て一我父

もぞ思ふとて、今一聲呼ばれて答へんと、念じて寢たるほどに、や、な起し奉りそ、幼
き人は寢入り給ひにけりといふ聲のしければ、あな侘しと思ひて、今一度起せかしと思
ひねに聞けば、ひしくとたどくひに喰ふ音のしければ、すべなくて、むごの後にえい
と答へたりければ、僧たちわらふことかぎりなし。

田舎の兒櫻の散るを見て泣く事

これも今は昔、田舎の兒の比叡の山へ登りたりけるが、櫻のめでたく咲きに咲きたりけ
るに、風の烈しく吹きけるを見て、この兒さめふくと泣きけるを見て、僧のやはら寄り
て、などかうは泣かせ給ふぞ、この花の散るを惜しう覺えさせ給ふか、櫻ははかなきも
のにて、かくほどなくうつろひ候ふなり、されどもさのみぞさぶらふと慰めければ、櫻
の散らんはあながちにいかどせん、苦しからず、我てよの作りたる麥の花散りて、實の
いらざらんを思ふが侘しきといひて、さくりあけてよと泣きけるは、うたてしやな。



小藤太智におどされたる事

殿の沙汰一家事
向のとりまばき
なまりやうけし
一生長家子の意
か一本なまず
りやう(生受
領)とあり

提一酒器

これも今は昔、源大納言定房といひける人の許に、小藤太といふ侍ありけり。やがて女にあひ具してぞありける。女も女房にて使はれけり。この小藤太は殿の沙汰をしければ、三とほり四とほりに居廣げてぞありける。この女の女房に、なまりやうけしの通ひけるありけり。宵に忍びて局へ入りにけり。曉より雨降りて、え歸らで局に忍びて臥したりけり。この女の女房は、上へのほりにけり。この掣の君、屏風を立て廻して寝たりける。春雨いつとなく降りて、歸るべきやうもなくて臥したりけるに、この舅の小藤太、この掣の君徒然にておはすらんとて、肴折敷に据ゑて持ちて、今片手に提に酒を入れて椽より入らんは人見つべしと思ひて、奥の方よりさりけなくて持て行くに、この掣の君は衣を引き被きて、のけざまに臥したりけり。この女房の疾くおりよかすと、徒然に思ひて臥したるほどに、奥の方より遣戸を開けたれば、疑なくこの女房の上よりおるよぞ

前の物一一本
「あの物」とあり
のけされかへる
一仰標に倒るゝ
こと
まくれ一目のく
らむこと

大童子一寺院に
召使ひたる童子
に年齢により大
中小の名あり

まみしぐれて一
眉目のあたりう
ちしぐれて見に
くきをいふ

わせんじやう一
わはわぬしのわ
なり、せんじや

と思ひて、衣をば顔に被きながら、前の物をかき出して、腹をそらしてけし／＼と起しければ、小藤太おびえてのけされかへりけるほどに、肴もうちちらし、酒もさながらうちこほして、大鬚をさよけてのけざまに臥して倒れたり。頭を荒う打ちて、まくれ入りて臥せりけりとか。

大童子鮭ぬすみたる事

これも今は昔、越後の國より鮭を馬に負せて、二十駄ばかり粟田口より京へ追ひ入れけり。それに粟田口の鍛冶が居たるほどに、頂禿ける大童子のまみしぐれて、物むつかしううらゝかにも見えぬが、この鮭の馬の中に走り入りにけり。道は狭くて、馬なにかとひしめきける間、この大童子走りそひて、鮭を二つ引き抜きて、懐へひき入れてんけり。さてさりけなくて走り先立ちけるを、この鮭に具したる男見てけり。走り先立ちて、童の腕頭を取りて、ひき留めていふやう、わせんじやうはいかでこの鮭を盗むぞといひけ

うは先生なり、
今君といふがこ
とし

かうちやう一編
丁にて荷掌領の
こと

さまあし一外聞
わるし

鮭の一二尺一鮭
を獲にかけたる
數言なり、尺は
集の假借にて匹
に同じ
そこら一あまた

れば、大童子さることなし、何を證據にてかうはの給ふぞ、わぬしが取りてこのわらはに負ふするなりといふ。かくひしめく程に、上り下るもの市をなして行きもやらで見合ひたり。さるほどに、この鮭のかうちやう、まさしくわせんじやう取りて懐に引き入れつといふ。大童子はまたわぬしこそ盗みつれといふ。時にこの鮭に附きたる男、せんずる所我も人も懐を見んといふ。大童子、さまでやはあるべきなどいふ程に、この男袴を脱ぎて、懐を廣げて、くは見給へといひてひしくとす。さてこの男大童子に掴みつきで、わせんじやう、はや物脱ぎ給へといへば、童、さまあしとよ、さまであるべきことかと言ふを、この男たぬがせにぬがせて、前をひきあげたるに、腰に鮭を二つ腹に添へてさしたり。男くはくといひて引き出したる時に、この大童子はうち見て、あれ勿體なき主かな、かうやうに裸體になしてあさらんには、いかなる女御后なりとも、腰に鮭の一二尺なきやうはありなんと言ひたりければ、そこら立ちとまりて見ける者ども、一度にはつと笑ひけるとか。

尼地藏見たてまつる事

地藏菩薩は云々
一延命地蔵經に
「菩薩毎日、晨朝
入於講定、遊化
大道、披著與樂、
云々」
一世界一あたり
界限一博徒

今は昔、丹波國に老いたる尼ありけり。地藏菩薩は、曉ごとにありき給ふ事を仄に聞きて、曉ごとに地藏見奉らんとて、一世界惑ひありくに、博打のうちほうけて居たるが見て、尼公は寒きに何事し給ふぞといへば、地藏菩薩の曉にありき給ふなるに、逢ひまゐらせんとてかくありくなりといへば、地藏のありかせ給ふ道は我こそ知りたれ、いざたまへ、逢はせ参らせんといへば、あはれ嬉しきことかな、地藏ありかせ給はん所へ、我を率ておはせよといへば、我に物を得させ給へ、やがて率て奉らんといひければ、この著たる衣奉らんといひければ、いざ給へとて、隣なる所へ率て行く。尼悦びて急ぎ行くに、其所の子にぢざうといふ童ありけるを、それが親を知りたりけるによりて、ぢざうはと問ひければ、親、あそびにいぬ、今來なんといへば、くはこよなり、地藏のおはします所はといへば、尼うれしくて、袖の衣を脱ぎて取らすれば、博打は急ぎ取りていぬ。尼



驚一眞直に伸び
 たる若枝、鞍、笠
 などをいよ
 かくて立ち給へ
 れば一海陸が立
 ちたまふ也
 やがて極樂へ云
 云一尼が極樂往
 生を送りたりと
 なり

不動の凡一不動

は地藏見参らせんとて居たれば、親どもは心得ず、などこの童を見んと思ふらんと思ふ
 ほどに、十ばかりなる童の來たるを、くはぢざうといへば、尼見るまゝに、是非をも知
 らず伏し轉びて拜み入りて土にうつぶしたり。童楚を持ちて遊びけるまゝに來りけるが、
 その楚して、手すさびのやうに額をかけば、額より顔の上までさけぬ。さけたる中より
 えもいはずめでたき地藏の御顔見え給ふ。尼拜み入りてうち見上げたれば、かくて立ち
 給へれば、涙を流して拜み入り参らせて、やがて極樂へ参りけり。されば心にだにも深
 く念じつれば、佛も見え給ふなりけりと信すべし。

修行者百鬼夜行に逢ふ事

今は昔、修行者のありけるが、津の國までいきたりけるに、日暮れて龍泉寺とて大なる
 寺のふりたるが、人もなきありけり。これは人宿らぬ所といへども、そのあたりに又宿
 るべき所なかりければ、いかどせんと思ひて、笈うちおろして内に入りてけり。不動

尊の陀羅尼慈教
咒をいふ

の咒を唱へ居たるに、夜半ばかりになりぬらんと思ふ程に、人々の聲數多して來る音すなり。見れば手ごとに火を燈して、百人ばかりこの堂の内に來集ひたり。近くて見れば、目一つつきたるなどさまざまなり。人にもあらず あさましきものどもなりけり。或は角生ひたり、頭もえもいはずおそろしけなるものどもなり。おそろしと思へども、すべきやうもなくて居たれば、おのく皆居ぬ。一人ぞ又所もなくて、え居すして火をうち振りて、我をつらくと見ていふやう わが居るべき座に新しき不動尊こそ居給ひたれ、今宵ばかりは外におはせとて 片手してわれをひきさけて、堂の椽の下にすゑつ。さるほどに曉になりぬとて、この人々のよしりて歸りぬ。誠にあさましく恐しかりける所かな 疾く夜の明けよかし往なんと思ふに 辛うじて夜明けたり。うち見廻したれば、ありし寺もなし。遙々とある野の來しかたも見えず 人の踏み分けたる道も見えず 行くべき方もなければ、あさましと思ひて居たる程に、稀々馬に乗りたる人どもの、人數多具して出で來たり。いとうれしくて、此處は何處とか申し候ふと問へば などがくは問

御館一國司の廟
をいふ

ついなやうつき
振う

○今昔物語二十
六、利仁將軍若
時從京政賀將行
五位諸將照
一の人一攝政關
白をいふ
大壘一大臣大壘

ひ給ふぞ、肥前國ぞかしといへば、あさましきわざかなと思ひて、事のやう委しくいへば、この馬なる人もいと希有のことかな、肥前の國に取りてもこれはおくの郡なり、これは御館へ参るなりといへば、修行者よろこびて、道も知り候はぬに、さらば道までも参らんといひて往きければ、これより京へ行くべき道など教へければ、船尋ねて京へのほりにけり。さて人どもに、かよるあさましき事こそありしか、津の國の龍泉寺といふ寺に宿りたりしを、鬼どもの來て、所狭しとて、新しき不動尊しばし習におはしませといひて、かき抱きて習についすゆと思ひしに、肥前の國のおくの郡にこそ居たりしか、かよるあさましき事にこそ逢ひたりしかとぞ、京に來てかたりけるとぞ。

利仁薯蕷粥の事

今は昔、利仁の將軍の若かりける時、その時の一の人の御許に恪勤して候ひけるに、正月に大饗せられけるに、そのかみは大饗はてて、とりばみといふものを、拂ひて入れず

とて年給に差懸
するをいふ
とりばみ一筆懸
のあまりを座に
投げ出すを乞食
の取りて食ふを
いふ

青鈍一はなだ色
の青みあるもの
肩少し落ちたる
一肩の折目くづ
れたるをいふ

して、大饗のおろし米とて、給仕したる格勤の者どもの喰ひけるなり。その所に年比に
なりて、給仕したる者の中には、所得たる五位ありけり。そのおろし米の座にて芋粥す
すりて、舌打をして、あはれいかで芋粥に飽かんといひければ、利仁これを聞きて、大
夫殿いまだ芋粥に飽かせ給はずやと問ふ。五位いまだ飽き侍らすといへば、飽かせ奉り
てんかशीといへば、かしこく侍らんとて止みぬ。さて四五日ばかりありて、曹司住にて
ありける所へ、利仁来ていふやう、いざさせたまへ。湯浴に大夫殿といへば、いとかし
こきことかな、今宵身のかゆく侍りつるに、乗物こそは侍らねといへば、こよにあやし
の馬具して侍りといへば、あなうれしくといひて、薄綿の衣二つばかりに、青鈍の指
貫の裾破れたるに、おなじ色の狩衣の肩少し落ちたるに、したの袴も著す、鼻高なるも
のの先は赤みて、穴のあたりぬればみたるは、すよばなを拭はぬなめりと見ゆ。狩衣の
うしろは、帯にひきぬがめられたるまよに、ひきもつくろはねば、いみじう見苦し。を
かしけれども、先に立てて、我も人も馬に乗りて、河原さまにうち出でぬ。五位の供に

調度掛一器具を
持つもの

關山一逢坂山

三津の濱一下坂
本の濱邊
身を投げて逃ぐ
れども一一生懸
命に逃ぐれども

は、あやしの童だになし。利仁が供には、調度掛、舍人、雑色、ひとりぞありける。河
原うち過ぎて、粟田口にかよるに、いづくへぞと問へば、唯こよぞとて山科も過ぎぬ。
こはいかに、こよぞくとて山科も過しつるはといへば、あしこくとて關山も過ぎぬ。
こよぞくとて、三井寺に、知りたる僧のもとにいきたれば、此所に湯わかすかと思ふ
たにも、物ぐるほしう遠かりけりと思ふに、こよにも湯ありけもなし。いづら湯はとい
へば、實は教賀へ奉て奉るなりといへば、物ぐるほしうおはしける、京にてさとの給は
ましかば、下人なども具すべかりけるをといへば、利仁あざわらひて、利仁一人侍らば
千人と思せといふ。かくて物など喰ひて急ぎ出でぬ。其所にて利仁、籠取りて負ひける。
かくて行くほどに、三津の濱に、狐の一つ走り出でたるを見て、よき使出で來たりとて
利仁狐押しかくれば、狐身を投げて逃ぐれども、追ひ責められて免逃けず、落ちかより
て、狐の後足を取りて引上げつ。乗りたる馬、いとかしこしとも見えざりつれども、い
みじき逸物にてありければ、若干も延さずして捕へたる所に、この五位走らせて息つき

わ狐一狐を呼び
かくる間なり、
ものれ狐といふ
がごとし
もしいはぬもの
ならば一此下に
辛き目見せんの
語を含めて心得
べし
世に一本「よ
も」ことあり
あはせて一同時
に
こりて来る一か
たまりて来る

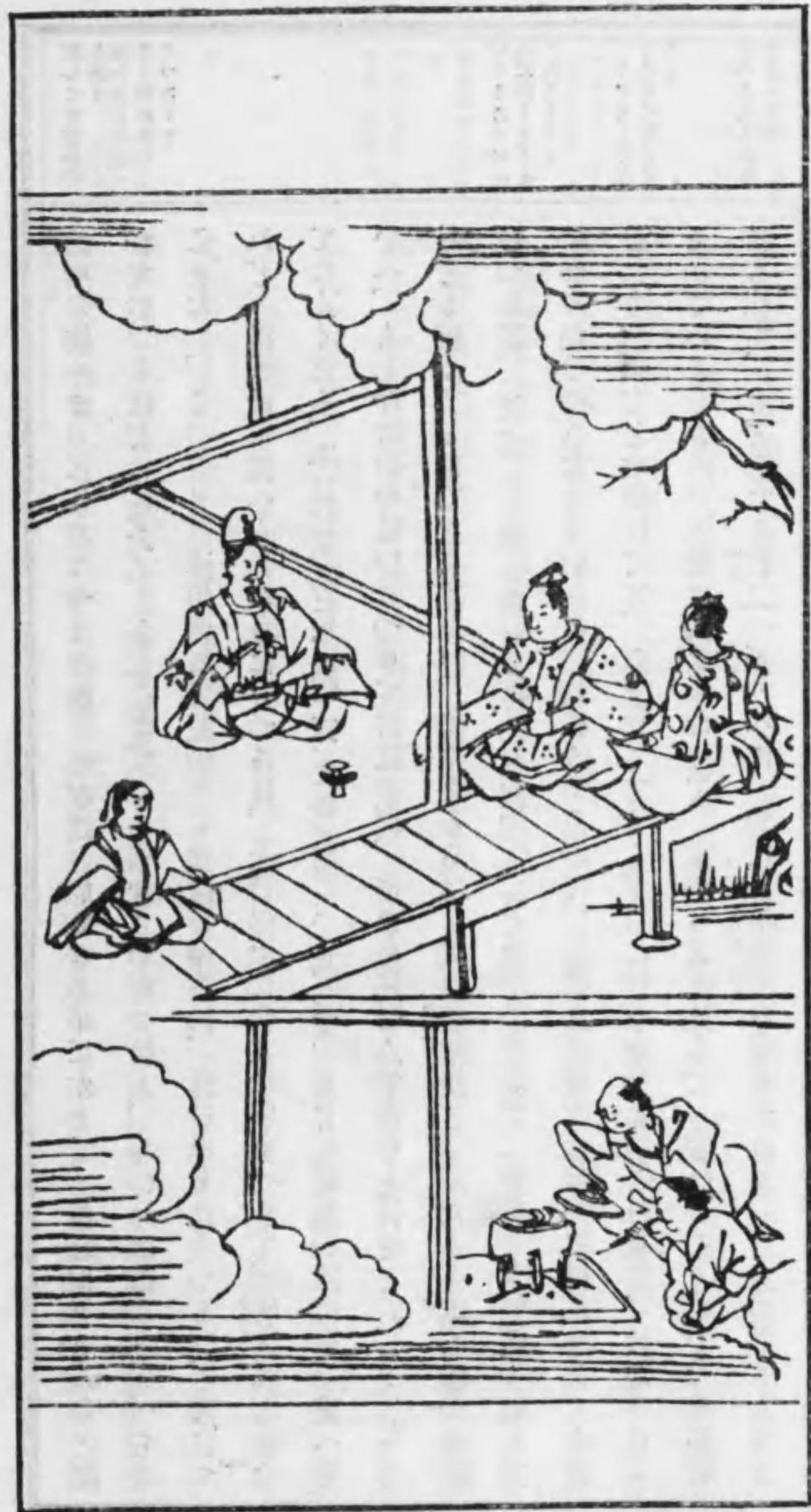
大體所一利仁の
北の方をさす、

たれば、狐を引き上げていふやうは、わ狐、今宵の中に利仁が家の敦賀に罷りていはんやうは、俄に客人を具し奉りて下るなり、明日の巳の時に、高島邊に男ども迎へに馬に鞍を置きて、二疋具してまうで來といへ、もしいはぬものならば、わ狐只心みよ、狐は變化あるものなれば、今日の中に行きつきて言へとて放てば、荒涼の使かなといふ。よし御覽ぜよ、罷らでは世にあらじといふに、早く狐見返りくして前に走り行く。能く罷るめりといふに、あはせて走り先立ちて失せぬ。かくて其夜は道にとどまりて、翌朝疾く出で行くほどに、誠に巳の時ばかりに、三十騎ばかりこりて來るあり。なににかあらんと見るに、男どもまうで來たりといへば、不定の事かなといふ程に、たどちかに近くなりてばらくと下るゝ程に、これ見よ誠におはしたるはといへば、利仁うち微笑みて何事ぞと問ふ。大人しき郎等進み來て、希有の事の候ひつるなりといふ。まづ馬はありやといへば、二疋さぶらふといふ。食物などしてきたりければ、その程におり居て喰ふ序に、大人しき郎等のいふやう、昨夜希有の事のさぶらひしなり、戌の時ばかりに大

正しくは憂聲所
と書く
胸をきりに切り
て一胸の苦しく
せつなきて

例ざまに一本の
通に快くならせ
られしとなり
ぐらぐら一くれ
ぐれにて薄暮の
こと
身のうちしすき
たる一空腹

盤所の胸をきりに切りてやませ給ひしかば、いかなる事にかとて、俄に僧召さんなど騒がせ給ひしほどに、手づから仰せ候ふやう、何かさわがせ給ふ、おのれは狐なり、べちのことなし、この五日三津の濱にて殿の下らせ給ひつるに、逢ひ奉りたりつるに、逃けれど、得逃けて捕へられ奉りたりつるに、今日の中に我家にいきつきて、客人具し奉りてなんくだる、明日巳の時に、馬二つに鞍置きて、具して、男ども高島の津に参り逢へといへ、もし今日の中にいきつきて言はずば、辛きめ見せんするぞと仰せられつるなり、男ども疾くく出で立ちて参れ、遅くまらば、我は勘當かうぶりなんと懼ぢ騒がせ給ひつれば、男どもに召し仰せ候ひつれば、例ざまにならせ給ひにき。その後、鳥と共に参り候ひつるなりといへば、利仁うち蒸みて、五位に見合すれば、五位あさましと思ひたり。物など喰ひはてて、急ぎ立ちてくらぐらに行き著きぬ。これ見よ、誠なりけりとあさみあひたり。五位は馬よりおりて、家のさまを見るに、賑はよしくめでたき事物にも似ず、もと著たる衣二つがうへに、利仁が宿直衣を著せられたれども、身のうちしすき



練色—薄黄色

これにあはせて
—これと共に
うへ—奥方

なにのあるにか
—風などの居る
をいふ

たるべければ、いみじう寒けに思ひたるに、長炭櫃ながすすびに火を多うおこしたり。疊厚たたみらかに敷きて、菓物食物くだものくひものし設けて楽しく覺ゆるに、道の程寒くおはしつらんとて、練色ねいしの衣きぬの綿厚わたらかなる、三つ引き重ねて持て来て、うちおほひたるに樂しとは愚なり。物喰ものくひなどして事しづまりたるに、舅しゅうせの有仁出で来ていふやう、こはいかでかくは渡らせ給へるぞ、これにあはせて、御使ごしのさま物ぐるはしうて、うへ俄にやませ奉り給ふ、希有きゆうの事なりといへば、利仁うち笑ひて、物の心みんと思ひてしたりつることを、誠にまうできて、告げて侍るにこそあんなれといへば、舅も笑ひて、希有の事なりといふ。具し奉らせ給ひつらん人は、このおはします殿の御事かといへば、さに侍り、芋粥いもがゆにいまだ飽かずと仰せらるれば、飽かせ奉らんとて率ひらて奉りにたるといへば、やすき物にもえ飽かせ給はざりけるかなとて戯るれば、五位東山に湯わかしたりとて、人をはかりいでかくの給ふなりなど言ひ戯れて、夜少し更けぬれば舅も入りぬ。寢所ねどころとおほしき所に、五位入りて寢んとするに、綿四五寸ばかりある直垂ひたひあり。我もとの薄綿はむつかしう、なにのある

出て来るきぬなれば、今昔に「出来にたれば」とあるよし、汗水にて臥したるに、直垂の綿あつきために汗水になりて臥したりとなり

おほのかいおほどかに同じ、大櫛の意

屋と均しく置きなしつ、芋を深山に持ちこした

にか、かゆき所も出で来るきぬなれば、脱ぎ置きて、練色の衣三つが上に、この直垂ひき著て臥したる心、いまだならはぬに氣もあけつべし。汗水にて臥したるに、又傍に人の働けば、誰ぞと問へば、御あしたまへと候へば、参りつるなりといふ。けはひにくからねば、かきふせて風の透く所に臥せたり。かよる程に物高く言ふ聲す。何事ぞと聞けば、男のさけびていふやう、この邊の下人うけたまはれ、明日の卯の時に、切口三寸長さ五尺の、芋各一筋づつ持て参れといふなりけり。あさましう、おほのかにもいふものかなと聞きて寢入りぬ。曉方に聞けば、庭に薙敷く音のするを、何事するにかあらんと聞くに、小屋當番より初めて、起き立ちて居たる程に、薙あけたるに見れば、長薙をぞ四五枚敷きたる。何の料にかあらんと見る程に、下種男の木のやうなる物を肩にうち掛けてきたりて、一筋置きて去ぬ。その後うち續き持て来つと置くを見れば、誠に口三寸ばかりの芋の五六尺ばかりなるを、一筋づつ持て来て置くとすれど、巳の時まで置きければ、居たる屋と均しく置きなしつ。昨夜さけびしは、早うその邊にある下人のかぎり

るが屋と同じ高さになれり

五石なはの釜一五石ばかり入るべき釜をいふ、「なは」は納の音しほぎぬ、今昔に「白き布」とあり

磯一節入の衣みせん、味噌と書く、甘藷の煎汁をるべし

かへちかして今昔に「炭返し」とあり

に物言ひ聞かすとて、人呼の岡とてある塚の上にていふなりけり。唯その聲の及ぶかぎりの、めぐりの下人の限持て来るにだにさばかり多かり、まして立ち退きたる従者どもの多さを思ひやるべし。あさましと見たるほどに、五石なはの釜を五六昇持て来て、庭に杭ども打ちて据ゑ渡したり。何の料ぞと見る程に、しほぎぬの襖といふ物著て帯して、若やかにきたなけなき女どもの、白く新しき桶に水を入れて、この釜どもにさくくといひる。何ぞの湯わかすかと思れば、この水と見ゆるはみせんなりけり。若き男どもの袂より手出したる、薄らかなる刀の長やかなるもたるが、十餘人ばかり出で来て、この芋をむきつと透切に切れば、早く芋粥煮るなりけりと見るに、喰ふべき心地もせず、かへりてうとましくなりにけり。さらくとかへらかして、芋粥出でまうできにたりといふ。まゐらせよとて、まづ大なる土器具して、金の提の一斗ばかり入りぬべきに、三四に入れて、且一とてもてきたるに、飽きて一盛をだにえ食はず、飽きにたりといへば、いみじう笑ひて集りて居て、客人殿の御徳に、芋粥喰ひつといひあへり。かやうにする

けをさめの装束
一、装束の装束に
て、装束は常に著る
をいひ、装束はこれ
の時用ふるをい
八丈一絹の名
きう者一、騎者な
るか、騎考よべ
し
さるものの一、今
昔に「かゝる事
なむ」とあり

ほどに、むかひの長家の軒に、狐のさし覗きて居たるを、利仁見つけて、かれ御覽せよ、候ひし狐の見参するをとて、かれに物喰はせよといひければ、喰はするにうち喰ひてけり。かくて萬の事、たのもしといへばおろかなり。一月ばかりありてのほりけるに、けをさめの装束ども數多くだり、又たどの八丈、綿、絹など、皮子共に入れて取らせ、初の夜の直垂はた更なり、馬に鞍を置きながら取らせてこそ送りけれ。きう者なれども所につけて、年比になりて許されたるものは、さるもののおのづからあるなりけり。

宇治拾遺物語 卷第二

清徳聖きどくの事

今は昔、清徳聖といふ聖のありけるが、母の死にたりければ、棺に打入れて、唯一人愛宕の山に持ちて行きて、大なる石を四つの隅に置いて、其上にこの棺を打ち置きて、千手陀羅尼を、片時息む時もなくうち寝る事もせず、物も食はず湯水も飲まで、聲絶もせず誦し奉りて、この棺を廻ること三年になりぬ。その年の春、夢ともなく現ともなく、灰に母の聲にて、この陀羅尼をかく夜晝よみ給へば、我は早く男子となりて天に生れにしかども、同じくは佛になりて告げ申さんとて、今までは告げ申さどりつるぞ、今は佛になりて告げ申すなり、といふと聞ゆる時、さ思ひつることなり、今は早う成り給ひぬらんとて、取りいでて其所にて焼きて、骨取り集めてうづみて、上に石の卒都婆など立

千手陀羅尼一千
手廻音の咒文

めさまほしから
ん程―食ひたし
と思ふ程

坊城の右の大殿
―簡輔

てて、例のやうにして、京へ出づる道に、西の京に水葱いと多く生ひたる所あり。この聖
困じて、物いとほしかりければ、道すがら折りて食ふほどに、主の男出で来て見れば、
いと尊けなる聖の、かくすどろに折り喰へば、あさましと思ひて、いかにかくはめすぞ
といふ。聖、困じて苦しきまゝに喰ふなりといふ時に、さらば参りぬべくは、今少しも
めさまほしからん程めせといへば、三十筋ばかりむす／＼と折り喰ふ。この水葱は三町
ばかりぞ植ゑたりけるに、かく喰へばいとあさましく、喰はんやうも見まほしくて、め
しつべくはいくらもめせといへば、あなたふととて、うちるざり／＼をりつゝ、三町を
さながら喰ひつ。主の男、あさましう物喰ひつべき聖かなと思ひて、暫し居させ給へ、
物してめさせんとて、白米一石取り出でて、飯にして喰はせられたれば、年比物も喰はで困
じたるにとて、皆喰ひて出でていぬ。この男いとあさましと思ひて、これを人に語りけ
るを聞きつゝ、坊城の右の大殿に、人の語り参らせければ、いかでかさはあらん、心得
ぬことかな、呼びて物喰はせて見んと思ひて、結縁のために物参らせて見んとて、呼ば

いく／＼と―心
の行くほど食は
せ給ふなり

まど―糞土にて
糞のこと

せ給ひければ、いみじけなる聖歩み参る。その尻に、餓鬼、畜生、虎狼、犬鳥、萬の鳥
獸など、千萬と歩み續きて來けるを、他人の目に大かたえ見ず、唯聖一人とのみ見ける
に、この大殿見つけ給ひて、さればこそいみじき聖にこそありけれ、めでたしとおほえ
て、白米十石を御膳にして、新しき菴菰に折敷桶櫃などに入れて、いく／＼と置きて喰
はせさせ給ひければ、後に立ちたるものどもに喰はすれば、集りて手をさよけ皆喰ひつ。
聖はつゆ喰はで悦びて出でぬ。さればこそ凡人にはあらざりけれ、佛などの變じてあり
き給ふにやとおほしけり。他人の目には唯聖一人して喰ふとのみ見えければ、いとどあ
さましき事に思ひけり。さて出でて行く程に、四條の北なる小路にゑどをまる。この後
に具したるものしちらしたれば、唯墨のやうに黒きゑどを、隙もなく遙々としちらした
れば、下種なども穢かりて、その小路を糞小路とつけたりけるを、帝聞かせ給ひて、そ
の四條の南をば何といふと言はせ給ひければ、綾の小路となんと申すと申しければ、こ
れを錦の小路といへかし、あまり穢き名かなと仰せられけるよりしてぞ、錦の小路とい



ひける。

静観僧正雨を祈る法験の事

今は昔、延喜の御時早魁（かんぼう）したりけり。六十人の貴僧を召して、大般若經讀ましめ給ひけるに、僧ども黒煙（くろけり）を立てて、驗現（しめあらは）さんと祈りけれども、いたくのみ晴れまさりて日強く照りければ、帝を始め、大臣公卿、百姓人民、この一事より外の嘆（なげ）なかりけり。藏人頭を召し寄せて、静観僧正（じやうくわんそうじやう）に仰せ下さるよやう、殊更思し召さるよやうあり、かくの如く方（かた）の御祈（ごいのり）ども、させる験なし、座を立ちて別に壁のもとに立ちて祈れ、思し召すやうあれば、取り分け仰せつくるなりと仰せ下されければ、静観僧正、其時は律師にて、上に僧都、僧正、上臈（じやうらう）どもおはしけれども、面目限なくて、南殿の御階（みはし）より降りて、屏のもとに北向に立ちて、香爐（かうろう）取りくびりて、額に香爐を當てて祈請（いのねがひ）し給ふ事、見る人さへ苦しく思ひけり。熱き日の暫しもえさし出でぬに、涙を流し黒煙を立てて祈請し給ひければ、香爐

黒煙一團摩壇などの煙なるべし

壁のもと一垣の下

南殿一室展殿北向一隅神は北方を司るを以て也

弓場殿一校書殿
御前一前屬
群をく一面に

の煙空へあがりて、扇ばかりの黒雲になる。上達部は南殿に列び居、殿上人は弓場殿に立ちて見るに、上達部の御前は美福門よりのぞく。かく見るほどに、その雲群なく大空に引塞ぎて、龍神震動し電光大千界に満ち、車軸の如くなる雨降りて、天下忽にうるほひ。五穀豊饒にして萬木果をむすぶ。見聞の人歸依せずといふことなし。さて帝大臣公卿等隨喜して僧都になし給へり。不思議の事なれば、末の世の物語にかく記せるなり。

同僧正大嶽の岩いのる事

そひ一添ひにて
傍の巖
大嶽一不比叡と
もいふ

今は昔、靜觀僧正は、西塔の千手院といふ所に住み給へり。その所は南に向うて、大嶽を守る所にてありけり。大嶽の乾の方のそひに大なる巖あり、その岩の有様龍の口をあきたるに似たりけり。その岩の筋に向ひて住みける僧ども、命もろくして多く死にけり。しばらくはいかにして死ぬるやらんと、心も得ざりけるほどに、この岩のあるゆるごと言ひ立ちにけり。この岩を毒龍の巖とぞ名づけたりける。これによりて西塔の有様、唯

箔打一金銀
を打つ職人
金崩一金釜山の
難所

あれにのみ荒れまさりけり。この千手院にも、人多く死にければ住み煩ひけり。この巖を見るに誠に龍の大口をあきたるに似たり。人のいふことは、實にもさありけりと僧正思ひ給ひて、この巖の方に向ひて、七日七夜加持し給ひければ、七日といふ夜半ばかりに、空曇り震動する事夥し。大嶽に黒雲かよりて見えず、暫間ありて空晴れぬ。夜明けて大嶽を見れば、毒龍巖碎けて散り失せにけり。それより後、彼の西塔に人住みけれども崇なかりけり。西塔の僧どもは、件の座主を今に至るまで尊み拜みけるとぞ語り傳へたる。不思議のことなり。

金釜山箔打の事

今は昔、七條に箔打あり、御嶽詣しけり。参りて金崩を行いて見れば、實の金のやうにてありけり。嬉しく思ひて、件の金を取りて袖に包みて家にかへりぬ。おろして見ければ、きらくとして實の金なりければ、不思議の事なり。この金取れば、雷鳴、地震、雨

まらびて一歸
めにして

宿屋召すといひ
ければ此下に
脱文あるべし

げんにあり一現
に在り
看督長一檢非違
使廳に屬す、檢
非違使とは警察
を掌る役所なり
大理一檢非違使

降りなどして、少しも得取らざんなるに、これはさることなし。この後もこの金を取りて、世の中を過ぐべしと、嬉しくて秤にかけて見れば、十八兩ぞありける。これを箔に打つに、七八千枚に打ちつ。これをまろけて、皆買はん人もがなと思ひて暫く持ちたるほどに、檢非違使なる人の東寺の佛造らんとて、箔を多く買はんといふと告ぐる者ありける。喜びて、懐にさし入れて行きぬ。宿屋召すといひければ、いくらばかり持ちたるぞと問ひければ、七八千枚ばかり候ふといひければ、持ちて参りたるかといへば、候ふとて懐より紙に包みたるを取り出したり。見れば、破れず廣く色いみじかりければ、廣げて數へんとて見れば、ちひさき文字にて、金御嶽云々とことごとく書かれたり。心もえて、この書付は何の料の書付ぞと問へば、箔打書付も候はず、何の料の書付かは候はんといへば、けんになり、これを見よとて見するに、箔打見ればまことにあり。あさましきことかなと思ひて、口もえあかず。檢非違使、これはたゞごとにあらず、様あるべきとて、友を呼び具して、金をば看督長に持たせて、箔打具して大理のもとへ参りぬ。

別當の唐名
別當一檢非違使
の長官
出て行きて一か
て行きての段か
よせばしら一罪
人を繋ぐ柱
かうじ一勘事又
はつじならん
みさく一びし
やびしや

○今昔二十八左
京歴記及歴調流
巻進太夫語參照

下わたり一下京
のこと
さくわん一屬官
をこづり一權様
をとること

件の事どもを語り奉れば、別當驚きて、早く河原に出で行きて問へと言はれければ、檢非違使ども河原に行いて、よせばしら掘り立てて、身を動かさぬやうにはりつけて、七十度のかうじをへければ、背中は紅の練單衣を水にぬらして著せたるやうに、みさくとなりてありけるを、重ねて獄に入れたりければ、僅に十日ばかりありて死にけり。箔をば金峯山に返して、もとの所に置きけると語り傳へたり。それよりして人のおぢて、いよく件の金取らんと思ふ人なし、あなおそろし。

用經あらまきの事

今は昔、左京の大夫なりける古上達部ありけり。年老いて、いみじうふるめかしかりけり。下わたりなる家に、歩行もせて籠り居たりけり。その司のさくわんにて、紀用經といふ者ありけり。長岡になん住みける。司の目なれば、この大夫の許にも来てなんをこづりける。この用經大殿にまゐりて、贊殿に居たるほどに、淡路の守頼親が鯛の苞苴を

間木一橋木

かんの君一大夫
の君
出居一客間

おほく奉りたりけるを、賛殿に持て参りたり。賛殿の預義澄に、二卷用經乞ひ取り
て、間木にさよけて置くとして、義澄にいふやう、これ人して取りに奉らん折に、遣せ
給へといひおく。さて殿を出でて心の中に思ひけるやう、これ我司のかみに奉りて、を
こづり奉らんと思ひて、これを間木に捧けて、左京の大夫の許にいきて見れば、かんの
君、出居に客人二三人ばかり来て、饗應せんとして、地火爐に火おこしなどして、我がも
とにて、物喰はんとするに、はかしくしき魚もなし。鯉鳥など用ありけなり。それに用
經が申すやう、用經が許にこそ、津の國なる下人の鯛の苞苴、三つけさ持てまうで来た
りつるを、一卷たべ試み侍りつるが、えもいはずめでたく候ひつれば、今二卷はげがさで
置きてさぶらふ、急ぎてまうでつるに、下人の候はで持て参り候はざりつるなり、只今
取りにつかはさんはいかにと、聲高くしたりがほに袖をつくろひて、口脇かい拭ひなど
して、ゐあがりのぞきて申せば、大夫さるべき物のなきに、いと善きことかな、疾く取
りに遣れとの給ふ。客人どもも喰ふべき物の候はざりつるに、九月ばかりの頃なれば、

時かはさず一時
を移さず即刻

眞魚箸一料理の
時魚を取扱ふに
用ふる大なる箸

くより引きゆひ
一狩衣の袖括り
の紐をしむるこ
と

尻切一草履

この頃鳥の味ひいとわろし、鯉はまだ出で来ず、善き鯛は奇異のものなりなどいひあへ
り。用經、馬控へたる童を呼び取りて、馬をば御門の脇に繋ぎて、只今走りて大殿の賛
殿にゆきて、賛殿の預の主に、その置きつる苞苴、只今遣せ給へとさよめきて、時かは
さずもてこ、外によるな、疾く走れとてやりつ。さて、俎洗ひて持て参れと聲高きいひて、
やがて用經、今日の庖丁は仕らんといひて、眞魚箸けづり、鞘なる刀抜いて設けつよ、
あな久し、いづら来ぬやなど心もとながり居たり。遅しと云ひ居たる程に、遣りつ
る童、木の枝に苞苴二つ結びつけて持て来たり。いとかしこく、あはれ飛ぶがごと走り
て参うで来たる童かなと譽めて、取りて俎の上に打ち置きて、事々しく大鯉つくらんや
うに、左右の袖つくろひ、くより引きゆひ、片膝立ていま片膝伏せて、いみじくつきづ
きしく居なして、苞苴の繩をふつくと押し切りて、刀して藪を押し開くに、ほろく
と物どもこぼれて落つるものは、平足駄、古尻切、古草鞋、古沓、かやうの物のかぎりあ
るに、用經あきれて、刀も眞魚箸もうち捨てて、沓もはきあへず逃けて去ぬ。左京の大

物悪しき人下
劣なる人

わいぢかーもだ
やか

白地一ついちよ
つと

夫も客人も、あきれて目も口もあきて居たり。前なる侍共もあさましくて、目を見かはして居なみたる顔ども、いと怪しげなり。物喰ひ酒飲みつる遊も、皆すさまじくなりて、一人立ち二人立ち皆立ちて去ぬ。左京の大夫のいはく、この男をば、かくえもいはぬ癡物狂とは知りたりつれども、司のかみとて來睦びつれば、よしとは思はねど、追ふべき事もあらねばさと見てあるに、かよるわざをして謀らんをばいかどすべき、物悪しき人は、はかなき事につきてもかよるなり、いかに世の人聞き傳へて、世の笑種にせんとすらんと、空を仰ぎて歎き給ふ事限なし。用經は馬に乗りて、馳せ散して殿に参りて、贊殿の預義澄に逢ひて、この苞直をば惜しと思さば、おいらかに取り給ひてはあらで、かよる事をし出で給へると、泣きぬばかりに怨み誓る事限なし。義澄がいはく、こはいかにの給ふ事ぞ、苞直は奉りて後、白地に宿に罷りつとて、おのが男にいふやう、左京の大夫の主の許から、苞直とりに遣せたらば、取りてそれに取らせよと言ひ置き、まかでて只今還り参りて見るに、苞直なければ、何方いぬるぞと問ふに、しかふの御使ありつれば、の

わかぬしー贊殿
掛の若者

切り参りー料理
して食ひ

給はせつるやうに取りて奉りつるといひつれば、さこそはあんなれと聞きてなん侍る、事のやうを知らずといへば、さらばかひなくとも、言ひ預けつらん主を呼びて問ひ給へといへば、男を呼びて問はんとするに、出でていにけり。膳部なる男がいふやう、おのれが部屋に入り居て聞きつれば、このわかぬしたちの、ま木に捧けられたる苞直こそあれ、こは誰が置きたるぞ、何の料ぞと問ひつれば、誰にかありつらん、左京のさくわんの主なりといひつれば、さては事にもあらず、すべきやうありとて、取りおろして、鯛をば皆切り参りて、かはりに古尻切、平足駄などをこそ入れて、ま木に置かると聞き侍りつれと語れば、用經聞きて、叱り罵る事かぎりなし。この聲を聞きて、人々いとほしとはいはで笑ひのよしる。用經しわびて、かく笑ひ罵られん程はありかじと思ひて、長岡の家に籠り居たり。その後左京の大夫の家にもえ往かずなりにけるとかや。

○今昔二十、下
毛野敏行從我門
出死人語參照

おぼえ一關過

厚行死人を家より出す事

昔、右近將監下野厚行といふ者ありけり、競馬によく乗りけり。帝王より始め奉りておほえ殊に勝れたりけり。朱雀院の御時より、村上の帝の御時などは、盛にいみじき舍人にて、人も許し思ひけり。年高くなりて、西の京に住みけり。隣なりける人俄に死にけるに、この厚行弔問に行きて、その子に逢ひて、別の間の事ども弔ひけるに、この死にたる親を出さんに、門悪しき方に向へり、さればとてさてあるべきにあらず、門よりこそ出すべき事にてあれといふを聞きて、厚行がいふやう、悪しき方より出さん事殊に然るべからず、かつは數多の御子たちのため、殊にいまはしかるべし、厚行が隔の垣を破りて、それより出し奉らん、かつは生き給ひたりし時、事に觸れて情のみありし人なりかゝる折だにもその恩を報じ申さずば、何をもつてか報い申さんといへば、子どもいふやう、無爲なる人の家より出さん事あるべきにあらず、忌の方なりとも、我門よりこ

無爲一無事

絶殺の聖云々一
絶殺木食の聖僧
も斯かる事をな
すべけんやとな
り

檜垣一檜の薄板
にて編みたる垣

そ出さめといへども、僻事なしたまひそ、唯厚行が門より出し奉らんと言ひてかへりぬ。我子どもにいふやう、隣の主の死にたるいとほしければ、弔問に行きたりつるに、あの子どもいふやう、忌の方なれども、門は一つなれば、これよりこそ出さめといひつれば、いとほしく思ひて、中の垣を破りて、我門より出し給へといひつるといふに、妻子ども聞きて、不思議の事し給ふ親かな、いみじき絶殺の聖なりとも、かゝる事する人やはあるべき、身思はぬといひながら、我家の門より隣の死人出す人がある、かへすくもあるまじき事なりと皆いひあへり。厚行僻事な言ひ合ひそ、たゞ厚行がせんやうに任せて見給へ、物忌と、奇しく忌むやつは、命も短くはかしくしきことなし、たゞ物忌まぬは、命も長く子孫も榮ゆ、いたく物いみ奇しきは人といはず、恩を思ひ知り、身を忘るゝをこそ人とはいへ、天道もこれをぞ恵み給ふらん、よしなき事な侘びあひそとて、下人ども呼びて、中の檜垣を唯こほちに毀ちて、それよりぞ出させける。さてその事世に聞えて、殿ばらもあざみ譽め給ひけり。さてその後、九十ばかりまで保ちてぞ死にける。そ

○今昔二十八池
尾形珍内供息語
參照
池の尾一山城宇
治郡にあり
内供一僧官

鼻長き僧の事

昔池の尾に禪珍内供といふ僧住みけり。眞言などよく習ひて、年久しく行ひて尊かりければ、世の人々様々の祈をせさせければ、身の徳ゆたかにて、堂も僧坊も少しも荒れたる所なし。佛供御燈などもたえず、折節の僧膳、寺の講演しゆく行はせければ、寺中の僧坊に隙なく僧も住み賑ひけり。浴室には湯沸さぬ日なく沐みのよしりけり。又其あたりに、小家ども多く出で来て里も賑ひけり。さてこの内供は鼻長かりけり。五六寸計なりければ、腮よりさがりてぞ見えける。色は赤紫にて、大柑子の膚のやうに粒立ちてふくれたり。痒がる事がぎりなし。提に湯をかへらかして、折敷を鼻さし入るばかりゑりとほして、火の灸の顔に當らぬやうにして、その折敷の穴より鼻をさしいでて、提の湯にさしいれて、能くゆでて引き上げたれば、色は濃き紫色なり。それを側さまに臥せ

湯をかへらかして
提に湯を煮立て
て一湯を煮立て
るりとほし一形
り通しにて、折
敷を鼻の入るば

かり穴あけたる
なり

さらめかし一さ
らさらと替たて
てわかすなり

下に物をあてて人に踏ますれば、粒立ちたる穴ごとに煙のやうなる物出づ。それを痛く踏めば、白き蟲の穴毎にさし出づるを、毛抜にて抜けば、四分計なる白き蟲を穴毎に取りいだす、その跡は穴だにあきて見ゆ。それを又同じ湯に入れて、さらめかし沸すに、ゆづれば鼻小く濁みあがりて、唯人の鼻のやうになりぬ。又二三日になれば、前の如くに膨れて大きになりぬ。かくの如くしつと、膨れたる日数は多くありければ、物喰ひける時は弟子の法師に、平なる板の一尺計なるが、廣さ一寸計なるを鼻の下にさし入れて、對ひるて、上さまへもてあけさせて、物喰ひはつるまではありけり。他人してもてあけさせる折は、荒くもて上げければ、腹を立てて物も喰はず。さればこの法師一人を定め、物喰ふたびごとに持て上げさす。それに心地悪しくて、この法師出でざりける折に、朝粥喰はんとするに、鼻を持て上ぐる人なかりければ、いかにせんなどいふ程に、使ひける童よく持て上げ参らせてん、更にその御房にはよも劣らじといふを、弟子の法師聞きて、この童のかくは申すといへば、中大童子にて、みめも穢けなくありければ、上

中大童子一今昔
には中童子とあ
り



鼻をひんてき
めするこよ

ひともの一ひ
たもの一の眼な
らん

やどつなきーや
んどとなき

に召し上げてありけるに、この童鼻持上の木を取りて、うるはしく對ひ居て、よきほどに高からず低からずもたけて、粥をすよらすれば、この内供、いみじき上手にてありけり、例の法師には優りたりとて、粥をすよるほどに、この童鼻をひんとて、側様に向きて鼻をひる程に、手震ひて、鼻持上の木ゆるぎて、鼻外れて粥の中へふたりとうち入れつ。内供が顔にも、童の顔にも、粥とばしりてひとものかよりぬ。内供大に腹立ちて、頭顔にかよりたる粥を紙にて拭ひつと、おのれはまがくしかりける心持ちたる者かな、心なしの乞兒とはおのれがやうなる者をいふぞかし、我ならぬやどつなき人の御鼻にもこそまるれ、それにはかくやはせんずる、うたてなりける心なしの癡者かな、おのれ立て立てとて追ひてければ、立つまよに、世の人のかよる鼻持ちたるがおはしまさばこそ、鼻持上にも参らめ、愚戲の事の給へる御房かなと言ひければ、弟子ども物の後に逃げ退きてぞ笑ひける。

陣中にて公事
ある時諸卿の参
著する所

しきにうてける
陰陽師のつか
ふ神をしき神と
いふ、それに打
たれけるにやと
なり

しかるべくて
然るべき因縁あ
りて

清明藏人少將を封する事

昔、清明陣に参りたりけるに、前驅花やかにおはせて、殿上人の参りけるを見れば、藏人の少將とて、まだ若く花やかなる人の、容體まことに清けにて、車より下りて内裏に参りたりける程に、この少將の上に鳥の飛びて通りけるが、糞をしかけるを清明きと見て、あはれ世にも逢ひ、年なども若くて容體もよき人にこそあんめれ、しきにうてけるにか、この鳥はしき神にこそありけれとおもふに、しかるべくて、この少將の生くべき報やありけん、いとほしう清明がおほえて、少將の側へ歩みよりて、御前へ参らせ給ふか、さかしく申すやうなれど、何か参らせ給ふ、殿は今夜えすぐさせ給はじと見奉るぞ、しかるべくて、おのれには見えさせ給へるなり、いざさせ給へ、物試みんとてこのひとつの車に乗りければ、少將わなよきて、あさましきことかな、さらば助け給へとて、一つ車に乗りて少將の里へ出でぬ。申の時ばかりの事にてありければ、かく出でなどし

つぶくと夜一
夜いもねず
どくとつぶや
きて一夜寝入り
もせず

しきをふせたり
けるしき神を
使ひて開伏する
なり

まもり強かりけ
る人神佛の守
護強き人にて少
將をさす

つる程に日も暮れぬ。清明、少將をつと抱きて身がためをし、又何事にか、つぶくと夜一夜いもねず、聲絶もせず讀み聞かせ加持しけり。秋の夜の長きによくししたりければ、曉方に戸をはたくと叩けるに、あれ人出して聞かせ給へとて、聞かせければ、この少將のあひ掣にて、藏人の五位のありけるも、同じ家にあなたこなたに据ゑたりけるが、この少將をば善き掣とてかしづき、今一人をば殊の外に思ひ落したりければ、ねたがりて、陰陽師を語らひて、しきをふせたりけるなり。さてその少將は死なんとしけるを、清明が見つけて夜一夜祈りたりければ、そのふせける陰陽師の許より人の來て、高やかに心の惑ひけるまよに、由なくまもり強かりける人の御爲に、仰せを背かじとてしきふせて、既にしき神かへりて、おのれ只今しきにうてて死に侍りぬ、すまじかりける事をしてと言ひけるを、清明これ聞かせ給へ、昨夜見つけ参らせざらましかば、かやうにこそ候はまじといひて、その使に人を添へて遣りて聞きければ、陰陽師はやがて死にけりとぞいひける。しきをふせさせける掣をば、舅やがて追ひ捨てけるとぞ。清明には

泣く／＼喜びて、多くの事どもして飽かず喜びける。誰とは覺えず、大納言までなり給ひけるとぞ。

季通殃に逢はんと欲する事

昔、駿河前司橘季通といふ者ありき。それが若かりける時、さるべき所なりける女房を、忍びて行き通ひけるほどに、其所そこにありける侍ども、なま六位の家人にてあらぬが、宵曉にこの殿へ出で入る事わびし、これ閉て籠めて勘かせんといふ事を、集りて言ひ合せけり。かよる事をも知らで、例の事なれば、小舎人童一人具して局に入りぬ。童をば、あかつき迎へに来よとて返しやりつ。この打たんとする男ども伺ひ護りければ、例のぬし來て、局に入りぬるはと告げまはして、彼方かなた此方こなたの門どもを閉し廻して、鑰かぎ取り置きて、侍ども曳杖ひきづゑして、築土ついでの崩くづれなどのある所に立ち塞ふさがりて護りけるを、その局の女の童けしきどりて、主まの女房にかよる事のさぶらふは、いかなる事にか候ふらんと告げければ、

○今昔二十三、駿河前司橘季通、横遊訪參照

勘ぜん一苦め體ちさん

曳杖して一杖を後に隠して曳きあるくなり

主の男一女房の仕ふる男主人

主の女も聞き驚き、二人臥したりけるが、起きて季通も装束して居たり。女房上まへに昇りて尋ねれば、侍共の心合せてするとは言ひながら、主の男も、空しらすしておはする事と聞き得て、すべきやうなくて局に歸りて泣き居たり。季通いみじきわざかな、恥を見てんすと思へどもすべきやうなし。女の童を出して、出でて往ぬべき少しの隙ひまやあると見せけれども、さやうの隙ひまある所には、四人五人づつくよりをあけそばを夾みて、太刀を佩き杖を脇夾みつゝ皆立てりければ、出づべきやうもなしと言ひけり。この駿河前司は、いみじう力ぞ強かりける。いかどせん明けぬとも、この局に籠り居てこそは、引出ひきだに入り來んものと取り合ひて死なめ、さりとも夜明けて後、我ぞ人ぞと知りなん後には、兎も角かたじけもえせじ、従者ぞんざども呼びに遣りてこそ、出でても行かめと思ひ居たりけり。曉にこの童の來て、心も得ず門叩きなどして、我小舎人童と心得られて、捕とらへ縛しばられやせんすらんと、それぞ不便ふびんに覺えければ、女の童を出して、もしや聞きつくと伺ひけるをも、侍どもはしたなくいひければ、泣きつゝ歸りて屈ままり居たり。かよるほどに、曉方に

もしや聞きつくと今昔には「若や來ると」とあり



うるせきやつ
巧悪なる者
引剝—追剝
けしうはあらじ
—其方に赴くも
不都合なし

かたへ—少数の
者

なりぬらんと思ふ程に、この童いかにしてか入りけん、入り来る音するを、侍、誰ぞその童はと、けしきどりて問へば、悪しく答へなんすと思ひ居たる程に、御讀經の僧の童子に侍りと名のる。さ名のられて疾く過ぎよといふ。賢く答へつる者かな、寄り来て、例呼ぶ女の童の名や呼ばんすらんと、又それを思ひ居たる程に、寄りも来て過ぎていぬ。この童も心得てけり、うるせきやつぞかし、さ心得ては、さりともたばかりの事あらんすらんと、童の心を知りたれば、たのもしく思ひたる程に、大路に女の聲して、引剝ありて人殺すやとをめく。それを聞きて、この立てる侍ども、あれ搦めよや、けしうはあらじと言ひて、皆走りかよりて、門をもえあけあへず、崩より走り出でて、何方へ去ぬるぞ、此方彼方と尋ね騒ぐ程に、此童の謀ることよと思ひければ、走り出でて見るに、門をば閉したれば門をば疑はず、崩のもとに、かたへは留りてとかくいふ程に、門のもとに走りよりて、鏢を捻ぢて引き抜きて、上ぐるまよに馳せ退きて、築土走り過ぐる程にぞ、この童は馳せあひたる。具して三町計走り延びて、例のやうにのどかに歩みて、い

いで侍りつる一
今昔に「入れて
候ひつる」とあ
るよるし
くぼまりうづ
くまり

かにしつる事ぞといひければ、門共の例ならず閉されたるに合せて、崩に侍どもの立ち塞がりて、嚴しけに尋ね問ひさぶらひつれば、其所にては、御讀經の僧の童子と名のり侍りつれば、いで侍りつるを、それより罷り歸りて、とかくやせましと思ひ給へつれども、参りたりと知られ奉らでは、悪しかりぬべく覺え侍りつれば、聲を聞かれ奉りて、歸り出でて、この隣なる女の童のくほまり居て侍るを、しや頭を取りて打ち伏せて、衣を剥ぎ侍りつれば、をめき候ひつる聲につきて、人々出でまうで來つれば、今はさりとも出でさせ給ひぬらんと思ひて、此方さまに参りあひつるなりとぞいひける。童なれども賢くうるせき者はかゝる事をぞしける。

○今昔二十五、
藤原保昌朝臣值
袴垂參照

袴垂保昌に逢ふ事

昔、袴垂とていみじき盜人の大將軍ありけり。十月ばかりに衣の用ありければ、衣少しまうけんとして、さるべき所々窺ひありきけるに、夜中ばかりに、人皆しづまりはてて後、

そばはさみて一
股立をとりては
さむなり

足を高くして一
今昔に「足を
高くして」とあ
り

月の朧なるに、衣數多著たりけるぬしの、指貫のそばはさみて、きぬの狩衣めきたる著て、唯一人笛吹きて、行きもやらすねり行けば、あはれこれこそ、我に衣得させんとて出でたる人なめれとおもひて、走りかゝりて衣を剥がんと思ふに、怪しく物の恐しく覺えければ、添ひて二三町ばかり往けども、我に人こそ附きたれと思ひたる氣色もなし。いよく、笛を吹きて往けば、試みんと思ひて、足を高くして走り寄りたるに、笛吹きながら見かへりたる氣色、取りかゝるべくも覺えざりければ走り退きぬ。かやうに數多度とさまかうさまにするに、露ばかりも騒ぎたる氣色なし。希有の人かなと思ひて、十餘町ばかり具して行く。さりとてあらんやはと思ひて、刀を抜きて走りかゝりたる時にそのたび笛を吹き止みて、立ちかへりて、こは何者ぞと問ふに、心も失せて、我にもあらでつゐるられぬ。又いかなる者ぞと問へば、今は逃ぐともよも逃さじと覺えければ、引剝にさぶらふといへば、何者ぞと問へば、字袴垂となんいはれさぶらふと答ふれば、さいふ者ありと聞くぞ、危ふけに希有のやつかなといひて、共にまうでことばかり

いひかけて、又同じやうに笛吹きて行く。この人の氣色、今は逃ぐともよも逃さじと覺えければ、鬼に神取られたるやうにて、共に行くほどに家に行きつきぬ。何所ぞと思へば、攝津前司保昌といふ人なりけり。家の内に呼び入れて、綿厚き衣一つを賜はりて、衣の用あらん時は参りて申せ、心も知らざらん人に取りかよりて、汝あやまちすなとありしこそ、あさましくむくつけく恐しかりしか。いみじかりし人の有様なりと、捕へられて後かたりける。

明衡殃に逢はんと欲する事

昔博士にて、大學頭明衡といふ人ありき。若かりける時、さるべき所に宮仕しける女房をかたらひて、その所に入り臥さん事便なかりければ、その傍にありける下種の家を借りて、女房かたらひ出して臥さんといひければ、男あるじはなくて妻ばかりありけるが、いと易き事とて、おのれが臥す所より外に臥すべき所なかりければ、我臥し所を去りて、

○今昔二十六、
藤原明衡朝臣若
時行女許頭參照

そらいき―處行
れて、獨りて他
行の風をなすな
り

女房の局の疊を取り寄せて寢にけり。家あるじの男、我妻の密男すると聞きて、その密男、今宵なん逢はんと構ふると告ぐる人ありければ、來んを構へて、殺さんと思ひて、妻には遠く物へ行き、今四五日かへるまじきといひて、そらいきをして伺ふ夜にてぞありける。家あるじの男、夜更けて立ち聞くに、男女の忍びて物言ふ氣色しけり。さればよ隠男來にけりと思ひて、密に入りて伺ひ見るに、我寢所に男女と臥したり。暗ければ憶にけしき見えす。男の躰聲する方へやをらのほりて、刀を逆手に抜き持ちて、腹の上と思しきほどを、探りて突かんと思ひて、腕を持ち上げて突き立てんとする程に、月影の板間より洩りたりけるに、指貫のくより長やかにて、ふと見えければ、それにきと思ふやう、我妻の許には、かやうに指貫著たる人はよも來じものを、若し人たがへしたらんは、いとほしく不便なるべき事と思ひて、手をひき返して、著たる衣などを探りける程に、女房ふと驚きて、此所に人の音するは誰ぞと、忍びやかにいふけはひ、我妻にあらざりければ、さればよと思ひて居退きけるほどに、この臥したる男も驚きて、誰ぞ



思ひけるやう
—此七字今昔に
よりて補ふ

宿にこそ一本
「こころにこそ」と
あり

誰ぞと問ふ聲を聞きて、我妻の下なる所に臥して思ひけるやう。晝我男の氣色の怪しかりつる、それが密に來て人違などするにやと覺えける程に、驚きさわぎて、あれは誰ぞ、盗人かなと罵る聲の我妻にてありければ、他人々の臥したるにこそと思ひて、走り出でて、妻が許にいきて鬘をとりて引き伏せて、如何なる事ぞと問ひければ、妻さればよと思ひて、かしよういみじき過すらん、彼所には上、藤の今宵ばかりとて借らせ給ひつれば、貸し奉りて、我は宿にこそ臥したれ、希有のわざする男かなと罵る時にぞ、明衡も驚きて、いかなる事ぞと問ひければ、その時に男出て來ていふやう、おのれは甲斐殿の雑色某と申す者にて候ふ。一家の君おはしけるを知り奉らで、ほとく過をなん仕るべく候ひつるに、希有に御指貫のくよりを見つけて、しかく思ひ給へてなん、腕をひきしめて候ひつるといひて、いみじう詫びける。甲斐殿といふ人は、この明衡の妹の男なりけり。思ひかけぬ指貫のくよりの徳に、希有の命をこそ生きたりけれ。かよれば人は忍ぶといひながら、あやしの所には立ち寄るまじきなり。

○今昔十、區毎
日見卒都婆付血
語參照

しみこほりさ
ゆる意

唐卒都婆に血つくる事

昔、唐土たうどに大なる山ありけり。その山の巔たかねに、大なる卒都婆そとば一つ立てりけり。その山の麓ふもとの里に、年八十ばかりなる女の住みけるが、日に一度、その山の峯たかねにある卒都婆を必ず見けり。高く大なる山なれば、麓より峯へ登るほど、峻たかねしく岨はらしく道遠かりけるを、雨降り雪降り、風吹き雷鳴いかづちり、しみこほりたるにも、又暑く苦しき夏も一日も缺かず、必ず登りてこの卒都婆を見けり。かくするを人え知らざりけるに、若き男どもも童わらわも、夏暑かりけるころ峯にのほりて、卒都婆のもとに居つゝ涼みけるに、この女汗を拭ぬぐひて、腰二重なるものの杖にすがりて、卒都婆のもとに來て、卒都婆を廻りければ、拜み奉るかと思れば、卒都婆をうち廻りては、即ち返りくする事一度にもあらず、數多度あまたたびこの涼む男どもに見えにけり。この女は、何の心ありて、かくは苦しきにするかと怪しがりて、今日見えば、この事問はんと言ひ合せける程に、常の事なれば、この女匍はふく登

親一今昔に父とあり
それに又父祖父などは一今昔に「又それが父や祖父などは」とあるよし
をこがり馬鹿にする事

りけり。男ども女にいふやう、わ女は何の心によりて、我等が涼みに來るだに、暑く苦しく大事なる道を、涼まんと思ふによりて登り來るだにこそあれ、涼むこともなし、別にする事もなくて、卒都婆を見廻るみかへる事にて、日々に登りおるよこそ怪しき女のわざなれ、この故知らせ給へと言ひければ、この女、若き主ぬしたちは實にあやしと思ひ給ふらん、かく詣よで來てこの卒都婆見ることは、この頃の事にしも侍らず、物の心知り始めてより後のちこの七十餘年、日毎にかく登りて卒都婆を見奉るなりといへば、その事の怪しく侍るなり、その故をの給へと問へば、おのれが親は、百二十にてなん亡せ侍りにし、祖父は百三十ばかりにてぞ失せ給へりし、それに又父祖父などは、二百餘年までぞ生きて侍りける、其人々の言ひ置かれたりけるとて、此卒都婆に血の附かん折になん、此山は崩れて深き海となるべきとなん父の申し置かれしかば、麓ふもとに侍る身なれば、山崩ぶれなで打掩はれて死にもぞすると思へば、若し血附かば逃けて退かんとて、かく日毎に見侍るなりといへば、この聞く男どもをこがり嘲りて、恐しきことかな、崩れん時は告げ給へなど笑

血をあやして
血を瀧らしそめ
て

おほちかー多く

具足—道具

ひけるをも、我をあざけりていふとも心得ずして、さらなり、いかでかは我一人逃げんと思ひて、告げ申さざるべきといひて、歸り降りにつけり。この男ども、この女は今日はよも来じ、明日又来て見んに、威して走らせて笑はんと言ひ合せて、血をあやして卒都婆に能く塗り附けて、この男ども歸りおりて、里の者どもに、この體なる女の日毎に峯に登りて、卒都婆見るを怪しさに問へば、云々なんいへば、明日おどして走らせんとて、卒都婆に血を塗りつるなり、さぞ崩らんものやなど言ひ笑ふを、里の者ども聞き傳へて、をこなることのためしに引き笑ひけり。かくて又の日女登りて見るに、卒都婆に血のおほらかにつきたりければ、女うち見るまよに色を遠へて仆れまろび、走り歸りて叫び言ふやう、この里の人々、疾く逃げ退きて命生きよ、この山は只今崩れて、深き海になりなんとすと、普く告げ廻して、家に行きて、子孫共に家の具足どもおほせ持たせて、おのれも持ちて、手惑して里うつりしぬ。これを見て血附けし男ども、手打ちて笑ひなどする程に、その事ともなくさどめき罵りあひたり。風の吹き來るか、雷の鳴るかと思ひ

つゝ聞—まつく
ちやみ

○此話述異記撰
神記等にいづ

怪むほどに、空もつゝ闇になりて、あさましく恐しけにて、この山震き立ちにけり。こはいかにくゝと罵り合ひたる程に、唯崩れに崩れもてゆけば、女は實しけるものをなど言ひて、逃げ得たる者もあれども、親の行方も知らず、子をも失ひ、家の物の具も知らずなどして、をめき叫びあひたり。この女一人ぞ子孫も引き具して、家の物の具一つも失はずして、かねて逃げ退きて靜に居たりける。かくてこの山皆崩れて、深き海となりにければ、これを嘲り笑ひし者どもは皆死にけり。あさましき事なりかし。

業村強力の學士に逢ふ事

昔、業村といふ相撲ありけり。時に國々の相撲どものほり集りて、相撲節待ちけるほど、朱雀門に集りて涼みけるが、その邊遊び行くに、大學の東門を過ぎて、南ざまに行かんとしけるを、大學の衆共も數多東の門に出でて、涼みて立てりけるに、この相撲どもの過ぐるを通さじとて、なりせいせん、なりたかといひて、立ち塞がりて通さどりけれ

○今昔二十三、
大學衆試相撲人
成村語參照
相撲節—古は七
月に相撲人を禁
苑に召して角力
せしめたること
とあり、其を相
撲節會といふ
大學の衆—大學
の學生
なりせいせん—

壁高し脚にせよ
といはんが如し

尻鼻一尻べた

脇をかきて一胸
の脇をかきて
自負得意のさま
敷議にてこそ云
云一今昔に「辛
くてこそ生か
め」とあり

ば、さすがにやごつなき所の衆共のする事なれば、破りてはえ通らぬに、長矮らかなる衆の、冠袍衣、他人よりは少しよろしきが、中に優れて出で立ちて、痛く制するがありけるを、業村は見つめてけり。いざ／＼歸りなんとて本の朱雀門に歸りぬ。そこにていふ、この大學の衆悪しき奴どもかな、何の心に我等をば通さじとはするぞ、唯通らんと思ひつれども、さもあれ、今日は通らで明日通らんと思ふなり、長矮やかにて、中に優れてなりせいせんといひて、通さじと立ち塞がる男、にくきやつなり、明日通らんにも、必ず今日のやうにせんすらん、何主、その男が尻鼻、血あゆばかり必ず蹴給へといへば、さいはるゝ相撲脇をかきて、おのれが蹴てんには、いかにも生かじものを、敷議にてこそ生かめといひけり。この尻蹴よと言はるゝ相撲は、おほえある力他人よりは優れ、走りとかなどありけるを見て、業村もいふなりけり。さてその日は、各家にかへりぬ。又の日になりて、昨日参らざりし相撲など敷多召し集めて、人がちになりて通らんと構ふるを、大學の衆もさや心得にけん、昨日よりは人多くなりて、かしがましようなりせいせん

目をくはせ一日
くばせすること

かたへの一方

振りぬきて一振り
飛びされて
心もあかす一今
昔に「所もあか
ず」とあり

と言ひ立てりけるに、この相撲共うち群れて歩みかよりたり。昨日優れて制せし大學の衆、例の事なれば、優れて大路の中に立ちて、過さじと思ふ氣色したり。業村尻蹴よといひつる相撲に、目をくはせければ、この相撲人より長高く、大きにわかく勇みたる男にて、くより高やかに搔き上げて、さし進み歩みよる。それに續きて、他相撲も唯とほりに通らんとするを、かの衆共も通さじとする程に、尻蹴んとする相撲、かくいふ衆に走りかかりて、蹴倒さんと足をいたくもたけたるを、この衆は目をかけて、背を撓めて逃ひければ、蹴外して足の高くあがりて、のけざまになるやうにしたる足を、大學の衆取りてけり。その相撲を、細き杖などを人の持ちたるやうに引下けて、かたへの相撲に走りかよりければ、それを見てかたへの相撲逃げけるを追ひかけて、其手に下けたる相撲をば擲ければ、振りぬきて、二三段ばかり擲けられて仆れ伏しにけり。身碎けて、起き上るべくもなくなりぬ。それをば知らず、業村がある方さまへ走りかよりければ、業村も目をかけて逃げけり。心もおかす追ひければ、朱雀門の方さまに走りて、脇の門より走り入る

杵加へながら
杵はきたるまじ

人杖一人間を杖
のやうにふりま
はすこと

かたの助一今昔
比「方の將」とあ
り、相撲の官人
にて左方右方の
取締なるべし

を、やがてつめて走りかよりければ、捕へられぬと思ひて、式部省の築土越えけるを、引き留めんとて手をさしやりたりけるに、早く越えければ、他所をばえ捕へず、片足少し下りたりける踵を、杵加へながら捕へたりければ、杵の踵に足の皮を取り加へて、杵の踵を、刀にて斬りたるやうに、引き切りて取りけり。業村、築土の内に立ちて足を見ければ、血走りて留まるべくもなし。杵の踵切れて失せにけり。我を追ひける大學の衆あさましく力あるものにてぞありけるなめり。尻蹴つる相撲をも、人杖につかひて投げ砕くめり。世の中廣ければ、かよる者のあるこそ恐しきことなれ。投げられたる相撲は、死に入りたりければ、物にかき入れて、荷ひて持て行きけり。この業村、かたの助に云々の事なん候ひつる、かの大學の衆は、いみじ相撲にさぶらふめり。業村と申すとも、あふべき心地仕らずと語りければ、かたの助は宣旨申し下して、式部丞なりとも、その道に堪へたらんはと言ふ事あれば、まして大學の衆はなんでふことかあらんとて、いみじう尋ね求められけれども、その人とも聞えずして止みにけり。



○今昔二十、天
狗現佛座木末語
參照

晝の裝束—東帶
檳榔の車—檳榔
の葉をさきて屋
方の簾に垂れた
る車
あからめ—陽日

ふためく—バダ
バタするさま

柿木に佛現する事

昔、延喜の帝みかさの御時五條の天神のあたりに、大なる柿の木の実ならぬあり。その木のうへに、佛現れておはします。京中の人こゝろ舉りて参りけり。馬車も立てあへず、人もせきあへず拜みのよしりけり。かくするほどに五六日あるに、右大臣殿心得す思し給ひける間、實まことの佛の世の末に出で給ふべきにあらず、我行きて試みんとおほして、晝ひるの裝束うしろは麗しくして、檳榔びんがうの車くるまに乗りて、御前多く具して、集りつどひたる者ども退のけさせて、車かけはづして、榻たたを立てて、木末を目もたよかずあからめもせずして、まもりて一時ばかりおはするに、この佛暫しこそ花もふらせ、光をも放ち給ひけれ。あまりにくく守られて、しわびて、大なるくそとびの羽折れたる、土に落ちて感あはれふためくを、童わらわども寄りて打ち殺してけり。大臣おきは、さればこそとて還り給ひぬ。さて時の人この大臣を、いみじく賢き人にておはしますとぞのよしりける。

宇治拾遺物語 卷第三

大太郎盗人の事

昔大太郎とて、いみじき盗人の大將軍ありけり。それが京へ上りて、物取りぬべき所あらば、入りて物取らんと思ひて、窺のぞひ歩きけるほどに、周圍めぐりもあばれ、門などもかたへは倒れたる、横よこさまに寄せ懸けたる所のあたけなるに、男といふ者は一人も見えずして女のかぎりにて、張物はりもの多く取り散してあるに合せて、八丈賣るものなど數多あまた呼び入れて、絹多く取り出でて、選り換へさせつと物どもを買へば、物多かりける所かなと思ひて、立ちとまりて見入るれば、折しも風の、南の簾すだれを吹きあけたるに、簾の内に何の入りたりとは見えねども、皮子のいと高くうち積まれたる前に、蓋ふた開きて、絹なめりと見ゆる物取り散してあり。これを見て、うれしきわざかな、天道の我に物を賜ふなりけりと思

あばれ—荒れ
あたけなる—類
敗せる
八丈—絹布の
名、尾張八丈美
濃八丈等の名あり

たぎり湯一沸騰したる湯

見ふせて一見伏せてにて、見すます意かけしきけなるもの一怪しき氣なるもの

ひて、走りかへりて、八丈一疋、人に借りて持て来て賣るとて、近く寄りて見れば、内にも外にも男といふ者は一人もなし。唯女どもの限して、見れば皮子も多かり。物は見えねど、うづだかく蓋掩はれ、絹なども殊の外にあり。布うち散らしなどして、いみじく物多くありけなる所かなと見ゆ。たかくいひて、八丈をば賣らで持ちてかへりて主に取りらせて、同類どもに、かゝる所こそあれと言ひ廻して、その夜来て門に入らんとするに、たぎり湯を面にかくるやうに覺えて、ふつとえ入らず。こはいかなる事ぞとて、集りて入らんとすれど、せめて物の恐しかりければ、あるやうあらん、今宵は入らじとて歸りにけり。翌朝、さてもいかなりつる事ぞとて、同類など具して、賣物なぞ持たせて来て見るに、いかにも煩しき事なし。物多くあるを、女どものかぎりして取出で取納めすれば、事にもあらずと返すく、思ひ見ふせて、又くるれば、よくく認めて入らんとするに、猶恐しく覺えてえ入らず、わぬしまづ入れくと言ひたちて、今宵もなほ入らずなりぬ。又翌朝も同じやうに見ゆるに、猶けしきけなるものと見え、唯我憶病にて覺ゆるなめ

身をなきになして一身をなきものに思ひなしてかたへ一自餘の者

矢をつまよるおと一爪にて矢を捻る音 背をそらしたるやう一背をうしるへ引戻さるるやう

りとして、又その夜よく認めて行き向ひて立てるに、日比よりなほ物おそろしかりければ、こはいかなる事ぞといひて、かへりていふやうは、事を起したらん人こそはまづ入らめ、まづ大太郎が入るべきといひければ、さもいはれたりとして、身をなきになして入りぬ。それに取りつきて、かたへも入りぬ。入りたれども、猶物の恐しければ、やはら歩み寄りて見れば、あばらなる屋の内に火燈したり。母屋の際に懸けたる簾をば下して、簾の外に火をば燈したり、誠に皮子おほかり。かの簾の中の恐しく覺ゆるに合せて、簾の内に矢をつまよるおとのするが、その矢の来て、身に立つ心地して、いふばかりなく恐しく覺えて、歸り出づるも背をそらしたるやうに覺えて、構へて出でえて、汗を拭ひて、こはいかなることぞ、あさましく恐しかりつる爪よりの音かなと、言ひ合せてかへりぬ。そのつとめて、その家の傍に、大太郎が知りたりける人のありける家に行きたれば、見つけていみじく響應して、いつのほり給へるぞ、覺束なく侍りつるなどいへば、只今参うで來つるまよに参うで來るなりといへば、土器参らせんとて酒沸して、黒き土器の大



立ち走りたちけ
るものは云々
立ち走りけるも
のか、うつぶし
に倒れにけるの
誤なるべし

忠家―道長の孫
にして長家の子
びくしき―美々
しき

なるを盃にして、土器取りて大太郎にさして、家あるじ飲みて土器渡しつ。大太郎取りて、酒を一土器受けて持ちながら、この北には誰が居給へるぞといへば、驚きたる氣色にて、まだ知らぬか、大矢のすけたけのぶの、この頃上りて居られたるなりといふに、さは入りたらししかば、皆敷を盡して射殺されなましと思ひけるに、物もおほえず臆して、その受けたる酒を、家あるじに頭よりうちかけて、立ち走りたちけるものは、うつぶしに倒れにけり。家あるじあさましと思ひて、こはいかにくくに言ひけれど、かへりみだにもせずして逃けて去にけり。大太郎がとられて、武者の城の恐しきよしを語りけるなり。

藤大納言忠家物言ふ女放屁の事

今は昔、藤大納言忠家といひける人、いまだ殿上人におはしける時、びよしき好色なりける女房と物言ひて、夜更くるほどに、月は晝よりも明かりけるに、堪へ兼ねて御簾を

扇をかきて一扇
を女の身にかげ
てくるめき一懐て
なちしてけり一
放屁したること
なり

あやまち一放屁
の事をさす

○古事談卷二參
照
定頼一公任の子
時の關白一敦通
公なり

うちかづきて、長押の上に昇りて、扇をかきて引き寄せられける程に、髪を振りかけて、あなあさましと言ひてくるめきける程に、いと高くならしてけり。女房は言ふにも堪へず、くだくとして寄り臥しにけり。この大納言、心憂き事にも逢ひぬるかな、世にありても何にかはせん、ハ出家せんとて、御簾の裾を少し搔き上げて拔足をして、疑なく出家せんと思ひて、二間ばかりは行くほどに、そもくその女房あやまちせんからに、出家すべきやうやあると思ふ心またつきて、たどくと走り出でられにけり。女房はいかがなりけん知らずとか。

小式部内侍定頼卿の經にめでたる事

今は昔、小式部の内侍に、定頼中納言物言ひわたりけり。それにまた時の關白通ひ給ひけり。局に入りて臥し給ひたりけるを知らざりけるにや、中納言寄り来て叩きけるを、局の人かくとや言ひたりけん、杳をはきて行きけるが、少し歩み退きて、經をはたとう

かふらぎ一雨條
郡甲斐城補

物一渡買
無下にはあるぞ
一甚だ無情なる
をいふ

ちあけて讀みたりけり。二聲ばかりまでは、小式部内侍、きと耳を立つるやうにしければ、この入りて臥し給へる人、怪しと思しけるほどに、少し聲違うなるやうにて、四聲五聲ばかり、行きもやらで讀みたりける時、うといひて後さまにこそふしかへりたりけれ。この入り臥し給へる人のさばかり堪へ難う、恥しかりしことこそなかりしかと、後にの給ひけるとかや。

山伏船祈りかへす事

これも今は昔、越前の國かふらぎのわたりといふ所に、渡せんとものども集りたるに、山伏あり、けいたう房といふ僧なりけり。熊野御嶽はいふに及ばず、白山、伯耆の大山出雲の鰐淵、大方修行し残したる所なかりけり。それにこのかふらぎの渡に行きて渡らんとするに、渡りせんとする者雲霞の如し。各物を取りて渡す。このけいたう房渡せといふに、渡守聞きも入れて漕ぎ出づ。其時にこの山伏、いかにかくは無下にはあるぞとい

數珠を碎けぬと
一數珠をも碎け
よとばかり

早う率ておはせ
一護法にいよな
リ
すけなち一護字
なるべし
むざう一無難の
字音

へども、大方耳にも聞き入れずして漕ぎ出す。その時にけいたう房、齒をくひ合せて、念珠をもみちぎる。この渡守見かへりて、をこの事と思ひたる氣色にて、三四町ばかり行くを、けいたう房見遣りて、足を砂子に脛の半ばかり踏み入りて、目も赤く睨みなしで、數珠を碎けぬともみちぎりて、召し返せくと叫ぶ。猶行き過ぐる時に、けいたう房、袈裟と念珠とを取り合せて、汀近く歩み寄りて、護法召しかへせ、召し返さずば、長く三寶に別れ奉らんと叫びて、この袈裟を海に投げ入れんとす。それを見て、この集ひ居たる者ども、色を失ひて立てり。かく言ふ程に風も吹かぬに、この行く船のこなたへよりく。それを見てけいたう房、よるめるはく、早う率ておはせくと、すはなちをして、見る者色を遠へたり。かくいふほどに、一町ばかりが内に寄り來たり。その時けいたう房、さて今はうち返せくと叫ぶ。その時に集ひて見る者ども、一聲にむざうの申すやうかな、ゆよしき罪にも候ふ、さておはしませくといふ時、けいたう房今少し氣色變りて、はやうち返し給へと叫ぶ時に、この渡船に二十餘人乗りたる者、つぶり

あないたのやつ
ばら云々あり
あるかの者や
我法力の程を知
らぬか

覺猷一源陸國の
子
國俊一中納言陸
俊の子
生腹だたしう
ムズくと腹だ
たしくおもふな
り

とうのれ一疾く
乗れ

となけ返しぬ。その時けいたう房汗を押し拭ひて、あないたのやつばらや、まだ知らぬかといひて立ち歸りにけり。世の末なれども、三寶おはしましけりとなん。

鳥羽僧正國俊と戯るゝ事

これも今は昔、法輪院大僧正覺猷といふ人おはしけり。その甥に陸奥前司國俊、僧正の許へ行き、参りてこそ候へといはせければ、只今見参すべし、そなたに暫しおはせとありければ、待ち居たるに、二時ばかりまで出であはねば、生腹だたしう覺えて、出でなんと思ひて、供に具したる雜色を呼びければ、出で來たるに、沓もてこと言ひければ持て來たるをはきて、出でなんといふに、この雜色がいふやう、僧正の御房の陸奥殿に申したれば、とうのれとあるぞ、その車率て來とて、小御門より出でんと仰事候ひつれば、やうぞ候ふらんとて、牛飼載せ奉りて候へば、待たせ給へと申せ、時のほどぞあらんする、やがて歸りこんするぞとて、早う奉りて出させ給ひ候ひつるに、今はかうて一

うちさしのき
叔父の中なれ
ばよきしき
人ならずと也

一はた一パイ
といふに同じ
えさいかさいと
りふすま一僧正
が湯槽に入る時
調する咒文と見
えたり
さくと一チャツ
ト

違ひて一行きち
がひに
はやらか一早く

時には過ぎ候ひぬらんといへば、わ雑色は不覺のやつかな、御車をかくめしのさぶらふはと、我にいひてこそ貸し申さめ、不覺なりといへば、うちさしのきたる人にもおはしまさず、やがて御尻切奉りて、きとよく申したるごと仰事候へば、力及び候はざりつるといひければ、陸奥の前司歸り上りて、いかにせんと思ひ廻すに、僧正は定りたる事にて、湯槽に薬をこまなくと切りて、一はた入れて、それが上に蕙を敷きて、歩き廻りてはさうなく浴室へ行き、裸體になりて、えさいかさいとりふすまといひて、湯槽にさくとのけざまに臥すことをぞし給ひける。陸奥前司よりて、蕙を引き上げて見れば、誠に薬をこまなくと切り入れたり。それを浴室の垂布を解きおろして、この薬を皆取り入れて、能く包みて、その湯槽に湯桶を下に取り入れて、それが上に碁盤を裏返して置きて、蕙を引き掩ひて、さりけなくて、垂布に包みたる薬をば、大門の脇に隠し置きて待ち居たる程に、二時あまりありて、僧正小門より歸る音しければ、違ひて大門へ出でて、歸りたる車呼び寄せて、車の尻にこの包みたる薬を入れて、家へはやらかに遣りておりて、

ゆくりもなく
不意に
いかり一箇の形
に似たるよりの
ふか、又は突起
したるさまを怒
りといへるにや

人の書かする佛
もはしけり
人より佛を書き
てくれよと頼ま

この薬を牛のあちこち歩き困じたるに喰はせよとて、牛飼童に取らせつ。僧正は例の事なれば、衣ぬぐ程もなく例の浴室へ入りて、えさいかさいとりふすまといひて、湯槽へ躍り入りて、仰けざまにゆくりもなく臥したるに、碁盤の足のいかりさしあがりたるに、尻骨を荒うつきて、年たかうなりたる人の死に入りて、さしそりて臥したりけるが、その後音なかりければ、近う仕ふ僧寄りて見れば、目をかみに見つけて死に入りてねたり。こはいかにといへど答もせず。寄りて顔に水吹きなぞして、とばかりありてぞ息の下におろくいはれける。このたはぶれいとはしたなかりけるにや。

繪佛師良秀家の焼くるを見てよろこぶ事

これも今は昔、繪佛師良秀といふありけり。家の隣より火出で来て、風おし掩ひて責めければ、逃げ出でて大路へ出でにけり。人の書かする佛もおはしけり。また衣絹妻子なども、さながら内にありけり。それも知らず、唯逃げ出でたるをことにして、向ひのつら

れたるものもあ
りとたり

せうとく一所得
なりこの災の
ために善法を悟
り得たれば所得
とはいふなり

わたりたち一和
風運にて、故等
の意
よどり不動一火
災の上ぢれもど
れて眞に迫りた
るより此名あり
し也

○今昔二十九、
羅西人渡新羅値

に立てり見れば、既に我家に移りて、けりほのほ 烟炎くゆりけるまで、大方向ひのつらに立ちて
ながめければ、あさましき事とて、人ども來訪きせらひけれど騒がず。いかにと人言ひければ、
向ひに立ちて家の焼くるを見て、うちうなづきて時々笑ひけり。あはれしつるせうとく
かな、年比はわろく書きけるものかなといふ時に、訪問きせらに來たる者ども、こはいかにか
くては立ち給へるぞ、あさましきことかな、物のつき給へるかといひければ、なんでふ
物のつくべきぞ、年比不動尊としごろの火饑くやんを悪しく書きけるなり、今見れば、かうこそ燃えけ
れと心得つるなり、これこそせうとくよ、この道を立てて世にあらんには、佛だによく
書き奉らば、百千の家も出できなん、わたうたちこそさせる能のうもおはせねば、物をも惜
み給へといひて、嗤笑あやわらひてこそ立てりけれ。その後によ、良秀がよぢり不動とて、今に
人々めであへり。

虎の鱒とりたる事

虎語參照

三四十丈云々
今昔には「三四
丈あがりたる
に」とあり
つとまりて一
躍り居て

ひらがりを一
ひらびたくなり
て居る

これも今は昔、筑紫の人商あきなひしに新羅しらぎに渡りけるが、商ひはてて歸る路に、山の根に添
ひて船に水汲み入れんとて、水の流れ出でたる所に船を留めて水を汲む。その程船に乗
りたるもの、舩ふねに居てうつぶして海を見れば、山のかげ寫りたり。高き峰の三四十丈ば
かり餘りたる上に、虎つとまりて物を伺ふ、その影水にうつりたり。その時に人々に
告げて、水汲むものを急ぎ呼び乗せて、手ごとてに艫かを押して急ぎて船を出す。その時に
虎躍りおりて船に乗るに、船は疾はやくいづ。虎は落ち來るほどのありければ、今一丈ばか
りを、え躍りつかで海に落ち入りぬ。船を漕ぎて急ぎて行くまゝに、この虎に目をかけ
て見る。暫時しばしばかりありて、虎海より出で來ぬ。泳ぎて陸くわさまに上りて、汀あぎはに平なる石
の上に登るを見れば、左の前足を、膝より噛み食ひ切られて血あゆ。鱒なにくひ切られた
るなりけりと見る程に、その切れたる所を、水に浸ひたしてひらがりを、如何にするか
と見るほどに、沖かきの方より、鱒、虎の方をさして來ると見る程に、虎右の前足をもて、
鱒の頭に爪を打ち立てて、陸さまに投げ上ぐれば、一丈ばかり濱に投げあけられぬ。の



なえく〜なよ
なよ

手を立てたるや
う〜斷崖の形容

力強く早から
には〜今昔には
「力の強く足の
早からんには」
とあり

よきを取られて
〜善きと斧とを
かけていへり、
わりは斧の鋭

けざまになりてふためく願ねがひの下を躍り懸りて、食たひて二ふた度三さん度ばかりうち振りて、なえ
 なえとなして、肩にうち懸けて、手を立てたるやうなる岩の五六丈あるを、三つの足を
 持ちて、くだり坂を走るが如く登りて行けば、船の内なる者ども、これが所業しわざを見るに、
 なからは死に入りぬ。船に飛びかよりたらましかば、いみじき劔刀を抜きて合ふとも、
 かばかり力強く早からんには、何事なにわざをすべきと思ふに、肝心きんこころ失せて船漕ぐそらもなく
 なん、筑紫にはかへりけるとかや。

樵夫歌の事

今は昔、樵夫せうぶの山守やまもりに斧きりを取られて、わびし心うしと思ひて、頼杖たのづえつきて居りける。山
 守見て、さるべきことを申せ、取らせんといひければ、

悪しきだになきはわりなき世の中によきを取られて我いかにせん
 と詠みたりければ、山守返しせんと思ひて、こよ〜とうめきけれど、えせざりけり。さ

語、あしき、よきに木を含めたり

たけの大夫一平
維新常陸多氣色
に居たるよりい
ふ
うれへ一訴願す
ること
越前守一越前守
は越前守の誤に
て高階成願をさ
す、其女が即ち
伯の母なり
伯の母一神武伯
康資王の母なれ
ばいふなり
世にめでたき人
一本「人」の字
なし
いりもみ一さま
ざまに心を研き
て思ふこと

て斧かへし取らせてければ、嬉しと思ひけりとぞ。人はたゞ歌をかまへて詠むべしと見えたり。

伯の母の事

今は昔、たけの大夫といふ者の、常陸より上りてうれへするころ、むかひに、越前守といふ人の許に經誦しけり。この越前守は伯の母とて、世にめでたき人、歌よみのおやなり。妻は伊勢の大輔、姫君達數多あるべし。たけの大夫徒然に覺ゆれば、聽聞に参りたりけるに、御簾を風の吹きあけたるに、なべてならず美しき人の紅の一重かさね著たるを見るより、この人を妻にせばやと、いりもみ思ひければ、その家の上童を語らひて問ひ聞けば、大姫御前の紅は奉りたると語りければ、それに語らひつきて、我に盜ませよといふに、思ひかけずえせじと言ひければ、さらばその乳母を知らせよといひければ、それはさも申してんとて知らせてけり。さていみじく語らひて、金百兩取らせなどして、この

風の告げしは一
後拾遺には「風
につけしは」と
あり
姉一前に大姫御
前とありし人な
り
こちのかへし一
西風

うへ一奥方
四年が間云々一
常陸守任期四年
の間二人の女國
司の事を伯母に
もつ事を名譽に
も思はず

姫君を盜ませよと責めいひければ、さるべき契にやありけん、盜ませてけり。やがて乳母うち具して、常陸へ急ぎ下りにけり。跡に泣き悲めどかひもなし。程經て乳母音づれたり。あさましく心憂しと思へども、いふかひなき事なれば、時々うち音づれて過ぎけり。伯の母、常陸へかくいひやり給ふ。

にほひきやみやこの花は東路のこちのかへしの風の告げしは
かへし、姉、

吹き返すこちのかへしは身にしみき都の花のしるべと思ふに

年月へだたりて、伯の母常陸守の妻にて下りけるに、姉はうせにけり。女二人ありけるが、かくと聞きて参りたりけり。田舎の人とも見えす、いみじくしめやかに恥しけにばかりけり。常陸守のうへを、昔の人に似させ給ひたりけるとて、いみじく泣き合ひたりけり。四年が間名聞にも思ひたらず、用事などいはずりけり。任はてて上るをりに、常陸守、無下なりける者どもかな、かくなん上ると言ひに遣れと、男にいはれて、伯の母

常陸守のありけ
る—常陸守の中
されける

上るよし言ひに遣りたりければ、うけたまはりぬ、参り候はんとて、明後日上らんとての日参りたりけり。えもいはぬ馬、一つを寶にするほどの馬十匹づつ、二人して、又皮子おほせたる馬ども百匹づつ、二人して奉りたり。何とも思ひたらず、かばかりの事したりとも思はず、うち奉りて歸りにけり。常陸守のありける常陸四年が間のものは、何ならず、その皮子のものでしてこそ、萬の功德も何もし給ひけれ。ゆよしかりけるものどもの、心の大きさ廣さかなと語られけるとぞ。この伊勢の大輔の子孫は、めでたき幸福人多く出で來給ひたるに、大姫君の、かく田舎人になられたりける、あはれに心憂くこそ。

同人佛事の事

今は昔、伯の母佛供養しけり。永縁僧正を請じて、様々の物どもを奉る中に、紫の薄様に包みたるものあり。あけて見れば、

永縁僧正—式部
源永相の子

名簿—名刺

朽ちにける長柄の橋のはしはしら法のためにも渡しつるかな
長柄の橋のきれなりけり。又の日まだつとめて、若狭阿闍梨覺縁といふ人、歌よみなるが來たり。あはれこのことを聞きたるよと僧正おほすに、御懷より名簿を引き出でて奉る。この橋のきれ給はらんと申す。僧正かばかりの希有のものは、いかでかとして、何しにか取らせ給はん、口惜しとてかへりにけり。すきくしくあはれなる事どもなり。

藤六の事

今は昔、藤六といふ歌よみありけり。下種の家に入りて、人もなかりける折を見つけて入りにけり。鍋にある物をすくひける程に、家あるじの女水を汲みて、大路の方より來て見れば、かくすくひ喰へば、いかにかく人もなき所に入りてかくはする、物をばまるぞ。あなうたてや、藤六にこそいましけれ、さらば歌詠み給へといひければ、昔より阿彌陀佛のちかひにて養ゆるものをばすくふとぞ知る

藤六—藤原輔
相、弘隆の第六
子なるより藤六
といふ
鍋にある—折本
「鍋にける」と
あり
ちかひにて云々
—誓と點(カヒ)
教ふと妙ふとに
掛く

○今昔十七、聊
敬地蔵菩薩傳話
人語參照

とこそよみたりけれ。

多田新發意郎等の事

これも今は昔、多田満仲の許に、猛く悪しき郎等ありけり。物の命を殺すをもて業とす。野に出で山に入りて、鹿を狩り鳥を捕りて、少かの善根する事なし。或時出でて狩する間、馬を馳せて鹿追ふ。矢をはけ弓をひきて、鹿に随ひて走らせて行く道に寺ありけり。その前を過ぐる程に、きと見遣りたれば、内に地藏立ち給へり。左の手を持ちて弓を取り、右の手して笠をぬぎて、聊か歸依の心を出して馳せ過ぎにけり。其後いくばくの年をへずして、病つきて、日比よく苦み煩ひて命絶えぬ。冥途に行き向ひて、閻魔の廳に召されぬ。見れば多くの罪人、罪の輕重に随ひて打ちせため、罪せらるゝ事いといみじ。我一生の罪業を思ひ續くるに、涙墮ちてせんかたなし。かよる程に一人の僧出で來りての給はく、汝を助けんと思ふなり、早く古郷に歸りて、罪を懺悔すべしとの給ふ。僧に

せため一痛く責め

問ひ奉りていはく、これは誰の人のかくは仰せらるゝぞと。僧答へ給はく、我は汝鹿を追うて、寺の前を過ぎしに、寺の中にありて、汝に見えし地藏菩薩なり、汝罪業深重なりといへども、聊か我に歸依の心を起しし功によりて、我今汝を助けんとするなりとの給ふとおもひて、よみがへりて後は、殺生を長くたちて、地藏菩薩に仕う奉りけり。

因幡國別當地蔵作りさしたる事

これも今は昔、因幡の國高草の郡、さかの里に伽藍あり、黒龍寺と名づく。此國の前の國司ちかなか造れるなり。其所に年老いたる者語り傳へて曰く、この寺に別當ありき。家に佛師を呼びて、地藏を作らする程に、別當が妻異男に語らはれて、跡を暗うして失せぬ。別當心を惑はして、佛の事をも佛師をも知らで、里村に手を別ちて尋ね求むる間七八日を経ぬ。佛師ども檀那を失ひて、空を仰ぎて手を徒にして居たり。その寺の專當法師これを見て、善心を興して食物を求めて佛師に喰はせて、僅に地藏の木作ばかりをし

○今昔十七、後
遠地蔵佛師傳話
人語參照
さかの里—今昔
に「野坂の郷」と
あり
ちかなか—今昔
に「千包」とあり

專當法師—一寺
の事務をすべ歌
る僧

瑠璃—佛像の頭
脚等にかくる珠
玉の飾

たてまつりて、彩色瑠璃をばえせず。その後この専當法師、病づきて命終りぬ。妻子悲み泣きて、棺くわんに入れながら、捨てずしておきて、猶これを見るに、死して六日といふ日の未の時ばかりに、俄にこの棺はたらく。見る人おぢ恐れて逃げ去りぬ。妻泣き悲みて、あけて見れば、法師よみがへりて水を口に入れ、やうくほど経て冥途の物がたりす。大なる鬼二人きたりて、我を捕へて、追ひ立てて廣き野を行くに、白き衣著たる僧出で来て、鬼ども、この法師疾くゆるせ、我は地藏菩薩なり、因幡の國の黒龍寺にて我を造りし僧なり、佛師等食物なくて日比經しに、この法師信心をいたして、食物を求めて、佛師等を供養して我像を造らしめたり、この恩忘れがたし、必ず許すべきものなりとの給ふほどに、鬼ども許し終りぬ。懇切に道をしへてかへしつと見て、いきかへりたるなりといふ。その後この地藏菩薩を、妻子ども彩色し供奉し奉りて、長く歸依し奉りける。今この寺におはします。

伏見修理大夫俊綱の事

これも今は昔、伏見修理大夫は宇治殿の御子にておはす。あまり公達多くおはしければ、やうをかへて、橘俊遠といふ人の子になし申して、藏人になして、十五にて尾張守になし給ひてけり。それに尾張に下りて國行ひけるに、その頃熱田の神、いちはやくおはしまして、おのづから笠をもぬがず、馬の鼻を向け、無禮を致すものをば、やがて立所に罰せさせおはしましたければ、大宮司の威勢國司にも勝りて、國のものどもおぢ恐れたりけり。それにこの國司下りて、國の沙汰どもあるに、大宮司我はと思ひて居たるを、國司咎めて、いかに大宮司ならんからに、國にはらまれては、見參にも參らぬぞといふに、先々さる事なしとて居たりければ、國司むつかりて、國司も國司にこそよれ、我等に逢ひてかうはいふぞとて、いやみ思ひて、知らん所ども點ぜよなどいふ時に、人ありて大宮司にいふ、誠に國司と申すにかよる人おはす、見參に參らせ給へといひければ、

伏見修理大夫—
俊綱、宇治殿は
頼通

國行ひける—國
司になりて其の
國を治むること
いちはやく—荒
び給ふことなり

國にはらまれて
—領内にありて
むつかりて—憤
怒して
いやみ—嫌ひ憎
み
知らん所ども點
ぜよ—所領を差
押へよ



衣冠にきぬ出し
て一衣冠は東帯
より略式にて、
袍に指貫の袴き
て冠を被るをい
ふ、きぬ出すは
表衣の欄の下に
下着の裾の美々
しきを出すをい
ふ
ゆふ一捕縛檢束
する事

答一返報

さらばといひて、衣冠にきぬ出して、供のものども三十人ばかり具して、國司のがり向ひぬ。國司出で逢ひて對面して、人共を呼びて、きやつ慥に召し籠めて勘當せよ、神宮といはんからに、國中にはらまれて、いかに奇怪をば致すとて、召し立ててゆふ程に、籠めて勘當す。その時大宮司、心憂き事に候ふ、御神はおはしまさぬが、下臈の無禮を致すだに、立所に罰せさせおはしますに、大宮司をかくせさせて御覽するはと、泣く／＼くどきてまどろみたる夢に、熱田の仰せらるよやう、この事におきては我力及ばぬなり、その故は僧ありき、法華經を千部讀みて、我に法樂せんとせしに、百餘部は讀み奉りたりき、國の者どもたふとがりて、この僧に歸依しあひたりしを、汝むつかしがりて、その僧を追ひはらひてき、それにこの僧悪心を起して、われこの國守になりて、この答をせんとして生れ來て、今國司になりてければ、我力及ばず、その先生の僧を俊綱といひしに、この國司も俊綱といふなりと、夢に仰せありけり。人の悪心はよしなき事なりと。

長門前司女葬送の時本處にかへる事

常に人に逢ひ
情夫に逢ひし所
なりとの意

ひつー「ひつぎ
の誤か

道にものづから
やと一自然道に

今は昔、長門前司といひける人の女二人ありけるが、姉は人の妻にてありけり。妹はいと若くて宮仕ぞしけるが、後には家に居たりけり。わざとありつきたる男もなくて、唯時々通ふ人などぞありける。高辻室町わたりにぞ家はありける。父母もなくなりて、奥の方には姉ぞ居たりける。南の表の西の方なる妻戸口にぞ、常に人に逢ひ物など言ふ所なりける。二十七八ばかりなりける年、いみじく煩ひてうせにけり。奥は所狭しとて、その妻戸口にぞやがて臥したりける。さてあるべき事ならねば、姉などしたてて、鳥部野へ率ていぬ。さて例の作法に、とかくせんとて、車より取りおろすに、櫃かろくとして蓋いさよか開きたり。怪しくて開けて見るに、いかにもくつゆ物なかりけり。道などにて落ちなどすべき事にもあらぬに、いかなる事にかと心得ずあさまし。すべき方もなくて、さりとしてあらんやはとて、人々走りかへりて、道におのづからやと見れども、

落ちてあらんか
と

おとなしき人
一族中のももだ
ちたる人

あるべきならねば家へ歸りぬ。もしやと見れば、この妻戸口に、もとのやうにてうち臥したり。いとあさましくも恐しくも、親しき人集りて、いかどすべきと言ひ合せ騒ぐ程に、夜もいたく更けぬれば、いかどせんとして、夜明けて又櫃に入れて、この度はよく誠に認めて、よさりいかにもなど思ひてある程に、夕つかた見るほどに、この櫃の蓋細めに開きたりけり。いみじく恐しくすぢなけれど、親しき人々、近くてよく見んとて寄りて見れば、櫃より出でて又妻戸口に臥したり。いとあさましきわざかなとて、又かき入れんとて萬にすれど、更にくゆるがず。土より生ひたる大木などを、引きゆるがさんやうなれば、すべき方なくて、唯こゝにあらんとてかと思ひて、おとなしき人寄りていふ、唯此所にあらんとおほすか、さらばやがて此所にも置き奉らん、かくてはいと見苦しかりなんとて、妻戸口の板敷を毀ちて、其所に下さんとしければ、いと軽らかに下されたれば、すべなくて、その妻戸口一間を板敷など取り退け毀ちて、其所にうづみて高々と塚にてあり。家の人々も、さてあひるてあらん、物むつかしく覺えて、みな外へ渡りに

一いはひ一産の意

蟲一虱なるべし

しありき一爲歩
きにて食を求め
て歩く

銅藥にこそげ一
銅を削りあるし

けり。さて年月経にければ、寢殿も皆毀れ失せにけり。いかなる事にか、この塚の傍近くは、下種などもえ居つかず、むつかしき事ありと言ひ傳へて、大かた人もえ居つかねば、其所は唯その塚一つぞある。高辻よりは北、室町よりは西、高辻表に六七間ばかりがほどは小家もなく、その塚一つぞ高々としてありける。如何にしたることにか、塚の上に神の社をぞ、一いはひすゑてあなる。このころも今にありとなん。

雀恩を報ゆる事

今は昔、春つ方日うらよかなりけるに、六十ばかりの女のありける。鱈うち取りて居たりけるに、庭に雀のしありきけるを、童石を取りて打ちたれば、當りて腰を打折られにけり。羽をふためかして惑ふ程に、鳥のかけりありきければ、あな心う、鳥取りてんとて、この女いそぎ取りて、息しかけなどして物喰はす。小桶に入れて夜はをさむ。明くれば米喰はせ、銅、藥にこそけて喰はせなどすれば、子ども孫ども、あはれ女刀自は

て願とするな
り、銅藥の二字
活本に従ふ
よく喰へば一活
本一よくつたへ
ば」とあり、時日
の経過する意か
雀見よ一雀に氣
をつけよ

老いて、雀飼はるよとて惡み笑ふ。かくて月比よく喰へば、やうく躍りありく。雀の心にもかく養ひいたるを、いみじく嬉しうれしと思ひけり。白地に物へ往くとても、人にこの雀見よ、物喰はせよなどいひ置きければ、子孫など、あはれなんで雀飼はるとて惡み笑へども、さばれいとほしければとて、飼ふ程に飛ぶ程になりけり。今はよも鳥に取られじとて、外に出でて手に据ゑて、飛びやする見んとて捧けたれば、ふらふらと飛びていぬ。女多くの月比日比、暮るればをさめ、明くれば物喰はせて習ひて哀や飛びていぬるよ、又來やすると見んなど、徒然に思ひて言ひければ、人に笑はれけり。さて二十日ばかりありて、この女の居たる方に、雀のいたく鳴く聲しければ、雀こそ痛く鳴くなわ、ありし雀の來るにやあらんと思ひて、出でて見ればこの雀なり。哀に忘れず來たるこそあはれなれといふ程に、女の顔うち見て、口より露ばかりの物を落し置くやうにして飛びていぬ。女何にかあらん、雀の落していぬる物はとて、寄りて見れば、瓢の種を唯一つ落して置きたり。持て來たるやうこそあらめとて、取りて持ちたり。あ

さばれ—さもあるばあれ

ひとはた—一パイなり、物の腹に入りたるをいふ

たのもしき人—富裕なる人同じごととなれど、同様に見ゆる毛軀なれど

ないみじ、雀の物得て寶にし給ふとて、子ども笑へば、さばれ植ゑて見んとて植ゑたれば、秋になるまよに、いみじく多く生ひ廣がりて、なべての瓢ひょうにも似ず、大に多くなりたり。女悦び興おぼじて、里隣の人にも喰はせ、取れどもく盡きもせず多かり。笑ひし子孫も、これを明暮喰ひてあり。一里配くまりなどして、はてには誠に勝れて、大なる七つ八つは匏ひょうにせんと思ひて、内につりつけて置きたり。さて月比へて、今はよく成りぬらんとて見ればよくなりけり。取り下くだして口あけんとするに、少しおもしろ。怪しけれども切りあけて見れば、物ひとはた入りたり。何にかあるらんとて移して見れば、白米の入りたるなり。思ひかけずあさましと思ひて、大なる物に皆を移したるに、同じやうに入りてあれば、常事たふさにはあらざりけり、雀のしたるにこそと、あさましく嬉しければ、物に入れて隠し置きて、残りの瓢どもを見れば、同じやうに入りてあり。これを移しつつかへば、せんかたなく多かり。さて誠にたのもしき人にぞなりにける。隣里の人も見あざみ、いみじき事に羨みけり。この隣にありける女の、子どものいふやう、同じごととなれど、

雀のなどはほのきけど云々—雀の報いなどはほのかに聞けど猶委しく語り聞せよとなり

一つが徳云々—一匹の雀を養ひてさへ果報あり

人はかくこそあれ、はかぐしき事もえし出で給はぬなどいはれて、隣の女、この女房の許に來りて、さてもくこはいかなりしことぞ、雀のなどはほの聞けど、よくはえ知らねば、もとありけんまよにの給へと言へば、瓢の種を一つ落したりし、植ゑたりしよりのある事なりとて、細こまにもいはぬを、猶ありのまよにこまかにの給へと切に問へば、心狭せまく隠すべき事かと思ひて、かうく腰折れたる雀のありしを、飼ひ生けたりしを嬉しと思ひけるにや、瓢の種を一つ持ちて來たりしを植ゑたれば、かくなりたるなりといへば、その種唯一つ賜たまべといへば、それに入りたる米などは參らせん、種はあるべき事にもあらず、更にえなん散らすまじとて取らせねば、我もいかで、腰折れたらん雀見つけて飼はんと思ひて、目を立てて見れど、腰折れたる雀更に見えず。早朝つとめてごとに伺ひ見れば、せどの方に米の散りたるを喰ふとて、雀の躍りありくを、石を取りてもしやとて打てば、數多の中に度々打てば、おのづから打ち當てられてえ飛ばぬあり。喜びて寄りて、腰よくうち折りて後に、取りて物喰はせ、藥喰はせなどして置きたり。一つが徳をだにこそ

世にねたし一甚
だ思々し

えみまけて一突
みこぼれて

見れ、まして數多ならばいかに頼もしからん、あの隣の女には優りて、子どもに譽められんと思ひて、籠かごのうちに米蒔きて伺ひ居たれば、雀ども集りて喰ひに來たれば、又うちしければ、三つ打ち折りぬ。今はかばかりにてありなと思ひて、腰折れたる雀三つばかり桶に取り入れて、銅かねこそけて喰はせなどして、月比つきひ經るほどに皆よくなりたれば、喜びて外とちに取り出でたれば、ふらくくと飛びてみないぬ。いみじきわざしつと思ふ。雀は腰うち折られて、かく月比籠め置きたるを、世にねたしと思ひけり。さて十日ばかりありて、この雀ども來たれば喜びて、まづ口に物やくはへたると見るに、瓢ひょうの種一つづつ皆落して去ぬ。さればよと嬉しくて、取りて三所に植ゑてけり。例よりもするすると生ひ立ちて、いみじく大になりたり。これはいと多くもならず、七つ八つぞなりたる。女えみまけて見て、子どもにいふやう、はかくしき事しうと云ひしかど、我は隣の女には優りなといへば、實まことにさもありなと思ひたり。これは數の少ければ、米多く取らんとて、人にも喰はせず我も喰はず。子どもがいふやう、隣の女房は里隣さとごなりの

おほちか一多勢
きはだ一實顯

烟一湯氣

せためん一買め
ん

人にも喰はせ、我も喰ひなどこそせしか、これはまして三つが種なり、我も人にも喰はせらるべきなりといへば、さもと思ひて近き隣の人にも喰はせ、我も子どもにも諸共に喰はせんとて、おほらかにて喰ふに、苦くるき事物にも似ず、きはだなどのやうにて心地感ふ。喰ひと喰ひたる人々も、子どもも我も物をつきて感ふほどに、隣の人どもも皆心地を損じて來集りて、こはいかなる物を喰はせつるぞ、あなおそろし、露ばかり烟の口に寄りたるものも、物をつき感ひあひて、死ぬべくこそあれと、腹立ちて言ひせためんと思ひて來たれば、主かみの女をはじめて、子どもも皆物覺えず、つき散らしてふせりあひたり。いふかひなくて共にかへりぬ。二三日も過ぎぬれば、誰々も心地なほりにけり。女思ふやう皆米にならんとしけるものを、急ぎて喰ひたれば、かく怪しかりけるなめりと思ひて、残のこりをば皆つりつけて置きたり。さて月比へて今はよくなりぬらんとて、移し入れん料れうの桶ども具して部屋に入る。嬉しければ、齒もなき口して、耳のもとまで一人ひとり咲あまして、桶を寄せて移しければ、虻あぶ、蜂はち、蟻あま、蠅は、蛇へびなど出でて、目鼻ともいはず一身しんに取り



つきて刺せども、女いたさもおほえす 唯米のこほれかゝるぞと思ひて、暫し待ち給へ
 雀よ、少しづつ取らんといふ。七つ八つの瓢よりそこらの毒蟲共出でて、子共をも刺しく
 ひ、女をば刺し殺してけり。雀の腰をうち折られて、ねたしと思ひて、萬の蟲どもを語
 らひて入れたりけるなり。隣の雀はもと腰折れて、鳥の命とりぬべかりしを養ひ生けた
 れば、うれしと思ひけるなり。さればもの羨みはすまじきことなり。

小野篁廣才の事

今は昔、小野篁といふ人おはしけり。嵯峨の帝の御時に、内裏に札を立てたりけるに、
 無惡善と書きたりけり。帝篁に讀めと仰せられたりければ、讀みは讀みさぶらひなん、さ
 れどおそれにて候へば、え申し候はじと奏しければ、唯申せと度々仰せられければ、さが
 なくてよからんと申して候ふぞ、されば君を呪ひ參らせて候ふなりと申しければ、おの
 れ放ちては、誰か書かんと仰せられければ、さればこそ申して候はじとは、申して候ひ

さがなくてよか
 ちん一惡無くて
 善かちんにて
 讀と讀ずればな
 り
 おのれ放ちて
 ちのれを除きて

はといよに同じ

つれと申すに、帝さて何も書きたらんものは、讀みてんやと仰せられければ、何にてち讀み候ひなんと申しければ、片假字のねもじを十二書かせ給ひて、讀めと仰せられければ、ねこの、この、子ねこ、しよの、この、子じしと讀みたりければ、帝ほよゑませ給ひて、事なくてやみにけり。

平貞文本院侍從等の事

○今昔三十、平定文假借本院侍從參照
平仲一平好風の
子にて兄弟三人
の仲なるよりい
ふ
村上の御母后一
體子なり

今は昔、兵衛佐平貞文をば平仲といふ。色ごのみにて、宮仕へ人はさらなり、人の女など忍びて見ぬはなかりけり。思ひかけて、文やる程の人の躰かぬはなかりけるに、本院侍從といふは村上の御母后の女房なり。世の色好みにてありけるに、文やるに、にくからず返事はしながら、逢ふ事はなかりけり。暫しこそあらめ、逢にはさりとともと思ひて、物の哀なる夕暮の空、又月の明き夜など、艶に人の目留めつべき程を計ひつと音づれば、女も見知りて、情はかはしながら心をば許さず、つれなくて、はしたなからぬ程に

あどろしくしく
—仰山に大層よ
ることなり

薰籠—衣をうち
かける籠にて中
より香を焚きて
衣にはほひをと
るなり

これにさはらん
—雨のためは
踏するは

いらへつと、人居まじり、苦しがるまじき所にては、物いひなどはしながら、めでたく通れつと心もゆるさぬを、男はさも知らで、かくのみ過ぐる心もとなくて、常よりもしゆく音づれて、參らんと言ひ遣せたりけるに、例のはしたなからず答へたれば、四月の晦日頃に、雨おどろしく降りて、物恐しけなるに、かゝる折に行きたらばこそ、哀とも思はめと思ひて出でぬ。道すがら堪へがたき雨を、これにいきたらんに、逢はでかへす事よもと、たのもしく思ひて局に行きたれば、人出で来て、上になれば案内申さんとて端の方に入れていぬ。見れば、物の後に火ほのかに燈して、宿直物と思しき衣薰籠にかけて、薰物しめたるにほひなべてならず。いとど心にくよて、身にしみていみじと思ふに、人かへりて、只今も下りさせ給ふといふ。嬉しさかぎりなし。即ち下りたり。かゝる雨にはいかになどいへば、これにさはらんは、無下に淺き事にこそなど言ひかはして、近く寄りて髪を探れば、氷をのしかけたらんやうにひやよかにて、あたりめでたき事限なし。何やかやとえもいはぬ事ども言ひ交して、疑ひなく思ふに、あはれ遺戸を

衣を留めて云々
今昔には「女
起きて上に著た
る衣をば脱ぎお
きて單衣袴はか
りを著て行き
ぬ」とあり

後にもなどいひ
て「又後日御日
にかもらんなど
いひて
大方間近き事
近日に逢はるる
事
ひすまし「便器
を洗ふ下女
皮子「今昔にし
「百」とあり
香なる薄物「香
色（淡紅色）の薄
襦

開けながら忘れて來にけり。翌朝、誰か開けながらは出でにけるぞなど、煩はしきことになりなんす。閉ててかへらん、程もあるまじといへば、さる事と思ひて、かばかりうち解けにたれば、心安くて、衣を留めて參らせぬ。誠に遣戸たつる音して、此方へくらんと待つ程に、音もせて奥さまへ入りぬ。それに心もとなく、あさましくうつし心も失せはてて、はひも入りぬべけれど、すべき方もなくて、やりつる悔しさを思へど、かひなければ、泣くく、曉近く出でぬ。家に行きて思ひ明して、すかし置きつる心うさ、書き續けて遣りたれど、何しにかすかささん、歸らんとせしに召しよかば、後にもなど言ひて過しつ。大方間近き事はあるまじきなめり、今はさはこの人のわろく、疎ましからん事を見て思ひうとまばや、かくのみ心つくしに思はでありなんと思ひて、隨身を呼びて、その人のひすましの皮子もていかん、奪ひとりて我に見せよと言ひければ、日比添ひて伺ひて、辛うじて逃げたるを、追ひてばひとりて主に取らせつ。平仲よろこびて、かくれに持て行きて見れば、香なる薄物の三重がさねなるに包みたり、香しき事たぐひなし。

薄物云々「練香
を大便のやう見
せたるなり

はけくしく
恍惚と

一條攝政「伊尹
東三條殿「兼家
きやうく「輕
輕の字音、かる
がるしき意

引き解きて開くるに、香しさ譬へん方なし。見れば沈、丁子を濃く煎じて入れたり。又薰物をば、多くまろがしつと數多入れたり。さるまよに、香しさ推し量るべし。見るにいとあさまし。ゆよしけにしおきたらば、それに見飽きて、心もや慰むところ思ひつれ、こは如何なることぞ、かく心ある人やはある、凡人とも覺えぬ有様どもと、いとど死ぬばかり思へどかひなし。我見んとしもやは思ふべきにと、かよる心ばせを見て後は、いよいよほけくしく思ひけれど、遂にあはで止みにけり。我身ながらも、かれに世に恥ぢがましくねたく覺えしと、平仲密に人に忍びてかたりけるとぞ。

一條攝政歌の事

今は昔、一條攝政とは東三條殿の兄におはします。御容貌よりはじめ、心用ひなどめでたく、才ありさま誠しくおはしました、また色めかしく、女をも多く御覽じ興せさせ給ひけるが、少しきやうく「に覺えさせ給ひければ、御名を隠させ給ひて、大藏の承豊蔭と名の

けさう一懸想にて
懸基の義

あらがひて一詩
ひて
まだしきよし
未だ其女に逢は
ぬ由
人しれず一此歌
後撰集にいづ

御集一此歌集今
日傳はらざ
をかしく一をか
しくありきなど
書くべきをわざ
と略したる也

りて、上ならぬ女のがりは御文も遣はしける。けさうせさせ給ひ、逢はせ給ひもしけるに、皆人は心えて知りまらせたり。やんごとなく、よき人の姫君の許へおはしましそめにけり。乳母母などを語らひて、父には知らさせ給はぬ程に、聞きつけていみじく腹立ちて、母をせたぬ爪はじきをして、いたくの給ひければ、さる事なしとあらがひて、まだしきよしの文書きて賜べと、母君の侘び申したりければ、

人しれず身はいそけども年を経てなど越え難き逢坂の關

とてつかはしたりければ、父に見すれば、さては虚言なりけりと思ひて、かへし、父のしける。

東路に行きかふ人にあらぬ身はいつかは越えん逢坂の關

と詠みけるを見て、ほよゑまれけんかすと、御集にあり。をかしく。

狐家に火つくる事

館一國司の廳
引目一暴目とも
書く、木製にて
鎗矢の懸に似た
り

今は昔、甲斐國に館の侍なりける者の、夕暮、館を出でて、家さまに行きける道に、狐の逢ひたりけるを追ひかけて、引目して射ければ、狐の腰に射當ててけり。狐射まらばかされて、鳴きわびて腰を引きつゝ草に入りけり。この男引目を取りて行く程に、この狐腰を引きて先に立ちて行くに、又射んとすれば失せにけり。家今四五町かと見えて行く程に、この狐二町ばかり先立ちて、火をくはへて走りければ、火をくはへて走るはいかなる事ぞとて、馬をも走らせけれども、家のもとに走り寄りて、人になりて火を家につけてけり。人のつくるにこそありけれとて、矢をはけてはしらせけれども、つけはてければ、狐になりて、草の中に走り入りて失せにけり。さて家焼けにけり。かよるものも忽ちに響を報ふなり。これを聞きて、かやうのものをば構へて打すまじきなり。

宇治拾遺物語 卷第四

狐人につきてしとき食ふ事

ものけ渡し
ほどに物怪を
人に移しつけし
時に

しとき—米粉に
てつくれる餅
そらものづきて
—儲りて物のつ
きたる様して
たうめ—老女
驗者—修驗者

昔ものけわづらひし所に、ものけ渡しほどに、ものけ物につきて言ふやう、おのれは崇の靈氣にても侍らず、うかれて罷り通りつる狐なり、塚屋に子どもなど侍るが、物をほしがりつれば、かやうの所には、食物ちろばふものぞかして、まうで來つるなり、しときはらたべて罷りなんといへば、しときをせさせて、一折敷取らせたれば、少し食ひてあなうまやくといふ。この女のしときほしかりければ、そらものづきてかくいふと惡みあへり。紙賜はりてこれ包みて罷りて、たうめや子どもなどに、喰はせんといひければ、紙を二枚引き違へて包みたれば、大きやかなるを腰につい挟みたれば、胸にさしあがりてあり。かくて追ひ給へ、罷りなんと驗者にいへば、追へくといへば、立

ちあがりて仆れ伏しぬ。暫しばかりありて、やがて起き上りたるに、懐なるものさらになし。失せにけるこそ不思議なれ。

佐渡國にある金の事

○今昔二十六、
能登國顯者行
佐渡國堀金語參
照

すがね—高嶺に
てきたはぬ嶺
金の花咲き—萬
葉十八—すめ
どの御代榮えむ
と東なるみちの
く山に金花さ
く

能登の國には、鐵といふ物のすがねといふ程なるを取りて、守に取らする者六十人ぞある。實房といふ守の任に、鐵取六十人が長なりける者の、佐渡の國にこそ金の花咲きたる所はありしかと、人に言ひけるを、守傳へ聞きて、その男を守呼び取りて、物取らせなどして、すかし問ひければ、佐渡の國には誠に金の侍るなり、候ひし所を見置きて侍るなりといへば、さらば往きて取りて來なんやといへば、遣さば罷り候はんといふ。さらば船を出し立てんといふに、人をば賜はり候はじ、たゞ小舟一つと、食物すこしとを賜はり候ひて罷り至りて、若しやと取りて參らせんといへば、唯これがいふに任せて、人にも知らせず、小舟一つと喰ふべき物少しとを取らせたりければ、それをもて佐渡の國へ

若しやと取りて
參らせん—今昔
に—若しやと試
み候はん—とあ
り

さいてー小きき
れ

渡りにけり。一月ばかりありて、打ち忘れたるほどに、この男ふときて、守に目を見合
せたりければ、守心えて人傳ひとつてには取らで、みづから出合ひたりければ、袖うつしに、黒ば
みたるさいでに包みたる物を取らせたりければ、守重けに引き下けて、懐に引き入れて歸
り入りにけり。その後その金取の男は、何方どこともなく失せにけり。萬にたづねけれども、
行方も知らず止みにけり。いかに思ひて失せたりといふ事を知らず、金のある所を問ひ
尋ねやすると、思ひけるにやとぞ疑ひける。その金八千兩ばかりありけるとぞ語り傳へ
たる。かよれば佐渡の國には、金ありけるよしと、能登の國のものども語りけるとぞ。

薬師寺別當の事

○今昔十五、藥
師寺濟源僧都往
生語參照
よるしうなりて
病少しくなほ
りて

今は昔、薬師寺の別當僧都といふ人ありけり。別當はしけれども、殊に寺の物も使はで、
極樂に生れん事をなん願ひける。年老い病して死ぬるきざみになりて、念佛して消え入
らんとす。無下に限と見ゆるほどに、よろしうなりて、弟子を呼びていふやう、見るや



一石誦經一木一石を誦經の料にせよ

うに念佛は他念なく申して死ぬれば、極樂の迎へいますらんと待たるゝに、極樂の迎へは見えずして火の車を寄す。こはなんぞ、かくは思はず、何の罪によりて地獄の迎へは來たるぞといひつれば、車に附きたる鬼共のいふやう、この寺の物を、一とせ五斗かりていまだ返さねば、その罪によりてこの迎へは得たるなりと言ひつれば、我言ひつるは、さばかりの罪にては、地獄に墮つべきやうなし、その物を返してんといへば、火の車を寄せて待つなり、されば疾くく一石誦經にせよといひければ、弟子ども手感ひをして、いふまゝに誦經にしつ。その鐘の聲のするをり、火の車かへりぬ。さてとばかりありて火の車かへりて、極樂の迎へ今なんおはすると、手をすりて悦びつゝ終りにけり。其坊は藥師寺の大門の北の脇にある坊なり。今にそのかた失せずしてあり。さばかり程の物使ひたるにだに、火の車むかへに來る、まして寺物を心のまゝにつかひたる、諸寺の別當の地獄の迎へこそ思ひやられるれ。

○今昔二十六、土佐國妹兄行住不知島野書照

まもりめ一人

はなつきに今昔に「放つ風」にあり
潮一今に漢(オヤ)とあるに
従ふべし

妹背島の事

土佐國幡多の郡に住む下種ありけり。おのが國にはあらで他國に田を作りけるが、おのが住む國に苗代をして、植うべき程になりければ、その苗を船に入れて、植ゑん人どもに喰はすべき物より始めて、鍋釜、鋤、唐鋤などいふものに至るまで、家の具を舟に取り積み、十一二ばかりなる男子女子、二人の子を舟のまもりめに載せ置きて、父母は植ゑんといふもの雇はんとて、陸に白地に上りにけり。舟をば白地におもひて、少し引き据ゑて、繫がずして置きたりけるに、この童ども舟底に寝入りにけり。潮の満ちければ、舟は浮きたりけるを、はなつきに少し吹き出されたりける程に、干潮に引かれて遙に湊へ出でにけり。沖にていとど風吹きまさりければ、帆を揚けたるやうにて行く。その時に童起きて見るに、かよりたる方もなき沖に出でければ、泣き惑へどもすべき方もなし。何方とも知らず、唯吹かれて行きにけり。さるほどに、父母は人ども雇ひ集め

風がくれ一風の
あたらしぬ所

なりもの木云
云一今昔に一生
物の木時に照ひ
て多かりけれ
ばとあり

めをとこ一妻夫

て、舟に乗らんとて来て見るに舟なし。暫しは風がくれにさし隠したるかと思ふ程に、
呼び騒けども誰かは答へん。浦々覚めけれども無かりければ、言ふかひなくて止みにけ
り。かくてこの舟は、遙の南の沖にありける島に吹きつけてけり。童ども泣くく下り
て、船繋ぎて見ればいかにも人なし。歸るべき方もおほえねば、島に下りて言ひけるや
う、今はすべきかたなし、さりとては命を捨つべきにあらず、この食物のあらん限こそ、
少しづつも喰ひて生きたらめ、これ盡きなばいかにして命はあるべきぞ、いざこの苗の
枯れぬさきに植ゑんといひければ、實にもとて、水の流のありける所の、田に作りぬべき
を求め出して、鋤蹴ありければ、木切りて庵など造りける。なりもの木の、をりになり
たる多かりければ、それを取り喰ひて、明し暮す程に、秋にもなりにけり。さるべきにや
ありけん、作りたる田のよくて、此方に作りたるにも殊の外優りたりければ、多く刈り
置きなどして、さりとてあるべきならねば、めをとこになりにけり。男子女子數多産み續
けて、又それが妻夫になりくしつと、大なる島なりければ、田島も多く作りて、この

頃はその妹背が産み續けたりける人ども、島にあまるばかりになりてぞあんなる。妹背
島とて、土佐の國の南の沖にあるとぞ人かたりし。

石橋の下の蛇の事

雲林院一山城常
野にあり
菩提講一菩提の
寫に法華經を講
説する法會
中ゆひて一衣を
掲げて腰帶する
こと
きりくといひ
るゝるととや
巻く也

この近くのことなるべし、女ありけり。雲林院の菩提講に、大宮をのほりに参りける程に、
西院の邊近くなりて石橋ありける水の邊を、二十あまり三十ばかりの女房、中ゆひて歩
み行くが、石橋を踏み返して過ぎぬる跡に、踏み返されたる橋の下に、斑紋なる蛇のき
りきりとして居たれば、石の下に蛇のありけるといふ程に、この踏み返したる女の後に
立ちて、ゆらくと此蛇の行けば、後なる女の見るにあやしくて、いかに思ひて行くに
かあらん、踏み出されたるを悪しと思ひて、それが報答せんと思ふにや、これがせんや
う見んとて、後に立ちて行くに、此女時々は見返りなどすれども、わが供に蛇のあると
も知らぬけなり。又同じやうに行く人あれども、蛇の女に具して行くを見つけいふ人も

なし。唯最初見つけつる女の目にのみ見えければ、これがしなさんやう見んと思ひて、この女の後を離れず歩み行く程に、雲林院に参りつきぬ。寺の板敷いたじきに昇りてこの女居ぬれば、この蛇も昇りて傍に蛇へびり伏したれど、これを見つけて騒ぐ人なし。希有けうのわざかなと、目を放たず見る程に、講かうはてぬれば、女立ち出づるに随ひて、蛇もつきて出でぬ。この女、これがしなさんやう見んとて、後に立ちて京ざまに出でぬ。下さまに行きとまりて家あり、その家に入れば、蛇も具して入りぬ。これぞこれが家なりける。思ふに晝は姿もなきなめり、夜こそとかくすることもあらんずらめ、たれか夜の有様を見ればやと思ふに、見るべきやうもなければ、その家に歩みよりて、田舎より上る人の行き泊るべき所も候はぬを、今宵ばかり宿させ給はなんやといへば、この蛇のつきたる女を家あるじと思ふに、こよに宿り給ふ人ありといへば、老いたる女出で来て、誰かの給ふぞといへば、これぞ家のあるじなりけると思ひて、今宵ばかり宿借り申すなりといふ。よく侍りなん、入りておはせといふ。嬉しと思ひて入りて見れば、板敷のあるにのほりてこ

姿もなき「せ
んかた(爲かた)
もなき」の圖を
るべし

守り見つめ

見る「見ゆの
圖ならん

の女居たり。蛇は板敷の下しもに柱のもとむねに蛇へびりてあり。目をつけて見れば、この女を守りあけてこの蛇は居たり。蛇つきたる女、殿にあるやうはなど物語し居たり。宮仕する者なりと見る。かゝる程に日唯暮れに暮れて暗くなりぬれば、蛇の有様を見るべきやうもなく、此家ぬしと覺ゆる女にいふやう、かく宿させ給へるかはりに、芋いもやある、うみて奉らん、火燈かどうし給へといへば、嬉しくの給ひたりとて、火燈かどうし芋取り出してあづけたれば、それをうみつゝ見れば、この女臥しぬめり、今や寄らんずらんと見れども近くは寄らず。この事やがても告げばやと思へども、告げたらば、我ためも悪しくあらんと思ひて、物も言はでしなさんやう見んとて、夜中の過ぐるまでも居たれども、終に見ゆる方もなき程に、火消えぬればこの女も寝ぬ。明けて後いかどあらんと思ひて、感あはひ起きて見れば、この女よき程に寝起きて、ともかくもなけにて、家あるじと覺ゆる女にいふやう、今宵夢をこそ見つれといへば、いかに見給へるぞと問へば、この寝たる枕まくら上に、人の居ゐると思ひて見れば、腰より上かみは人にて、下しもは蛇なる女、清けなるが居ていふやう、

おのれは人をうらめしと思ひし程に、かく蛇の身を受けて、石橋の下に多くの年を過して、侘しと思ひ居たる程に、昨日おのれがおもしろの石を踏みかへし給ひしに、たすけられて、石の苦を免がれて、うれしと思ひ給へしかば、此人のおはしつかん所を見置き奉りて、悦びも申さんと思ひて、御供に参りし程に、菩提講の庭に参りたまひければ、その御供に参りたるによりて、逢ひ難き法をうけ給はり、事足るによりて、多く罪をさへ滅して、その力にて人に生れ侍るべき功德の近くなり侍れば、いよく悦びを戴きて、かくて参りたるなり、この報には物よくあらせ奉りて、よき男などあはせ奉るべきなりと、いふとなん見つると語るに、あさましくなりて、この宿りたる女のいふやう、誠はおのれは、田舎より上りたるにも侍らず、そこへ侍る者なり、それが昨日菩提講に参り侍りし道に、その程に行き逢ひ給ひたりしかば、後に立ちて歩み罷りしに、大宮のその程の、河の石橋を踏み返されたりし下より、斑紋なりし小蛇の出で来て、御供にまゐりしを、かくと告げ申さんと思ひしかども、告げ奉りては、我ためも悪しき事にてもある

願し申す一實際を語る

下家司一攝關大臣家の家事を取捌く者

○今昔十五、給
聖林院菩提講聖
人往生語参照

らんずらんと、恐しくてえ申さざりしなり、まこと講の庭にも、その蛇侍りしかども、人もえ見つけざりしなり、終てて出で給ひし折、又具し奉りたりしかば、なりはてんやうゆかしうて、思ひもかけず今宵爰にて夜を明し侍りつるなり、この夜中過ぐるまでは、此蛇柱のもとに侍りつるが、明けて見侍りつれば、蛇も見え侍らざりしなり、それに合せて、かゝる夢がたりをし給へば、あさましく恐しくて、かく願し申すなり、今よりこれを序にて何事も申さんなどと言ひ語らひて、後は常に行き通ひつと、知る人になんなりにける。さてこの女、世にもものよくなりて、このころは何とは知らず、大殿の下家司の、いみじく徳あるが妻になりて、よろづ事かなひてぞありける。尋ねばかくれあらじかしとぞ。

東北院菩提講聖の事

東北院の菩提講始めける聖は、もとはいみじき悪人にて、囚獄に七度ぞ入りたりける。

淺ましく一原本
「淺まし」とあり、
活本に據り取む

足切られては—
「足切られては—
の國か
しあつかひて—
もてあまして—
心あこして—
念發起して—

七度といひけるたび、檢非違使ども集りて、これはいみじき悪人なり、一二度囚獄に
んだに、人としては善かるべき事かは、まして幾若干の犯罪をして、かくて七度までは、
淺ましくゆよしき事なり、この度これが足切りてんと定めて、足切に率て行きて切らん
とする程に、いみじき相人ありけり。それが物へ往きけるが、この足斬らんとする者に
寄りていふやう、この人おのれに免されよ、これは必ず往生すべき相ある人なりといひ
ければ、よしなき事いふ物もおほえぬ相する御房かなといひて、唯きりに切らんとすれ
ば、その切らんとする足の上のほりて、この足のかはりに我足をきれ、往生すべき相
ある者の足切られては、いかでか見んや、をうくとをめきければ、切らんとする者ど
も、しあつかひて、檢非違使にかうくの事侍りと言ひければ、やんごとなき相人の言
ふ事なれば、さすがに用ひずもなく、別當にかゝる事なんあると申しければ、さらば
免してよとて、ゆるされにけり。その時この盗人心おこして、法師になりて、いみじき
聖になりて、この菩提講は始めたるなり。誠に相にかなひて、いみじく終とりてこそう

○今昔十九、參
河守大江定基出
家語參照
參河入道—三河
守定基、法名藏
昭

風祭—風神を祭
り豊年を祈るな
り
あるナ—料理す
る

せにけれ。かよれば高名せんする人は、その相ありとも、おほろけの相人の見る事にて
もあらざりけり。始め置きたる講も今日まで絶えぬは、誠にあはれなることなりかし。

三河入道遁世世に聞ゆる事

參河入道、いまだ俗にてありける折、もとの妻をば去りつと、若く容貌よき女に思ひつき
て、それを妻にて三河へ率て下りける程に、その女久しく煩ひて、善かりける容貌も衰
へてうせにけるを、悲しさのあまりにとかくもせで、夜も晝も語らひ臥して、口を吸ひ
たりけるに、あさましき香の口より出で來たりけるにぞ、疎む心出で來て泣くく葬り
てける。それより世はうき物にこそありけれと思ひなりけるに、三河の國に風祭といふ
事をしけるに、いけにへとといふことに、猪を生ながらおろしけるを見て、この國退きな
んと思ふ心つきてけり。雉子を生ながら捕へて、人の出で來たりけるを、いざこの雉子
生ながらつくりて喰はん、今少し味ひやよきと、試みんといひければ、いかでか心に入

したくたがひに
けりしはたは
交度にて、心構
へせしめてのは
づれし也

らんと思ひたる郎等の物もおほえぬが、いみじく侍りなん、いかで味ひ勝らぬやうはあ
らんなどはやし言ひけり。少し物の心知りたる者は、あさましき事をもいふなど思ひけ
り。かくて前にて、生ながら毛をむしらせければ、暫しはふたくとするを、抑へてたど
むしりければ、鳥の目より血の涙を垂れて、目をしばたよきて、此彼に見合せけるを見て、
免堪へずして立ちて退くものもありけり。これがかく鳴く事と興じ笑ひて、いとど情な
けにむしる者もあり。むしりはてておろさせければ、刀に随ひて血のつぶくくと出で來
けるを、拭ひくおろしければ、あさましく堪へ難けなる聲を出して、死にはてければ、
おろしはてて、熬焼などして試みよとて、人々試みさせければ、殊の外に侍りけり。死に
たるおろして熬焼したるには、勝りたりなどいひけるを、つくづくと見聞きて、涙を流
して、聲を立ててをめきけるに、旨などいひける者ども、したくたがひにけり。さて
やがてその日國府を出でて京に上りて、法師になりけり。道心の起りければ、能く心を
固めんとて、かゝる希有の事をして見けるなり。乞食といふことしけるに、或家に食物

○此話古事談卷
二に見ゆ

清かりけり一不
犯なるをいよ

うち任せたる事
一尋常

えもいはずして、庭に疊を敷きて物を喰はせければ、この疊に居て喰はんとしける程に、
簾を巻き上げたりける内に、等き装束著たる女の居たるを見ければ、我去りにしふるき
妻なりけり。あの乞兒かくてあらんを見んと、思ひしぞといひて見合せたりけるを、恥
しとも苦しとも思ひたる氣色もなく、あなたふとといひて、物よくうち喰ひてかへり
にけり。ありがたき心なりかし。道心をかたく起してければ、さることに逢ひたるも、
苦しとも思はざりけるなり。

進命婦清水まうでの事

今は昔、進命婦若かりける時、常に清水へ参りける間、師の僧清かりけり、八十のもの
なり、法華經を八萬四千餘部讀み奉りたるものなり。この女房を見て、欲心を興して、
忽ちに病になりて既に死なんとする間、弟子共あやしみを爲して問うていはく、この病
の有様うち任せたる事にあらず、思召す事のあるか、仰せられずばよしなき事なりとい

蛇道一邪道の誤

鬼のごとく一
「鬼のごとし」の
誤ならん

法務一法義を務
むる意にて僧綱
以外にわかれた
る最も顯要なる
職なり、僧正僧
都の之に補せら
るゝを法務僧正
法務僧都といふ
宇治殿一領通
京極大殿一師實
四條宮一寛子、
冷泉帝の後

ふ。この時語りていはく、誠は京より御堂へ参らるゝ女に近づき馴れて、物を申さばやと思ひしより、この三ヶ年不食の病になりて、今は既に蛇道に落ちなんずる、心憂き事なりといふ。こゝに弟子一人進命婦の許へ行きて、この事をいふ時に、女ほどなく來れり。病者頭を剃らで年月を送りたる間、鬚髮銀の針を立てたるやうにて、鬼のごとく、されどもこの女恐るゝ氣色なくしていふやう、年比頼み奉る心ざし淺からず、何事にさぶらふとも、いかでか仰せられん事背き奉らん、御身くづをれさせ給はざりしさきに、などか仰せられざりしといふ時、この僧掻きおこされて、念珠を取りて、推し揉みていふやう、嬉しく來らせ給ひたり、八萬餘部讀み奉りたる法華經の最第一の文をば御前に奉る、俗をうませ給はゞ關白攝政をうませたまへ、女をうませたまはゞ女御后を生ませたまへ、僧をうませ給はゞ法務の大僧正を生ませたまへと言ひ終りて、すなはち死ぬ。その後この女、宇治殿におもはれまゐらせて、はたして京極大殿、四條宮、三井の覺圓座主を産み奉れりとぞ。

○古事談卷三參照

鐵道一高階敏思の子
御堂の入道一道長

法性寺殿一思通
藏人所一關白家の藏人所なり

書法に一きびしく
この世ならず一
一通りならず

業遠朝臣蘇生の事

これも今は昔、業遠朝臣死ぬる時、御堂の入道殿おほせられけるは、言ひ置くべきことあらんかし、不便のことなりとて、解脱寺觀修僧正を召し、業遠が家に向ひ給ひて加持する間、死人忽ちに蘇生して、要事を言ひて後、また目を閉ぢてけりとか。

篤昌忠恒等の事

これも今は昔、民部大輔篤昌といふ者ありけるを、法性寺殿の御時、藏人所の所司に義助とかやいふ者ありけり。件の者、篤昌を役に催しけるを、我はかやうの役はすべき者にもあらずとて参らざりけるを、所司に舍人を數多つけて、苛法に催しければ参りにけり。さてまづこの所司に物申さんと呼びければ、出であひけるに、この世ならず腹立ちて、かやうの役に催し給ふは如何なることぞ、篤昌をば如何なる者と知り給ひたるぞ、

わりありわりなしの反對なり

あち所司無遠慮の言をなすよりいふ

○古事談卷五參照

丈六佛一丈六尺の佛

承らんと頼に責めけれど、暫しは物も言はで居たりけるを叱りて、の給へ、まづ篤昌が
ありやう承らんと痛う責めければ、別の事候はず、民部大輔五位の鼻赤きにこそ、知
り申したれといひたりければ、をうといひて逃げにけり。又この所司が居たりける前を、
忠恒といふ隨身、ことやうにてねり通りけるを見て、わりある隨身の姿かなと、忍びや
かにいひけるを耳聴く聞きて、隨身所司が前に立ち返りて、わりあるとは如何にの給ふ
事ぞと咎めければ、我は人のわりありなしもえ知らぬに、只今武正府生の通られつるを、
この人々、わりなき者の容體かなと言ひ合せつるに、少しも似給はねば、さてはもしわ
りのおはするかと思ひて、申したりつるなりといひたりければ、忠恒をうといひて逃げ
にけり。この所司をば、あち所司とぞつけたりけるとか。

後朱雀院丈六の佛作り奉り給ふ事

これも今は昔、後朱雀院例ならぬ御事、大事におはしましける時、後生の事恐れ思召し

けり。それに御夢に、御堂入道殿参りて申し給ひていはく、丈六の佛を作れる人、子孫
において更に惡道に落ちず、某多くの丈六をつくり奉れり、御菩提において疑ひ思召す
べからずと、これによりて、明快座主に仰せ合せられて、丈六の佛をつくらる。件の佛、
山の灌佛院に安置し奉らる。

式部大輔實重賀茂の御正體拜見の事

これも今は昔、式部大輔實重は、賀茂へ参る事ならびなき者なり。前生の運おろそかに
して、身に過ぎたる利生にあづからず。人の夢に、大明神、又實重来たりとて、歎かせ
おはしますよし見けり。實重、御本地を見奉るべきよし祈り申すに、或夜下の御社につ
やしたる夜、夢に上へ参る間、なからきの邊にて行幸に逢ひ奉る、百官供奉常のことし。
實重片敷に隠れ居て見れば、鳳輦の中に金泥の經一卷おはしましたり。その外題に、一
稱南無佛皆已成佛道と書かれたり。夢すなはちさめぬとぞ。

○古事談卷五參照

つや一通夜
なからき半木
又流木に作る、
賀茂上下の社の
中間にありて中
賀茂といふ小社
あり
一稱南無佛云々
一法華方便品の
偈句

○古事談卷三參照

有職一僧綱の下三編の上に位し已滿内供奉阿闍梨の三官を賜じていふ

唯圓教意云々一法華文句記中の文にして天台には藏別圓の四教あり、就中圓教の逆縁即願縁なりと許すとの意

南北二京一奈良京都
化人一神佛の權
○古事談卷四參照

智海法印癩人と法談の事

これも今は昔、智海法印有職の時、清水寺へ百日参りて、夜更けて下向しけるに、橋の上、唯圓教意、逆即是順、自餘三教、逆順定故といふ文を誦する聲あり。尊きことかな、如何なる人の誦するならんと思ひて、近う寄りて見れば白癩人なり。傍に居て法文の事をいふに、智海ほとくいひまはされけり。南北二京に、これほどの學生あらしものをもと思ひて、いづれの所にあるぞと問ひければ、この坂に候ふなりといひけり。後にたびく尋ねけれど、尋ね逢はずして止みにけり。若し化人にやありけんと思ひけり。

白河院御寢の時物におそはれさせ給ふ事

これも今は昔、白河院御殿ごもりて後、物におそはれさせ給ひける。しかるべき武具を、御枕の上に置くべきと沙汰ありて、義家朝臣に召されければ、眞弓の黒塗なるを一張參

おそはせさせ一おそはれさせの誤か
十二年の合戦一前九年後三年の役

○古事談卷三參照

時非時一正午以前僧の食ふを時といひ、しからざるを非時といふ

公請一官命又は物命により講論に請むるをいふ
なしま一山城國喜郡梨間(奈島)

らせたりけるを、御枕に立てられて後、おそはせさせおはしまさどりければ、御感ありて、この弓は十二年の合戦の時や持ちたりしと、御たづねありければ、覺えざるよし申されけり。上皇しきりに御感ありけりとか。

永超僧都魚食ふ事

これも今は昔、南の京の永超僧都は、魚なきかぎり、時非時もすべて喰はざりける人なり。公請つとめて、在京の間久しくなりて、魚を喰はでくづをれて下る間、なしまの丈六堂の邊にて、晝破子喰ふに、弟子一人近邊の在家にて、魚を乞ひてすよめたりけり。件の魚の主後に夢に見るやう、恐しけなるものども、その邊の在家をしるしけるに、我家をしるしのぞきければ、尋ねぬる所に使のいはく、永超僧都に魚を奉る所なり、さてしるしのぞくといふ。其年この村の在家、悉く疫病をして死ぬるもの多かりけり。この魚の主が家唯一字、その事を免がるよによりて、僧都の許へ参り向ひてこのよしを申す。

僧都このよしを聞きて、被物一重たびてぞかへされける。

了延房に實因湖水の中より法文の事

これも今は昔、了延房阿闍梨日吉の社へ参りて歸る、唐崎の邊を過ぐるに、有相安樂行、此依觀思といふ文誦したりければ、浪中に散心誦法花、不入禪三昧と、末の句をば誦する聲あり。不思議の思をなして、如何なる人のおはしますぞと問ひければ、奥房僧都實因と名のりければ、汀に居て法文を談じけるに、少々僻事ども答へければ、これは僻事なり、いかにと問ひければ、よく申すところ思ひ候へども、生をへだてぬれば力及ばぬことなり、我なればこそ、このほども申せといひけるとか。

慈惠僧正戒壇つきたる事

これも今は昔、慈惠僧正は近江の國淺井郡の人なり。叡山の戒壇を、人夫かなはざりけ

○古事談卷三參
照
有相安樂行云々
一四岳法華儀法
中の語

○古事談卷三參
照
僧正一原本「僧
都」とあり、活本
によりて改む

戒壇一戒を授受
する壇場

酔むつかり一酔
にあひて豆の怒
る意よりいふ
にがみ一酸の上
ること

こと事一他事

あざまず一整頓
せす

れば、えつかざりけるころ、淺井の郡司は親しき上に、戒壇にて佛事を修する間、この僧正を請じ奉りて、僧膳のれうに、前にて大豆を煎りて酢をかけけるを、何しに酢をばかくるぞと問はれければ、郡司いはく、暖かなる時、酢をかけたれば酔むつかりとて、にがみてよくはさまるとなり、しからざれば滑りて挟まれぬなりといふ。僧正のいはく、いかなりとも、なじかは挟まぬやうやあるべき、投げやるとも挟み喰ひてんとありければ、いかでさる事あるべきとあらがひけり。僧正勝ち申しなば、こと事あるべからず、戒壇をつきて給へとありければ、易き事とて煎大豆を投げ遣るに、一間ばかり退きて居給ひて、一度も落さず挟まれけり。見るものあざまずといふことなし。柚の實の只今しほり出したるをまぜて、投げて遣りたるをぞ、挟みすべらかし給ひたりけれど、おとしもたてず、又やがて挟み留め給ひける。郡司一家廣きものなれば、人数をおこして、不日に戒壇をつきてけりとぞ。

宇治拾遺物語 卷第五

四の宮河原地藏の事

袖くらべ—袖と袖とをさし合せて袖中にて指を握り價を定むるよりいふにや

天帝釋—帝釋天に同じ

これも今は昔、山科の道づらに、四の宮河原といふ所にて、袖くらべといふ商人集る所あり。その邊の下種ひすのありける、地藏菩薩を一體作り奉りたりけるを、開眼かいがんもせて櫃ひつにうち入れて、奥の部屋などおほしき所に納め置きて、世のいとなみに紛れて程經にければ、忘れにけるほどに、三四年ばかり過ぎにけり。或夜夢に大路を過ぐる者の、聲高こゝろたかに人呼ぶ聲のしければ、何事ぞと聞けば、地藏こそと高くこの家の前にていふなれば、奥の方かたより何事ぞと答ふる聲すなり。明日天帝釋の地藏會し給ふには参らせ給はぬかといへば、この小家のうちより、参らんと思へどまだ目のあかねばえ参るまじくといへば、かまへて参り給へといへば、目も見えねばいかでか参らんといふ聲すなり。うち驚きて

思ひまゐらすに—「思ひまゐらすに」の誤か
見え給ふ—夢に見え給ふ

何のかくは夢に見えつるかと思ひまゐらすに、あやしくて、夜明けて奥の方をよく見れば、この地藏納めて置き奉りたりけるを、思ひ出して見出したけり。これが見え給ふにこそと驚き思ひて、急ぎ開眼し奉りけりとなん。

伏見修理大夫の許へ殿上人ども行きむかふ事

沈地の机—沈香の木地にて作れる食卓

うつしの鞍—唐鞍を撰して作れる鞍
鞍懸—鞍を懸け置く事

これも今は昔、伏見修理大夫の許へ、殿上人二十人ばかり押し寄せたりけるに、俄にさわぎけり。さかなもととりあへず、沈地の机に時の物どもいろく、たど推し量るべし。盃たびくになりて、おのく戯れ出でける。厩うまやに黒馬の額少し白きを、二十四立てたりけり。うつしの鞍二十具、鞍懸あそにかけたりけり。殿上人酔ひ亂れて、おのくこの馬にうつしの鞍置きて、載せて返しにけり。つとめて、さても昨日きのういみじくしたるものかといひて、いざ又押し寄せんといひて、又二十人押し寄せたりければ、このたびはさる體ていにして、俄なるさまは昨日にかはりて、炭櫃すすびをかざりたりけり。厩を見れば、黒栗毛

儲人―富める人

なる馬をぞ二十匹まで立てたりける。これも額しろかりけり。大かたかばかりの人はなかりけり。これは宇治殿の御子におはしけり。されど君だち多くおはしましければ、橘俊遠といひて、世の中の徳人ありけり。その子になして、かよるさまの人にぞなさせ給うたりけるとぞ。

以長物忌の事

以長―傍訓これながけもちながの訓なるべし、巻八にはもちながとあり
宇治左大臣―頼長
かいたて―書立にて、物忌と礼に書きて戸につけ置く也
仁王講―仁王經を講説する法會

これも昔、大膳亮大夫橘以長といふ藏人の五位ありけり。宇治左大臣殿より召しありけるに、今明日はかたき物忌を仕る事候ふと申したりければ、こはいかに、世にある者の物忌といふ事はある、慥に参られよと召し厳しかりければ、恐れながら参りにけり。さるほどに十日ばかりありて、左大臣殿によにしらぬかたき物忌出で來にけり。御門のはざまにかいたてなどして、仁王講行はる僧も、高陽院の方の土戸より童子なども入れずして、僧ばかりぞまゐりける。御物忌ありとこの以長聞きて、急ぎ参りて土戸より

やうれしれちよ
―ア汝等よ
職事―藏人

参らんとするに、舍人二人居て、人な入れそと候ふとて、立ち向ひたりければ、やうれおれらよ、召されて参るぞといひければ、これらもさすがに職事にて常に見れば、力およばで入れつ。参りて藏人所に居て、何となく聲高に物言ひ居たりたりけるを、左府聞かせ給ひて、この物言ふは誰ぞと問はせ給ひければ、盛兼まうすやう、以長に候ふと申しければ、いかにかばかりかたき物忌には、昨夜より参り籠りたるかと、尋ねよと仰せければ、行きて仰せの旨をいふに、藏人所は御所より近かりけるに、くはくと大聲して憚らず申すやう、過ぎ候ひぬる頃、私に物忌仕りて候ひしに召され候ひき、物忌のよしを申し候ひしを、物忌といふことやはある、慥に参るべきよし仰せ候ひしかば、参り候ひにき、されば物忌といふことは候はぬと、知りて候ふなりと申しければ、聞かせ給ひて、うちうなづき、物も仰せられて止みにけりとぞ。



範久阿闍梨西方を後にせざる事

これも今は昔、範久阿闍梨といふ僧ありけり。山の楞嚴院りょうごんいんに住みけり。偏に極樂を願ふ。行住坐臥西方をうしろにせず、唾大小便西に向はず、入いり目をせなかに負はず、西坂より山へのほる時は、身をそばだてて歩む。常にいはく、侍るゝ事必ず傾かたく方にあり、心を西方にかけんに、何ぞ心ざしを遠けざらん、臨終正念疑はずとなん言ひける。往生傳に入るとか。

陪従家綱兄弟互に謀りたる事

これも今は昔、陪従べいじゆうはさもこそはといひながら、これは世になき程の猿樂さるがくなりけり。堀河院の御時、内侍所の御神樂の夜仰せにて、今宵めづらしからん事仕れと仰せありければ、職事家綱を召して、このよし仰せけり。承りて何事をかせましと按じて、弟行綱を片隅

山一歌山

臨終正念一臨終の際平常の志念錯亂せざるをいふ
往生傳に入るとか一續本朝往生傳にこの阿闍梨の傳あり
○十訓抄第七卷照
陪従一賀茂春日八幡などの祭日勅使に連れて舞人樂人その社に参りて歌舞あり、舞人は近衛の將曹府生な

リ、その婦人に
従ひて警衛の役
を勤むるを陪從
といふ

ふぐりー陰襲
庭火ー神樂の時
禁庭にたく響火

仰せを奉りー仰
せを承りの段か

人長ー神樂の辨
人陪從等の長

へ招き寄せて、かゝる仰せ下されたれば、わが按じたる事のあるはいかどあるべきといひければ、いかやうなる事をせさせ給はんぞといふに、家綱がいふやう、庭火しろく焼きたるに、袴を高く引き上げて、細脛を出して、よりにくく夜の更けてさりにくく寒きに、ふりちうふぐりをありちうあぶらんといいひて、庭火を三回ばかり走り廻らんとおもふ、いかどあるべきと言ふに、行綱がいはいく、さも侍りなん、但しおほやけの御前にて、細脛搔き出してふぐりあぶらなどさぶらはんは、便なくや候ふべからんと言ひければ、家綱誠にさいはれたり、さらば別事をこそせめ、かしこう申し合せてけりといひける。殿上人など仰せを奉りたれば、今宵いかなる事をせんずらんと、目をすまして待つに、人長家綱めすと召せば、家綱出でて、させる事なきやうにて入りぬれば、上よりもその事となきやうに思召すほどに、人長また進みて、行綱召すと召す時、行綱誠にさむけなる氣色をして、膝を股まで搔き上げて、細脛を出して、わなよき寒けなる聲にて、よりによりに夜の更けて、さりにくく寒きに、ふりちうふぐりをありちうあぶらんといいひて、

この事さのみぞ
ある一彼の件は
あれだけの事也
還立ー祭典より
還りて更に宮中
にて神樂を備さ
るゝ事をいふ
竹の臺ー清沙殿
の前なる或竹の
臺
竹豹ー御抄に
「尻箱事、将人之
時竹豹皮不懼之
云々」とあり、尻
箱より思ひつき
し飯にや
家綱ことにもあ
らず云々十訓
抄には、家綱面
白かりをん手の
かざりはやさ

庭火を十回ばかり走り廻りたるに、上より下さまに至るまで、大方どよみたりけり。家綱片隅に隠れて、きやつに悲しう謀られぬるこそとて中たがひて、目も見合はせずして過ぐる程に、家綱思ひけるは、謀られたるはにくけれど、さてのみ止むべきにあらずと思ひて、行綱にいふやう、この事さのみぞある、さりとて兄弟の中たがひはつべきにあらずといひければ、行綱喜びて行きむつびけり。賀茂の臨時の祭の還立に御神樂のあるに、行綱家綱にいふやう、人長めしたてん時、竹の臺のもとによりてそよめかんするに、あれはなんするものぞと囃い給へ、その時竹豹ぞくといひて、豹のまねを盡さんといひければ、家綱ことにもあらず、のきる囃さんとことうけしつ。さて人長立ち進みて、行綱めすといふ時に、行綱やをら立ちて、竹の臺のもとによりて、匍ひ歩いて、あれは何するぞやといはど、それにつきて、竹豹といはんと待つ程に、家綱、かれはなんぞのちくへうぞと問ひければ、只今いはんと思ふ竹豹をさきにいはれければ、言ふべきことなく、ふと逃けて走り入りにけり。この事上まで聞召して、なか／＼ゆよしき

んしとありての
きろはての
どりの眼か
あたり返報

二條の大宮一令
子、白河帝の皇
女
母代一母になり
て後見する人を
いふ
重任の功一國司
重任とて任期は
てたる後再びも
の守となる時に
は相當なる資金
を獻ずることな
るが、その金
をもて宮門等を
修葺するが例な
り、これを功と
いふ
つか柱一梁と陳
との間又は被開
の下などに立つ
る短き柱

興にてありけるとかや。さきに行綱に謀られたるあたりとぞいひける。

陪從清仲の事

これも今は昔、二條の大宮と申しけるは、白河院の宮鳥羽院御母代におはしましける。二條の大宮とぞ申しける。二條よりは北、堀川よりは東におはしましけり。その御所破れにければ、有賢大藏卿、備後の國をしられける重任の功に修理しければ、宮も外へおはしましにけり。それに陪從清仲といふもの常にさぶらひけるが、宮おはしまさねども、猶御車やどりの妻戸に居て、古きものはいはじ、新しうしたるつか柱、立部などをさへ破りたきけり。この事を有賢、鳥羽院に訴へ申しければ、清仲を召して、宮渡らせおはしまさぬになほとまり居て、古物新物、毀ちたくなるはいかなることぞ、修理する者訴へ申すなり、宮しもおはしまさぬに、猶籠り居たるは何事によりてさぶらふぞ、子細を申せと仰せられければ、清仲申すやう、別の事に候はず、薪につきて候ふなりと申しけれ

春日の祭云々
春日の祭に神馬
と共に走馬を奉
納する例あり、
その走馬に乗る
者を乘尻といふ
清仲はかりかう
一説あるべし

ば、大方これほどの事、とかく仰せらるゝに及ばず、速に追ひ出せとて、笑はせおはしましけるとかや。この清仲は、法性寺殿の御時、春日の祭の乗尻に立ちけるに、神馬使おのくさはりありて、事缺けたりけるに、清仲はかりかう勤めたりし者なれども、事かけにたり。あひかまへてつとめよ、せめて京ばかりをまれ、事なきさまに計らひ勤めよと仰せられけるに、畏まりて承りぬと申して、やがて社頭に参りたりければ、返すく感じ思召す。いみじう勤めて候ふとて、御馬を賜ひたりければ、伏し轉び喜びて、この定に候はど、定使を仕り候はどやと申しけるを、仰せつくものも候ひあふものどもも、ゑつほに入りて笑ひ罵りけるを、何事ぞとたづねありければ、云々と申しけるに、いみじう申したりとぞ仰事ありける。

假字曆あつらへたる事

これも今は昔、ある人の許になま女房のありけるが、人に紙乞ひて、そこなりける若き

假字曆かざにかになに
て書ける曆
かん日、くそ日
一坎日かんに日
て、坎日は外出
を因とし、因會
日は萬事に因な
りといふ日
これぞあれば一
品物あれば一
やうがる標あ
るにて、一風變
りたる意
はこ一大便
ながく五日一長
く續く因會日
よぢりナぢり一
展轉てんてんするこ
と

○此語狂言二千
石に似通へる所
あり
一定、たしかに

僧に、假字曆書きてたべといひければ、僧易き事といひて書きたりけり。初つ方はうるはしく、かみほとけによし、かん日くそ日など書きたりけるが、やうく末ざまになりて、あるひは物喰はぬ日などかき、又これぞあればよく喰ふ日など書きたり。この女房やうがる曆かなとは思へども、いとかうほどには思ひよらず、さる事にこそと思ひてそのまよに違へず。又あるひははこすべからずと書きたれば、いかにとは思へども、さこそあらめと、念じて過すほどに、ながくそ日のやうにははこすべからずくと續き書きたれば、二日三日までは念じ居たるほどに、大かた堪ゆべきやうもなければ、左右の手にてしりをかゝへて、いかにせんくと、よぢりすぢりする程に、物も覺えずしてありけるとか。

實子にあらざる人實子のよしたる事

これも今は貴、その人の一定子とも聞えぬ人ありけり。世の人はそのよしを知りて、を

出居一客間

さくりもよと
泣く泣く泣く
泣く泣く泣く

こがましく思ひけり。その父と聞ゆる人亡せにける後、その人の許に年比ありける侍の、妻に具して田舎へ往にけり。その妻うせにければ、すべきやうもなくなりて京へ上りにけり。萬あるべきやうもなく便なかりけるに、この子といふ人こそ一定のよしいひて、親の家に居たなれと聞きて、この侍まるりたりけり。故殿に年比候ひし某と申す者こそ参りて候へ、御見参に入りたかり候ふといへば、この子さる事ありとおほゆ、暫しさぶらへ御對面あらんするぞといひ出したれば、侍しおほせつと思ひて、ねぶり居たる程に、近う召し使ふ侍出て来て、御出居へ参らせ給へといひければ、喜びて参りにけり。この召しつぎしつる侍、暫し候はせ給へといひて、あなたへ行きぬ。見まはせば、御出居のさま、故殿のおはしましつらひにつゆかはらず、御障子などは少しふりたるほどにやと見る程に、中の障子引きあくればきと見あけたるに、此子と名乗る人歩み出でたり。これをうち見るまよに、此年比の侍さくりもよと泣く、袖もしほりあへぬほどなり。このあるじ、いかにかくは泣くらんと思ひて、つい居て、こはなどかく泣くぞ

綿綿ふくよかなる
きぬきぬ一一杯
入りたる厚厚き衣
服
今はさうなし
もはや仔細なし
後見後見に「「に」は
「「を」の」調調なるべ
し
ひげなるひげ「「ひ
くげなるひ」の」調調
か

と問ひければ、故殿のおはしまししに違たがはせおはしまさぬが哀あはれに覺えてといふ。さればこ
そ我も故殿には違はぬやうに覺ゆるを、この人々のあらぬなど云ふなる、あさましき事と
思ひて、この泣く侍にいふやう おのれこそ殊の外ことごとに老いにけれ、世の中はいかやうに
て過ぐるぞ、我はまだ幼わかくて母の許にこそありしかば、故殿のありやう能くも覺えぬな
り、おのれをこそ故殿と頼みてあるべかりけれ、何事も申せ、又偏ひとへに頼みてあらんずる
ぞ、まづ當時たうじ寒けなり、この衣きぬ著よとて、綿綿ふくよかなるきぬ一つ脱はぎて賜たまひて、今は
さうなし、これへ参るべきなりといふ。この侍しおほせて居たり。昨日今日のもののか
く言はんだにあり、いはんや故殿の年比のもののかくいへば、家主いへぬし笑みて、この男の年
比ひずぢなくてありけん、不便ふびんのことなりとて、後見後見に召し出でて、これは故殿のいとほ
しくし給ひしものなり、まづかく京に旅立ちたるにこそ思ひはからひて、沙汰しやれと
いへば、ひげなるひげこゑにてむと答へて立ちぬ。この侍は、虚言うそせじといふをぞ佛ほとけに申し
切りてける。さてこのあるじ、我を不定ふじやうけにいふなる人々呼よびて、この侍に、事の子細

得意得意の人々
心
やすき知人

もとも一一至極しごくよ
し
髪髪はげ「「髪髪は
げ」又は「「髪髪は
げ」の調調なるべし
練色ねいろ一一薄うす賀が色いろ
事ことうるはしく
端はな然ぜんと

いはせて聞かせんとて、後見後見めし出でて、明後日あしたこれへ人々渡らんと言はるよに、さる
やうに引きつくるひて、もてなしすさまじからぬやうにせよと言ひければ、むと申して
様々さまざまに沙汰し設けたり。この得意得意の人々、四五人ばかり來集りにけり。あるじ常よりも
引きつくるひて、出で合ひて、御酒度々参りて後言あとごふやう 我親の許に、年比としごひ生なひ立ち
たる者候ふをや、御覽ごらんすべからんといへば、この集りたる人々、心地よけに顔先かほ赤あかめ合
ひて、もとも召し出さるべく候ふ、故殿に候ひけるも、かつは哀あはれに候ふといへば、人やあ
る、何がしまるれといへば、ひとり立ちて召すなり。見れば鬚ひげはけたる男の六十餘ばかり
なるが、まみのほどなど虚言うそすべうもなきが、打ちたる白しろき狩衣かりぎぬに、練色ねいろの衣きぬのさるほど
なる著たり、これは賜たまはりたる衣と覺ゆる、召し出されて、事ことうるはしく、扇あふぎを笏しやくに取り
てうづくまり居たり。家主のいふ やうやくこよの父ちちのそのかみより、おのれは生なひた
ちたるものぞかしなどいへば、むといふ。見えにたるかいかといへば、この侍いふやう、
その事に候ふ、故殿には十三より参りて候ふ、五十まで夜よる晝ひる離はなれまるらせ候はず、故殿

無下に候ひし時
一病重かりし時
大造一便器

の小冠者くくと召しさぶらひき 無下に候ひし時も、御跡に臥せさせおはしまして、夜中曉、大造おほつは参らせなど候ひしその時は、侘しう堪へ難く覺え候ひしが、後れ参らせて後のちは、などさ覺え候ひけんと、悔しうさぶらふなりといふ。あるじのいふやう、そもくひき一日汝を呼び入れたりし折、我障子を引きあけて出でたりし折、うち見上げてほろくと泣きしは、いかなりし事ぞといふ。その時侍がいふやう、それも別の事べつに候はず、田舎にさぶらひて、故殿うせ給ひにきと承りて、今一度参りて、御有様をだにも拜み候はんと思ひて、おそれく参り候ひし、さうなく御出居おんいでへ召し出させおはしまして候ひし、大方辱く候ひしに、御障子を引き開けさせ給ひ候ひしを、きと見上げ参らせて候ひしに、御鳥帽子おんとりぼうしの眞黒まじろにて、まづさし出でさせおはしまして候ひしが、故殿のかくの如く出させおはしましたりしも、御鳥帽子は眞黒に見えさせおはしましたが、思ひ出でられおはしまして、覺えず涙のこほれ候ひしなりといふに、この集りたる人々も笑あはを含みたり。又このあるじも氣色けしきかはりて、さて又いづくか故殿には似たるといひければ、この侍そ

逃げ失せにけれ
一原本「逃げわ
ちひにけれ」と
あり、活本によ
りて改む

經輔一隆家の子

むご一無期むごの字

の外は、大かた似させおはしましたる所おはしまさずと言ひければ、人々ほよゑみて、一人二人づつこそ逃げ失せにけれ。

御室戸僧正の事並一乗僧正の事

これも今は昔、一乗いちじょう寺僧正じそうじやう、御室戸僧正みむろのぞうじやうとて、三井の門流にやんごとなき人おはしけり。御室戸の僧正は、隆家帥たかいかみの第四の子なり。一乗寺僧正は、經輔大納言つねすけだいごんの第五の子なり。御室戸をば隆明といふ、一乗寺をば増譽といふ。この二人おのくたよ尊たよくて生い佛ぼつなり。御室戸はふとりて修行するにおよばず、偏に本尊の御前を離れずして、夜晝行よるひらふ鈴かねの音絶ゆる時なかりけり。おのづから人の行き向ひたれば、門をば常に鎖かぎしたる、門を叩く時、たまくと人の出で来て誰たれぞと問ふ、云々いふいふの人の参らせ給ひたり、もしは院の御使にさぶらふなどいへば、申しさぶらはんとて、奥へ入りて、むごむごにある程鈴かねの音しきりなり。さてとばかりありて、門の關木くわんのきをばづして、扉片ひらつ方を入ひとり入るほどあけた

明障子（今いふ障子のこと）

り。見入るれば庭には草繁くして、道踏みあけたる跡もなし。露を分けて入りて上りたれば廣廂（ひろびろ）一間あり、妻戸（つまど）に明障子（あかりしやうじ）立てたり。煤（すす）け通りたる事、いつの世に張りたりとも見えす。暫しばかりありて、墨染（すみぞめ）著たる僧足音もせで出で来て、暫しそれにおはしませ、行ひのほどに候ふといへば、待ち居たる程に、とばかりありて、内よりそれへ入らせ給へとあれば、煤（すす）けたる障子を引き開けたるに香の煙（か）のゆり出でたり。萎（な）え通りたる衣に、袈裟（けさ）なども所々破れたり。物も言はで居られたれば、此人も如何にも思ひて向ひ居たるほどに、拱（こまね）きて少しうつぶしたるやうにて居られたり。暫しあるほどに、行ひのほど能くなり候ひぬ。さらば疾く歸らせ給へとあれば、言ふべき事もいはで出でぬれば、又門やがて鎖（か）しつ。これは偏に居おこなひの人なり。一乗寺の僧正は、大峯は二度通られたり。蛇（じや）を見る法行はる、又龍の駒などを見などして、あらぬ有様をして行ひたる人なり。その坊は、一二町ばかりよりひしめきて、田樂（でんがく）猿樂（ざるがく）などひしめき、隨身（ずゑん）衛府（ゑいぶ）の男どもなど出で入りひしめく。物賣ども入り来て、鞍太刀（くらたぢ）さまざまの物を賣るを、かれが

見つきしたりける（見せめたりと也）
さきく云々（誤脱あるにや解し難し）

この僧（活本に此三字なし）
納殿（納戸の如き所）
さうぞきて（一様東して）
かぶとして（一田樂師のかぶる鳥兜の類をつけて）

いふまよに價（あたい）を賜（たま）ひければ、市をなしてぞ集（つひ）ひける。さてこの僧正の許に、世の寶は集（つひ）ひあつまりたりけり。それに呪師（じゆし）小院（せういん）といふ童を愛せられけり。鳥羽の田植に見つきしたりける、さきくいくひにのりつよ、みつきをしける男（おとこ）、田植に僧正言ひ合せて、このごろするやうにあふきにたちくして、こはよより出でたりければ、大方見る者も驚きくしあひたりけり。この童あまりに寵愛（ちゆうあい）して、よしなし法師になりて、夜晝離れず附きてあれとありけるを、童いかど候ふべからん、今暫しかくて候はどやと言ひけるを、僧正猶いとほしさに、たどなれとありければ、童しぶく（に法師になり）にけり。さて過ぐる程に、春雨うちそよぎて徒然（つれづれ）なりけるに、僧正人を呼びて、あの僧の装束はあるかと思はれければ、この僧、納殿（なうだん）にまだ候ふと申しければ、取りて來（こ）といはれけり。持て來たりけるを、これを著よといはれければ、呪師小院見苦しう候ひなんといなみけるを、唯著よと責めの給ひければ、片方（かたがた）へ行きてさうぞきて、かぶとして出でたりけり。つゆ昔に變らず、僧正うち見てかひを作られけり。小院又おもがはりして立てりけるに、

かひを伴われけり泣顔するこ
と
はしりて田樂
の曲の名なるべ
し
かたさちけ同
上
せうのなか云々
不明

氷魚—白魚のご
ときもの
上うのこと—用
事

僧正いまだはしりて御覺ゆとありければ、覺えさぶらはず、但しかたさらはの調ぞ、よくしつけて來しことなれば、少し覺え候ふといひて、せうのなかわりてとほる程を走りてとぶ、かぶと持ちて一拍子に渡りたりけるに、僧正聲を放ちて泣かれけり。さてこちこよと呼び寄せて、うち撫でつよ、何しに出家をさせけんとして泣かれければ、小院もさればこそ、今暫しと申し候ひしものをといひて、裝束ぬがせて、障子の内へ具して入られにけり。その後は、いかなる事かありけん知らず。

或僧人の許にて氷魚ぬすみくひする事

これも今は昔、ある僧人の許へ往きけり。酒など進めけるに、氷魚始めて出で來たりければ、主人めづらしく思ひてもてなしけり。主人ようのことありて内へ入りて、又出でたりけるに、この氷魚の殊の外に少くなりたりければ、主人いかにも思へども、いふべきやうもなかりければ、物語するたりけるほどに、この僧の鼻より、氷魚の一つふと出



でたりければ、主人怪しうおほえて、その鼻より氷魚の出でたるは、いかなる事にかと言ひければ、とりあへず、此頃の氷魚は目鼻より降り候ふなるぞと言ひたりければ、人皆はとわらひけり。

仲胤僧都地主権現説法の事

これも今は昔、仲胤僧都を、山の大家日吉の二宮にて、法華經を供養しける導師に、請じたりけり。説法えもいはすして、はてがたに地主権現の中せと候ふはとも、此經難持、若暫持者、我即歡喜、諸佛亦然といふ文を、うちあけて誦して、諸佛といふ處を地主権現の申せとは、我即歡喜、諸神亦然といひたりければ、そこら集りたる大衆異口同音にあめきて、扇を開きつかひたりけり。これを或人、日吉の社の御正體を顯はし奉りて、おのおの御前にて千日の講を行ひけるに、二宮の御料のをり、或僧、この句を少しも違へずしたりける。ある人仲胤僧都に、かよる事こそありしかと語りければ、仲胤僧都きやら

二宮一傳教大師
大物主神を山上
に移し奉りて日
吉大宮といひ、
前よりありし本
社を二宮とい
ふ、地主権現は
この二宮をり
はてがた一移り
頃
此經難持云々
法華經見寶塔品
の偈文
あめき一うめき

きやらと笑ひて、これはかうくの時、仲胤がしたりし句なり。えいくと笑ひて、大方は此頃の説經をば、犬の糞説經といふぞ、犬は人の糞を喰ひて糞をするなり、仲胤が説法を取りて、此頃の説經師はすれば、犬の糞説經といふなりといひける。

大二條殿に小式部内侍歌よみかけ奉る事

これも今は昔、大二條殿、小式部内侍おほしけるが、絶間がちになりける頃、例ならぬ事おはしまして、久しうなりてよろしくなり給ひて、上東門院へ参らせ給ひたるに、小式部臺盤所に居たりけるに、出でさせ給ふとて死なんとせしは、など問はざりしごと、仰せられて過ぎ給ひけるに、御直衣の裾を引き留めつと申しけり。

死ぬばかり歎きにこそは歎きしかいきて問ふべき身にしあらねば
堪へずおほしけるにや、かきいだきて、局へおはしまして、寝させたまひにけり。

○後草紙卷三參照

大二條殿一歌通

上東門院一影字

死ぬばかり云々
一此歌後拾遺に
いづ

山横川賀能地藏の事

これも今は昔、山の横川よかほに賀能知院かのちゐんといふ僧、極めて破戒無慙はかいむげんの者にて、晝夜に佛の物を取りつかふ事をのみしけり。横川の執行しゆぎやうにてありけり。政所まんどころへ行くとして、塔たふのもとを常に過ぎありきければ、塔のもとに、ふるき地藏の物ものの中に棄て置きたるを、きと見奉りて、時々きぬかぶりしたるをうちぬぎ頭を傾けて、少しく敬ひ拜みつゝ行く時もありけり。かよるほどに、かの賀能はかなく失せぬ。師の僧都そうどうこれを聞きて、かの僧破戒無慙の者にて、後世定めて地獄に落ちん事疑なしと、心憂がり哀み給ふ事限なし。かよるほどに、塔のもとのの地藏こそこの程見え給はね、いかなる事にかと、院内の人々言ひ合ひたり。人の修理し奉らんとて、取り奉りたるにやなどいひける程に、この僧都の夢に見え給ふやう、この地藏の見え給はぬは、如何なる事ぞと尋ね給ふに、傍かたはらに僧ありていはく、この地藏菩薩、早う賀能知院かのちゐんが無間地獄むげんじやくに落ちしその日、やがて助けんとて、あひ

執行—事務を執る役
政所—荘園の貢米等を抄汰する役所
きぬかぶり—衣被なり、一體は女のなすべきものなれど僧家にも用ゐるなり

無間地獄—八大地獄の隨一にして

て極重罪業の者
こゝに墮つ、阿鼻地獄ともいふ

具して入り給ひしなりといふ。夢心地むごんちにいとあさましくて、いかにして、さる罪人つとにんには具して入り給ひたるぞと問ひ給へば、塔のもとを常に過ぐるに、地藏を見やり申して、時々拜み奉りし故なりと答ふ。夢覺めて後、自ら塔のもとへおはして見給ふに、地藏誠に見え給はず。さはこの僧に、誠に具しておはしたるにやと思す程に、その後又僧都の夢に見給ふやう、塔のもとにおはして見給へば、この地藏立ち給ひたり。これは失せさせ給ひし地藏の、如何にして出で來給ひたるぞとの給へば、又人のいふやう、賀能具して地獄へ入りて、助けて還り給へるなり、されば御足の焼け給へるなりといふ。御足を見給へば、誠に御足黒う焼け給ひたり。夢心地むごんちに誠にあさましき事限なし。さて夢覺めて、涙留なみどまらずして、急ぎおはして塔のもとを見給へば、現うつしにも地藏立ち給へり、御足を見れば誠に焼け給へり。これを見給ふに、哀に悲しき事がぎりなし。さて泣くく、この地藏を抱き出し奉り給ひてけり、今におはします。二尺五寸ばかりの程にこそと人にかたりし、これ語りける人は拜み奉りけるとぞ。

宇治拾遺物語 卷第六

○日本圖書記卷
下参照

廣貴妻の訴に依りて閻魔王宮へめさるゝ事

これも今は昔、藤原廣貴といふ者ありけるに、死にて閻魔の廳に召されて、王の御前と
思しき所に参りたるに、王の給ふやう、汝が子を孕みて産をしそなひたる女死にたり、
地獄に落ちて苦みを受くるに、うれへ申す事のあるによりて、汝をば召したるなり、ま
づさる事あるかと問はるれば、廣貴さる事さぶらひきと申す。王の給はく、妻のうれへ
申す心は、われ男に具して共に罪をつくりて、しかもかれが子を産みそなひて、死して
地獄に落ちて、かよる堪へ難き苦みを受け候へども、聊も我後世をも弔ひさぶらはず、さ
れば我一人苦みを受けさぶらふべきやうなし、廣貴をも諸共に召して、同じやうにこそ
苦みを受けさぶらはめと、申すによりて召したるなりとの給へば、廣貴が申すやう、この
うれへ一断へ

訴^{うたへ}申^ます事尤も道理^{ことわり}に候^まふ、公^{おほ}私^{やけ}世^{わたくし}をいと名^なみ候^まふ間、思^{おも}ひながら後世^{ごせい}をば弔^{なぐさ}ひ候^まは
で、月日はかなく過ぎ候^まふなり、但し今におき候^まひては、共に召^よされて苦みを受け候^まふと
も、彼^かがために苦みの助かるべきに候^まはず、さればこの度は暇^{ひま}を賜^{たま}はりて、婆^{しやほ}婆^ばに罷^かり
かへりて、妻のために萬^まを捨てて、佛經^{ぶつぎやう}を書^くき供養^{くやう}して弔^{なぐさ}ひ候^まはんと申せば、王^{わう}暫^{しば}しさ
ぶらへとのたまひて、かれが妻を召^よし寄せて、汝^なが夫^{おつと}廣貴^{ひろき}が申^ますやうを問^とひ給^{たま}へば、實^{まこと}
に經佛^{ぎやうぶつ}をだに書^くき供養^{くやう}せんと申し候^まはど、疾^{はや}く免^{ゆる}し給^{たま}へと申す時に、又廣貴^{ひろき}を召^よし出^で
て、申^ますまゝの事を仰^{おほ}せ聞^きかせて、さらば此度^{このたび}は罷^かりかへれ、慥^{たしか}に妻のために佛經^{ぶつぎやう}を書^く
き供養^{くやう}して弔^{なぐさ}ふべきなりとて歸^{かへ}し遣^{つか}はす。廣貴^{ひろき}かゝれども、これはいづく誰^{たれ}がのたまふ
ぞとも知らず、免^{ゆる}されて座^ざを立ちて歸^{かへ}る道^{みち}にて思^{おも}ふやう、この玉^{たま}の簾^{すだれ}の内に居^いさせ給^{たま}ひ
て、かやうに物の沙汰^{さた}して、我^{われ}をかへさるゝ人は誰^{たれ}にかおはしますらんと、いみじく覺^{おぼ}
束^たなく覺^{おぼ}えければ、又参^{まゐ}りて庭^{にわ}に居^いたれば、簾^{すだれ}のうちより、あの廣貴^{ひろき}は歸^{かへ}し遣^{つか}はしたる
にあらずや、如何^{いか}にして又参^{まゐ}りたるぞと問^とはるれば、廣貴^{ひろき}が申^ますやう、はからざるに御

汝^なが夫^{おつと}一^{いつ}「汝^なが」
の二字一本なし
廣貴^{ひろき}が申^ますやう
を問^とひ給^{たま}へば一
廣貴^{ひろき}が申^ますやう
を語りて妻^{つま}に問^と
ひ給^{たま}へば

御



閻浮提一阿彌那
洲即ち吾人の住
む世界

桃園大納言一忠
平の男師氏

一條攝政殿一伊
尹

恩を蒙りて、歸り難き本國へ還り候ふ事を、いかにおはします人の仰せとも、え知り候はで罷り候はんことの、極めていぶせく口惜しく候へば、恐れながらこれを承りに、又参りて候ふなりと申せば、汝不覺なり、閻浮提えんぶだいにしては、我を地藏菩薩と稱すとの給ふを聞きて、さは閻魔王と申すは地藏にこそおはしけれ、この菩薩に仕うまつり候ふが、地獄の苦みをば免がるべきにこそあんめれと思ふ程に、三日といふに生きかへりて、その後妻のために佛經を書き供養してけりとぞ日本法華驗記に見えたるとなん。

世尊寺に死人を掘りいだす事

今は昔、世尊寺といふ所は、桃園大納言住み給ひけるが、大將になる宣旨かうぶり給ひにければ、大變のあるじの料かきに修理し、まづは祝し給ひしほどに、明後日あさつてとて俄に失せ給ひぬ。つかはれ人皆出で散りて、北の方、若君ばかりなんすこくて住み給ひける。その若君は、主殿まのどののかみちかみつと云ひしなり。この家を一條攝政殿取り給ひて、太政大

したうづー樹
臣になりて、大變行はれける。坤の角に塚のありける、築地を築き出して、その角はしたうづがたにぞありける。殿そこに堂を建てん、この塚を取り捨てて、その上に堂を建てんと定められぬれば、人々も塚のために、いみじう功德になりぬべき事なりと申しければ、塚を掘り崩すに、中に石の唐櫃あり。開けて見れば、一尼の年二十五六ばかりなる色美しくて、唇の色などつゆ變らで、えもいはず美しけなる、寝入りたるやうにて臥したり。いみじう美しき衣の、金の坏麗しくて据ゑたりけり。入りたるもの何も香しき事たぐひなし。あさましがりて、人々立ちこみて見るほどに、乾の方より風吹きければ、いろいろなる塵になんなりて失せにけり。金の坏より外の物つゆとまらず。いみじき昔の人なりとも、骨髪の散るべきにあらず。かく風の吹くに、塵になりて吹き散らされぬるは、希有のものなりといひて、そのころ人あさましがりける。攝政殿いくばくもなく失せ給ひにければ、この祟にやと人うたがひけり。

留志長者の事

○今昔三、留志長者語
たのもしき一富格なるをいふ心のくちをしき一音音なるをいふ

行器一食物を入れて持ち運ぶに用ふる圓き器
今關野中云々一
今昔には「我今新慶會、從酒大歡樂、逢遇毘沙門、亦勝天帝釋」とあり

今は昔、天竺に留志長者とて、世にたのもしき長者ありけり。大かた藏もいくらともなく持ちたのもしきが、心のくちをしきて、妻子にもまして、従者にも物喰はせ著する事なし。おのれ物のほしければ、人にも見せず隠して喰ふほどに、物の飽かず多くほしかりければ、妻にいふやう、飯酒菓物どもなど大らかにしてたべ、我につきて物をしまする慳貪の神祭らんといへば、物惜む心失はんとする、善き事と喜びて、いろくくに調じて、大らかに取らせければ、受け取りて、人も見ざらん所に行きて、よく喰はんと思ひて行器に入れ、ひさごに酒入れなどして持て出でぬ。此木のもとには鳥あり、彼所には雀ありなどえりて、人離れたる山の中の木の蔭に、鳥獸もなき所にて一人喰ひ居たり。心の樂しさ物にも似ずして誦するやう、今曠野中、食飯飲酒大安樂、猶過毘沙門天、勝天帝釋天、この心は今日人なき所にひとり居て、物を喰ひ酒を飲む安樂なる事、毘沙門帝釋に

も優りたりといひけるを、帝釋きと御覽じてけり。憎しと思しけるにや、留志長者が形に化し給ひて、かの家におはしまして、我山にて物惜む神を祭りたるしるしにや、その神はなれて、物の惜しからねばかくするぞとて、藏どもを開けさせて、妻子をはじめて、從者もそれならぬよその人々も、修行者乞食に至るまで、寶物どもを取り出してくばり取らせければ、皆々喜びて分け取りける程にぞ、實の長者はかへりたる。藏ども皆開けて、かく寶ども皆人の取り合ひたる、あさましく悲しき言はんかたなし。如何にかくはするぞと、罵れども、我と唯同じかたちの人出で来てかくすれば、不思議なる事限なし。あれは變化のものぞ、我こそそれよといへども聞き入るよ人なし。御門にうれへ申せば、母に問へと仰せあれば、母に問ふに、人に物くるよこそ我子にて候はめと申せば、するかたなし。腰のほどに、はよくそといふ物の跡ぞさぶらひし、それをしるしに御覽せよといふに、開けて見れば、帝釋それを學ばせ給はざらんやは、二人ながら同じやうに物の跡あれば、力なくて佛の御許に二人ながら参りたれば、その時帝釋もとの姿になりて、

はくそ一黒字
(ホクロ)

須陀羅果一譯して預流果といふ、見惑を斷じて初めて聖者の流類に入るをいふ

○今昔十六、清水二千度詣男打入雙六詣參照

御前におはしませば、論じ申すべきかたなしと思ふほどに、佛の御力にて、やがて須陀羅果を成じたれば、悪しき心離れたれば、物をしむ心も失せぬ。かやうに帝釋は、人を導かせ給ふ事はかりなし。そとろに長者が財を失はんとは、何しに思召さん、慳貪の業によりて、地獄に落つべきを哀ませ給ふ御志によりて、かくかまへさせ給ひけるこそめでたでけれ。

清水寺に二千度參詣の者雙六にうち入るゝ事

今は昔、人の許に宮仕してある生侍ありけり。する事のなきまよに、清水へ人まねして、千度詣を二度したりけり。その後いくばくもなくして、主の許にありける同じやうなる侍と雙六打ちけるが、多く負けて渡すべき物なかりけるに、いたく責めければ、思ひ侘びて我持ちたるものなし、只今貯へたる物としては、清水に二千度参りたる事のみなんある、それを渡さんといひければ、傍にて聞く人は、はかるなりと愚戯に思ひて笑ひける

を、この勝ちたる侍いと善きことなり、渡さば得んといひて、いなくしては受け取らじ
 精進三日してこのよし申して、おのれ渡すよしの文書きて渡さばこそ、受取らめとい
 ひければ、善き事なりと契りて、その日より精進して、三日といひける日、さはいざ清
 水へといひければ、この負侍まけさらい、この痴者しん者のに逢ひたるをかしと思ひて、喜びてつれて参
 りにけり。いふまゝに文かきて、御前にて師の僧呼びて、事のよし申させて、二千度参り
 つる事某に雙六にうちいれつと書きて取らせければ、受け取りつゝ喜びて、伏し拜み罷
 り出でにけり。その後幾程なくして、この負侍思ひかけぬ事にて捕へられて囚獄ひきやに居に
 けり。取りたる侍は、思ひかけぬ便たよりある妻つままうけて、いとよく徳つきて司つかさどなど成りて、
 たのもしくてぞありける。目に見えぬものなれど、誠の心をいたして受け取りければ、
 佛あはれと思し召したりけるなんめりとぞ人はいひける。

観音經蛇に化して人を助けたまふ事

○今昔十六、陸奥國盛取男依願

雙六にうちいれつゝ雙六の賭物として與へたるをいふ

昔時存命願書照

子をちるさん一鷹の子を乗よりとりちるさん

萬も知らず一萬事を忘れて

今は昔、鷹を役やくにて過ぐる者ありけり。鷹の離れたるを取らんとて、飛ぶに従ひて行きける程に、遙なる山の奥の谷の片岸に、高き木のあるに、鷹の巢くひたるを見つけて、いみじき事見おきたりと嬉しく思ひて、かへりて後、今はよき程になりぬらんと覺ゆる程に、子をおろさんとて又行きて見るに、えもいはぬ深山みやまの、深き谷の底ひもしらぬうへに、いみじく高き榎木えのきの枝は、谷にさしおほひたるが上かみに、巢をくひて子をうみたり、鷹巢のめぐりにしありく。見るに、えもいはずめでたき鷹にてあれば、子も善かるらんと思ひて、萬よろづも知らずのほるに、やうく今巢のもとに昇らんとするほどに、ふまへたる枝折れて谷に落ちいりぬ。谷の片岸にさし出でたる木の枝に落ちかゝりて、其木の枝をとらへてありければ、生きたる心地もせず、すべきかたなし。見おろせば底ひも知らず深き谷なり、見上ぐれば遙に高き峯なり、かきのほるべき方もなし。從者じゆうしやどもは谷に落ち入りぬれば、疑なく死ぬらんと思ふ。さるにても、いかゞあると思んと思ひて、岸の端はたへ寄りて、わりなく爪立つまたてて見おろしけれど、僅に見おろせば、底ひも知らぬ谷の底

石のそば一石の
角
かたそば一かた
はし
みじろく一動く
弘誓深如海一觀
音經傳文に「故
願音行、善願諸
方所、弘誓深如
海、應劫不思議」

に、木の葉繁く隔てたる下なれば、更に見ゆべきやうもなし。目くるめき悲しければ、暫しも見えぬ。すべき方なければ、さりとてあるべきならねば、皆家に歸りてかうくといへば、妻子ども泣き感へどもかひなし。あはぬまでも見に行かまほしけれど、更に道もおほえず。又おはしたりとも、底ひも知らぬ谷にて、さばかりのぞき萬に見しかども、見え給はざりきといへば、誠にさぞあるらんと、人々も言へばいかすなりぬ。さて谷にはすべき方なくて、石のそばの折敷の廣さにて、さし出でたるかたそばに尻をかけて、木の枝を挿へて、少しもみじろくべきかたなし。いさよかもはたらかば、谷に落ち入りぬべし。いかにもくせんかたなし。かく鷹飼を役にて世過ぐせど、幼くより觀音經を讀み奉り保ちたりければ、助け給へと思ひ入りて、偏に頼み奉りて、この經を夜晝いくらともなく讀み奉る。弘誓深如海とあるわたりを讀む程に、谷の底の方より、物のそよくと來る心地のすれば、何にかあらんと思ひてやを見れば、えもいはず大なる蛇なりけり。長さ二丈ばかりもあるらんと見ゆるが、さしにさして匂ひ來れば、我はこの蛇に喰

かつく一きう
じて

はれなんするなめり、悲しきわざかな、觀音助け給へとこそ思ひつれ、こはいかにしつることぞと思ひて、念じ入りてあるほどに、唯來に來てわが膝の許をすぐれど、我を呑まんと更にせず、唯谷より上さまへのほらんとする氣色なれば、いかどせん、唯これに取りつきたらば、のほりなんかしと思ふ心つきて、腰の刀をやはら抜きて、この蛇の背中に突き立てて、それにすがりて、蛇の行くまよに引かれて行けば、谷より峯の上さまに、こそくと登りぬ。その折この男離れてのくに、刀を取らんとすれど、強く突き立てければ、え抜かぬ程にひきはづして、背に刀さしながら、蛇はこそろと渡りて、向ひの谷にわたりぬ。この男嬉しと思ひて、家へ急ぎて行かんとすれど、この二三日いさよか身をも働かさず、物も喰はずしたれば、影のやうに瘦せさらほひつと、かつくとやうくにして家に行きつきぬ。さて家には、今はいかどせんとして、跡弔ふべき經佛のいとなみなどしけるに、かく思ひかけずよろほひ來たれば、驚き泣き騒ぐ事限なし。かうくの事と語りて、觀音の御たすけにてかく生きたるぞと、あさましかりつる事ども泣くく